

Conference Handbook 38

The Thirty-Eighth Conference

of

The English Linguistic Society

of Japan

November 7-8

2020

The English Linguistic Society of Japan

Conference Handbook 38

2020

The English Linguistic Society of Japan

会長

廣瀬幸生（筑波大学）

大会運営委員

木村宣美（委員長，弘前大学）

漆原朗子（副委員長，北九州市立大学）

五十嵐海理（龍谷大学），遠藤智子（東京大学），眞田敬介（札幌学院大学）

柚原一郎（東京都立大学），高梨博子（日本女子大学）

西山淳子（和歌山大学），藤川勝也（富山大学），前田雅子（西南学院大学）

茨木正志郎（関西学院大学），大関洋平（東京大学）

坂本祐太（明治大学），西口純代（小樽商科大学），本間猛（東京都立大学）

事務局

和田尚明（事務局長，筑波大学）

金谷優（事務局補佐，筑波大学）

小薬哲哉（広報委員会・国際春季フォーラム担当書記，大阪大学）

大澤舞（財務・学会賞委員会・理事会担当書記，獨協大学）

今野弘章（編集委員会担当書記，奈良女子大学）

五十嵐啓太（編集委員会担当書記，岩手県立大学）

田村敏広（大会運営委員会・評議員会担当書記，静岡大学）

第38回大会スケジュール

11月7日(土) 10:30 ～ 11:30 総会

12:30 ～ 18:20 研究発表(第1室 ～ 第3室)

11月8日(日) 9:30 ～ 11:45 ワークショップ(第1室・第2室)

13:00 ～ 15:10 特別講演(第1室 ～ 第3室)

研究発表 (11月7日(土) 12時30分より18時20分まで)

第1室

12:30	林 慎将	「Immediate Containment」	2
13:15	大塚知昇	「項の対併合に関する考察：経験主項と優位性効果の観点から」	6
14:00	田中章太	「収束性を伴うフェイズ」	10
14:45	三上 傑	「英語の There 受動文が許容する語順パターンに関する通時的変遷と主語移動の適用可能性」	14
15:30	北尾泰幸	「英語分裂文における凍結原理」	18
16:15	森山倭成	「In-situ focus 文の構造」	22
17:00	佐藤亮輔	「ラベル決定アルゴリズムによる日本語の複合語の統語的分析」	26

第2室

12:30	早野 薫	「形式と相互行為機能の適合：極性質問に対する応答の拡張に着目して」	30
13:15	松田佑治	「as N as 構文の N」	34
14:00	本多正敏	「英語の2項名詞句における極度性の役割とその理論的示唆」	38
14:45	前澤大樹	「「説得する」類動詞と多重二格構文」	42
15:30	志村春香	「現在完了進行形のもつ「結果説明的効果」について：認知文法的アプローチ」	46
16:15	佐藤らな	「形と意味の“ミスマッチ”を考える：認知文法からみたVすぎる構文」	50
17:00	植田正暢	「二重目的語構文が表す事象構造と所有代名詞の指示の関係について」	54

第3室

12:30	工藤和也	「共合成による同族目的語構文の派生」	58
13:15	西原俊明・古川武史	「反応目的語構文(ROC)の統語的・意味的特徴について」	62
14:00	Oda, Toshiko	“Interpretive Economy and presuppositions”	65
14:45	Matsuda, Asako	“Indexical structures of “bound” plurals”	69
15:30	遠峯伸一郎	「近代英語における借用語動詞の受容について —persuadeに焦点を当てて—」	73
16:15	平田拓也	「対格主語動名詞の史的発達についての一考察」	77
17:00	小林亮哉	「引用句構文の通時的変化に関する一考察」	81
17:45	内田脩平	「英語における主格ゼロ関係節の通時的発達について」	85

オンライン発表無し

渡辺拓人	「アメリカ英語における fixing to の発達」	89
------	----------------------------	----

特別講演 (11月8日(日) 13時00分より 15時10分まで)

第1室

13:00	酒井邦嘉	「脳からみた統辞構造の計算」	94
14:10	中澤和夫	「動的文法理論とその展開—語法文法研究から理論へ」	99

第2室

13:00	小野寺典子	「歴史語用論の歩み：分類・射程・拡がりから見える分野の特徴」	105
14:10	呉人 恵	「異なるタイプの言語の対照から見える普遍性—コリャーク語と英語の場合」	111

第3室

13:00	中西公子	「自由選択表現の意味と分布について」	117
-------	------	--------------------	-----

2019年度より2つの助成金制度が始まりました。詳細は、学会ウェブサイト（顕彰制度のページ）をご覧ください。

「市河三喜研究助成金」：「日本英語学会賞（著書）」受賞者に、「副賞5万円」を授与します。

「学生会員発表助成金」：学生会員が本学会の大会およびSpring Forumで発表する場合に、その支援として1件につき1万円を支給します。

研 究 発 表
(11 月 7 日 (土) 午後)

第 1 室 ~ 第 3 室

概要

- ・ Chomsky (2013) の「ラベルが構造を特徴付ける」考えに基づき、統語関係を集合から定義する。
- ・ 提案その 1: 集合内にある要素はその集合のラベルに基づき解釈される。
- ・ 提案その 2: ラベルを提供する要素はラベルに基づいた解釈が義務的になるが、集合に含まれているだけの要素は解釈に随意性が見られる。
- ・ 提案を元に、*wh* 演算子の *scope*、Case の義務性と随意性に統一的な説明を与える。

1. ラベル理論

1.1. Chomsky (2013, 2015)

- (1) Merge $(X, Y) = \{X, Y\}$
- (2) For a syntactic object SO to be interpreted, some information is necessary about it: what kind of object is it?
Labeling is the process of providing that information. (Chomsky (2013: 43))
- (3) a. $\{\alpha X, YP\}$ ($\alpha=H$)
b. $\{\alpha XP, \cancel{YP}\}$ ($\alpha=X$)
c. $\{\gamma \{\alpha X[uF], WP\}, \{\beta Y[F], ZP\}\}$ ($\alpha=X, \beta=Y, \gamma=<F, F>$)

1.2. Epstein, Kitahara and Seely (EKS) (2017): Agreement without Agree

- (4) Minimal Search (finding the first head(s) for labeling) replaces Probe-Goal Search (locating P and searching G in the search domain of P for agreement). (EKS (2017: 2))
- (5) the two heads that undergo valuation must be in the XP-YP configuration. (*ibid.*)
- (6) Suppose, for a syntactic object SO, Minimal Search simultaneously finds the two heads: one bearing valued features vF and the other bearing unvalued features uF . Then, the total information provided by these two heads, is just vF (since uF is in effect superimposed on vF , informally, analogous to “ $1+0=1$ ”) and vF is taken to be the label of SO (Chomsky 2013, 2015). (*ibid.*)
- (7) If such information, namely vF , is sufficient for the assignment of the relevant morpho-phonological features to uF , then it is redundant to have feature-valuation in the narrow syntax prior to the necessary feature-assignment in the morphological component. (*ibid.*)
- (8) $\{\gamma \{\beta \text{ which}[uQ], \text{dog}\} \{\alpha C[\text{int}], \dots\}\}$ ($\alpha=C, \beta=\text{which}, \gamma=<\text{int}, \text{int}>$)
- (9) a. インターフェイスまで $[uF]$ は unvalued のまま。
b. Agree は syntax で起こらない。
c. Minimal Search の情報に基づき インターフェイスで feature-assignment (derivational) (cf. (5))
c'. ラベルの情報に基づき インターフェイスで feature-assignment (representational)

* 本発表は科研費 20J11905 の助成を受けている。

* norimasa.8843@gmail.com

- (10) a. (syntactic) Agree を持つ枠組み (Chomsky (2015))
 i. Agree による[uF]の valuation→ii. Minimal Search (labeling)→iii. SM interface で valued [uF]の値を形態/音声的具現化
 b. EKS (2017)
 i. Minimal Search (labeling)→ii. SM インターフェイスで<F, F>ラベルに基づき[uF]を形態/音声的具現化

2. 提案: Totally Representational Model for Interpretation

- (11) syntactic object X、或いはその一部の feature の解釈は X を含む集合のラベルに基づき定められる。
 (12) $\{\beta Z[F] \{\alpha X[uF] \{\dots Y[uF] \dots\}\}\}$ ($\alpha=X, \beta=<F, F>$)
 (13) Interpretation by Contain
 X、Y が持つ[uF]はラベル<F, F>に基づき interfaces で[F]の解釈を受ける。 (cf. (2))
 (14) Immediately Contain
 ある syntactic object X が集合のラベル (の一部) を決定している時、X はその集合に immediately contain されている。
 a. $\{\alpha X, YP\}$ ($\alpha=X$) (=3a)
 b. $\{\gamma \{\alpha X[uF], WP\}, \{\beta Y[F], ZP\}\}$ ($\alpha=X, \beta=Y, \gamma=<F, F>$) (=3c)
 (15) 以下の構造において、
 i. 集合 β に contain される Y は集合 β に基づく解釈を受けることができる。
 ii. 集合 β に immediately contain される X は集合 β に基づく解釈を受けなければならない。
 $\{\beta Z[F] \{\alpha X[uF] \{\dots Y \dots\}\}\}$ ($\alpha=X, \beta=<F, F>$)
 (16) X は集合 β を特徴づけておきながら、その集合と無関係の解釈を受けることはできない。

3. 義務的解釈・随意的解釈その 1: Case

3.1. 義務的な Case

- (17) ラベルと Case の関係 (cf. EKS (2012))
 a. 名詞と T から得られるラベル<phi, phi>を持つ集合はその中に含まれる名詞に主格を与える。
 b. 名詞と R から得られるラベル<phi, phi>を持つ集合はその中に含まれる名詞に対格を与える。
 (18) a. I like him.
 b. $\{\eta C \{\zeta I[\phi] \{\epsilon T[u\phi] \{\delta H[\phi] \{\gamma R-v^* \{\beta him[\phi] \{\alpha R[u\phi], him[\phi]\}\}\}\}\}\}\}$
 ($\alpha=R, \beta=<\phi, \phi>, \gamma=\delta=R-v^*, \epsilon=T, \zeta=<\phi, \phi>, \eta=C$)

3.2. 随意的な Case

- (19) It was I whom public opinion eventually condemned. (Smits (1989: 300))
 (20) It is me who(m) John is after. (Akmajian: 1970: 152)
 (21) (19) は<phi, phi>ラベルに基づき主格、(20) はその option を取らずに default の対格。
 (22) a. ?There am I. (Schütze (1997: 136))
 b. There's me. (ibid.)
 (23) (22b) では agreement が起こっておらず、default の対格、(22a) に関しては話者間の variation 有り。

- (24) *there* は意味上の主語から [phi] feature を copy するが、[phi] feature の一部が欠けており defective であるため (Chomsky (2001)), *it* と異なり完全な <phi, phi> ラベルを提供できず、<person, person> に基づく主格を許すか否かで話者間の variation が起こる。
 $\{\delta C \{_{\gamma} \text{there}[\text{person}] \{_{\beta} \text{is}[\text{uphi}] \{_{\alpha} \text{there}[\text{person}], I[\text{phi}]\}\}\}\}$ ($\alpha=I, \beta=T, \gamma=<\text{person}, \text{person}>, \delta=C$)
- (25) Er läßt ihn {einen guten Mann/ein guter Mann} sein. (German) (Schütze (1997: 87))
 he let-3SG him {a good man-ACC/a good man-NOM} cop-3SG
 ‘He lets him be a good man.’
- (26) Ég taldi {hana/*hún} vera kennara/*kennari. (Icelandic)
 I believed {her-ACC/*she-NOM} to.be teacher-ACC/*NOM
 ‘I believed her to be a teacher.’ (Maling and Sprouse (1995: 170))
- (27) (25) の German は英語同様の optionality を示すが、(26) の Icelandic は predicate nominal が default option を取れない、linguistic variation 有り。

4. 義務的解釈・随意的解釈その 2: *wh* 演算子の scope

4.1. 多重 *wh* 疑問文

- (28) Who knows where we bought what?
- (29) 二つの問題: 1. 元位置にある *wh* 演算子の [uQ] の解釈 2. *wh* 演算子の scope の随意性の違い
- (30) a. Q1: for which <x, y>, x knows where we bought y
 A1: John knows where we bought pizza, Tom knows where we bought books...
 b. Q2: for which x, x knows where we bought what
 A2: John and Tom (knows where we bought what).
- (31) *who, where* は表層の scope を取らなければならないが、*what* は主節/埋め込み節いずれの scope も随意的に取れる。 (cf. Baker (1970))
- (32) $\{\delta \text{who}[uQ] \{_{\gamma} T[\text{int}] \dots \{_{\beta} \text{where}[uQ] \{_{\alpha} C[\text{int}] \dots \text{what}[uQ]\}\}\}$ ($\alpha=C, \beta=<\text{int}, \text{int}>, \gamma=T, \delta=<\text{int}, \text{int}>$)
 → *what* の [uQ] はラベル δ に基づき解釈される。また、<int, int> のラベルを持つ集合に immediately contain されている *who, where* はラベルを与える位置で義務的な解釈 (scope) を受けなければならない。どの集合にも immediately contain されていない *what* のみが随意的な scope を取ることが可能¹。

4.2. *wh* island

- (33) a. *What did you ask where she ate?
 b. $\{\epsilon \text{what}[uQ] \{_{\delta} \text{did}[\text{int}] \text{you ask} \{_{\gamma} \text{what}[uQ] \{_{\beta} \text{where}[uQ] \{_{\alpha} C[\text{int}] \text{she ate } \text{what}[uQ]\}\}\}\}$
 ($\alpha=C, \beta=\gamma=<\text{int}, \text{int}>, \delta=C[\text{int}], \epsilon=<\text{int}, \text{int}>$)
- (34) コピーは Minimal Search に不可視のため *what* はラベル γ を与えないが、ラベルとその構造のみを見るインターフェイスは、以下のラベル γ の二つの派生を見分けられない²。
- (35) a. $\{_{\gamma} \text{what}[uQ] \{_{\beta} \text{where}[uQ] \{_{\alpha} C[\text{int}], \dots\}\}$ (γ は *what, where, C* の三つが提供したもの) ($\beta=\gamma=<\text{int}, \text{int}>$)
 b. $\{_{\gamma} \text{what}[uQ] \{_{\beta} \text{where}[uQ] \{_{\alpha} C[\text{int}], \dots\}\}$ (γ は β を引き継いだもの) ($\beta=\gamma=<\text{int}, \text{int}>$)

¹ Reinhart (1998) の Choice Function に基づき *what* はいずれかの *wh* 演算子とペアの解釈を受けると想定する。

² (33b) において *what* がコピーであることは *what* がラベル γ を提供しなかったことを意味しない。

(36) (33b)において、*what* は集合 ε , 集合 γ のいずれにも immediately contain されていると見なされ、矛盾する scope が CI インターフェイスで強制されるため非文。

(37) a. What do you wonder who saw? (George (1980), Chomsky (1986))

b. $\{_{\gamma} \text{what}[\phi_i][uQ] \text{do}[\text{int}] \text{you wonder } \{_{\beta} \text{what}[\phi_i][uQ] \{_{\alpha} \text{who}[\phi_i][uQ] T[\text{uphi}][\text{int}] \text{saw } \text{what}[\phi_i][uQ]\}\}$

($\alpha=\beta=<\phi_i, \phi_i>/<\text{int}, \text{int}>$, $\gamma=<\text{int}, \text{int}>$)

→C deletion を受けており、主語 *wh* は $<\phi_i, \phi_i>$ と $<\text{int}, \text{int}>$ のラベルを同時に与える。

(38) $\{_{\gamma} \text{DP2}[\phi_i] \{_{\beta} \text{DP1}[\phi_i] \{_{\alpha} T[\text{uphi}], \dots\}\}$

($\alpha=T$, $\beta=<\phi_i, \phi_i>$, $\gamma=??$)

→valued F が二つある multiple spec は Minimal Search によりラベルが与えられない。 (北原 (2019))

→(37b) において *what* は集合 β に immediately contain されていないことがインターフェイスで読み取られ、*wh* island 違反が生じない。

5. まとめ

(39) 従来の統語理論においては spec-head agreement と probe-goal Agree の二種類により統語関係が定義されていた。前者は spec の概念に頼っており、bare phrase structure (Chomsky (1995)) に基づく理論では自然に引き出されない関係となった。また、probe-goal Agree には EKS (2017) が指摘した問題の他、ここで扱った義務的/随意的解釈の違いを捉えることができない。本発表での提案: Interpretation by Contain (13)、Immediately Contain (14) は、Merge が作り出す集合、ラベル、集合を定義するラベルの役割の三つから自然に引き出されるものであるため概念的に望ましく、加えて、spec-head agreement を自然な形で取り入れ、probe-goal Agree のみでは説明できない随意性を捉えることができた。

[参考文献] Akmajian, A. 1970. On Deriving Sentences from Pseudo-Cleft Sentences. *Linguistic Inquiry* 1: 149-168. / Baker, C.L. 1970. Notes on the Description of English Questions: The Role of an Abstract Question Morpheme. *Foundations of Language* 6: 197-219. / Chomsky, N. 1986. *Barriers*, MA: MIT Press. / Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press. / Chomsky, N. 2001. Derivation by Phase. In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. M. Kenstowicz, 1-52, MA: MIT Press. / Chomsky, N. 2013. Problems of Projection. *Lingua* 130: 33-49. / Chomsky, N. 2015. Problems of Projection: Extensions. In *Structures, Strategies, and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. E. Domenico, C. Hamann & S. Matteini, 3-16. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. / Epstein, S. D., H. Kitahara & T. D. Seely. 2012. Structure Building That Can't Be! In *Ways of Structure Building*, ed. M. Uribe-Etxebarria & V. Valmala, 253-270. Oxford: Oxford University Press. / Epstein, S. D., H. Kitahara & T. D. Seely. 2017. Successive Cyclic Wh-Movement without Successive Cyclic Crashing. Conference paper, 10th International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan, Meiji Gakuin University, Tokyo, April 23. / George, L. 1980. Analogical Generalization in Natural Language Syntax. Doctoral thesis, MIT. / 北原久嗣 2019. 「多重指定部構造の再考」, 発表資料, 日本英語学会第 37 回ワークショップ, 関西学院大学, 11 月 9 日. / Maling, J. & R. A. Sprouse. Structural Case, Specifier-Head Relations, and the Case of Predicate NPs. In *Studies in Comparative Germanic Syntax*, ed. H. Haider & S. Vikner, 167-186. Netherlands: Kluwer Academic Publishers. / Reinhart, T. 1998. Wh-in-Situ in the Framework of the Minimalist Program, *Natural Language and Semantics* 6: 29-56. / Schütze, T. R. C 1997. INFL in Child and Adult Language: Agreement. Case and Licensing. Doctoral thesis, MIT. / Smits, R. 1989. *Eurogrammar: The Relative and Cleft Constructions of the Germanic and Romance Languages*. Dordrecht: Foris.

項の対併合に関する考察：経験主項と優位性効果の観点から
(A Consideration on Pair-Merge of Arguments: from a Perspective of Experiencers and
Superiority Effect)

大塚知昇 (OTSUKA Tomonori)*
九州大学 (Kyushu University)

1. 導入

- ・近年の議論は set-Merge が主流→pair-Merge の研究は進んでいない
 - ・本研究の主張：pair-Merge の有効活用で周辺の言語現象を説明可能→pair-Merge 研究の重要性
 - ・経験主項として言及される(1)の to 句に焦点をあてる
- (1) John seems to Mary to be honest.

本研究の提案：項に set-/pair-Merge のどちらも適用可能→英語経験主項は必ず pair-Merge
議論の補足：説明対象を英語以外に拡張、通言語的な現象の説明を試みる

本発表の構成：

- | | |
|------------------|--------------------|
| 2 節…理論的背景の概観 | 3 節…優位性効果について示唆的考察 |
| 4 節…問題提起、先行研究の概観 | 5 節…代案提示とその拡張 |
| | 6 節…まとめ |

2. 理論的背景

2. 1. Free Merger

- ・内的、外的併合操作どちらも素性照合に基づかず自由に適用→Labeling Algorithm が制限

2. 2. Labeling Algorithm (LA)

- ・Chomsky (2013) : Free Merger による結果物は Label がつくもののみ Interfaces で判読可能
- (2) a. $\{_{XP} \underline{X}, \{Y...\}\}$ ←最も近い主要部は X
b. $\{_{??} \{\underline{X}...\}, \{\underline{Y}...\}\}$ ←X と Y が同等に近くラベル決定不可能
- (3) a. $\{_{\langle \Phi_i, \Phi_i \rangle} \{N[\underline{\Phi_i}]...\}, \{T[\underline{\Phi_i}]...\}\}$ ←両主要部が卓越素性を共有
b. $\{_{XP} \{\underline{X}...\}, \{\underline{Y}...\}\}$ ←一方の主要部が非可視的
- ・(3b)の例：Y を含む集合が内的併合…もう一つの状況：pair-Merge

2. 3. pair-Merge

- ・Chomsky (2004) : 付加詞の振る舞いを説明するため pair-Merge を提案
- ・pair-Merge : ordered pair を形成、pair の内一方のみ可視的、もう一方は非可視的
→非可視的となった要素は統語操作の対象とならない→付加詞の(不)透明性を説明
- ・転送操作の直前に SIMPL(ification)が起こる→非可視的要素が可視的に戻る ((4)を説明可能)

* t-otsuka@flc.kyushu-u.ac.jp/hakata.yamakasa715@gmail.com

(4) He_i asked which picture of Bill [that John_i*_j liked] he_j bought *t*.

(Chomsky (2004: 117-118) (ただし index 表記は発表者による))

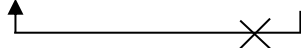
3. 優位性効果に関する一考察

- ここでは優位性効果に関する一つの方向性的可能性を示唆する

(5) a. John was sent *t* the book.



b. * The book was sent John *t*.



(6) a. I showed Mary herself (in the mirror).

b. * I showed herself Mary (in the mirror).

c. I gave every worker_i his_i paycheck.

d. * I gave its_i owner every paycheck_i.

(Barss and Lasnik (1986: 347-50))

- 問題：Free Merger において、優位性効果がどのように捉え直されるか
→Attract Closest (Richards (2001))や Relativized Minimality (Rizzi (1990))：Free Merger と合わず
- 一つの可能性：Label 付けに連鎖決定のプロセスが組み込まれていると想定？
→NP が別の NP を超えて A 移動すると誤って連鎖の一部として見なし解釈の破綻へ？
- 主張：Free Merger の枠組みで統語的な観点のもとに優位性を捉え直せる可能性はある
→以下、優位性効果の原則が統語部門で当てはまるとして議論を進める

4. 問題提起

4. 1. 現象

- 繰り上げ構文で主語は補部内から繰り上げ移動→英語では経験主項を無視して適用可
- 主語が経験主項を、経験主項がその補部を C 統御する証拠が存在→矛盾が生じる

(7) a. John_i seems to himself_i *t* to like cheese.

(Lebeaux (2009: 32))

b. * It seems to him_i that John_i likes cheese.

(ibid.)

4. 2. 先行研究

- メカニズムの詳細にまでは立ち入らず、概略的な立ち位置を提示
- Kitahara (1997)、Epstein et al. (1998)：英語経験主項は主語繰り上げ後に補部を C 統御
- Boeckx (1999, 2008)：経験主項は補部を C 統御するが、Attract の対象とならない

5. 提案

5. 1. 矛盾点の解決

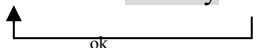
- 提案：pair-Merge は付加詞のみでなく項要素にも適用可能 (cf. Otsuka (2017))
- 項は常に set-/pair-Merge 二つの可能性→主語や目的語は素性照合の理由で pair-Merge だと問題に
- 英語の不定詞節の T は uPhi 素性を持たない→経験主項は Phi 素性照合に関わらない
→to により格付与され格の問題も無し→むしろ set-Merge され可視的なら Label の問題が生じる
- 経験主項が pair-Merge→転送前まで統語的に非可視的→Label の問題なし&主語繰り上げ妨げず

(9) a. <_{TP} to Experiencer, {to...}>

b. {₂₂ to Experiencer, {to...}}

- ・転送の時点では SIMPL により可視的に戻るので、C 統御関係が導かれる。

(10) John seems to Mary *t* to be honest.



5. 2. 分析の拡張

5. 2. 1. スペイン語

- ・経験主項が set-/pair-Merge のどちらでも派生に導入されうる→三つの論理的可能性

- (11) a. 経験主項が set-Merge によってのみ導入される。
 b. 経験主項が pair-Merge によってのみ導入される。(=英語)
 c. 経験主項が (状況に応じ) set-Merge と pair-Merge 両方によって導入される。

- ・(11a) : スペイン語や一部のロマンス系言語(カタロニア語、ガリシア語、ルーマニア語等)

- ・(11c) : イタリア語

※Arano (2017)に従えば、(11a)に Insular Scandinavian 言語、(11b)に Mainland Scandinavian 言語も

- ・スペイン語(11a) : 経験主項は接辞重複(Clitic Doubling)を伴い出現し、出現時は主語繰り上げ不可

(12) Les parecio (a mis amigos) que Maria estaba cansada.
 to them seemed (to my friends) that Maria was tired.

‘Maria seemed to my friends to be tired.’ (Treggo (1996: 106))

(13) a. Me parece que este taxista esta cansado. 経験主あり/繰り上げなし
 to me seems that this taxi driver is tired

‘It seems to me that this taxi driver is tired.’ (Treggo (1996: 105))

b. * Este taxista me parece estar cansado. 経験主あり/繰り上げあり
 this taxi driver to me seems to be tired

‘This taxi driver seems to me to be tired.’ (ibid.)

c. Este taxista parece estar cansado. 経験主なし/繰り上げあり
 this taxi driver seems to be tired

‘This tax driver seems to be tired.’ (ibid.)

- ・Toreggo (1996) : 接辞重複は経験主項の格認可のために出現→経験主項の Label 付けに寄与？

- ・経験主項を pair-Merge により導入すると Toreggo (1996)に従い格認可が不可能

- ・結論 : 経験主項は set-Merge、接辞重複により Label 付け→統語的に可視的→優位性効果が働く

5. 2. 2. イタリア語

- ・イタリア語(11c) : 経験主項が NP として出現すると主語繰り上げ不可、接辞化すると可

(14) a. * Gianni sembra a Maria essere stanco. NP 経験主項/繰り上げあり
 Gianni seems to Maria to be ill

‘Gianni seems to Maria to be ill.’ (Bošković (2011: 4))

b. Gianni gli sembra essere stanco. 接辞経験主項/繰り上げあり
 Gianni to her seems to be ill

‘Gianni seems to her to be ill.’ (Boeckx (2008: 150))

- ・経験主項が NP として出現した場合は set-Merge、接辞として出現する場合は pair-Merge
- ・Chomsky (2015) : イタリア語の T は Label 的に強い。→NP 句と TP は隣り合う必要ない

- (15) a. A Maria_j, Gianni_i sembra t_j [t_i essere stanco].
 to Maria Gianni seems to.be ill
 ‘To Maria, Gianni seems to be ill.’ (Bošković (2011: 4))
- b. A chi_j sembra Gianni_i t_j [t_i essere stanco]?
 to whom seems Gianni to.be ill
 ‘To whom does Gianni seem to be ill?’ (ibid.)

・まとめ : (11) で見た 3 つの可能性に基づき、経験主項の Label 付けの可否や格付与の可否と set-Merge、pair-Merge の相互作用により、通言語的言語現象がうまく説明される。

6. 結論

Selected References

- Arano, Akihiko (2017) “On Intervention in Move and Agree: A Case of Dependencies across Experiencers,” *Exploration in English Linguistics* 31, 1-30.
- Barss, Andrew and Howard Lasnik (1986) “A Note on Anaphora and Double Objects,” *Linguistic Inquiry* 17, 347-354.
- Bode, Stefanie (2020) *Casting a Minimalist Eye on Adjuncts*, Routledge, NY.
- Boeckx, Cedric (1999) “Conflicting C-command Requirements,” *Studia Linguistica* 53, 227-250.
- Boeckx, Cedric (2008) *Aspects of the Syntax of Agreement*, Routledge, NY.
- Bošković, Željko (2011) “Rescue by PF Deletion, Traces as (Non)interveners, and the *That*-Trace Effect,” *Linguistic Inquiry* 42, 1-44.
- Collins, Chris and Erich Groat (2018) “Copies and Repetitions,” ms., New York University. [lingbuzz/003809]
- Epstein, Samuel David, Eric M. Groat, Ruriko Kawashima, and Hisatsugu Kitahara (1998) *A Derivational Approach to Syntactic Relations*, Oxford University Press, Oxford.
- Kitahara, Hisatsugu (1997) *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Larson, Richard K. (1988) “On the Double Object Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Lebeaux, David (2009) *Where Does Binding Theory Apply?*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Omune, Jun (2017) “Reformulating Pair-Merge of Heads,” *English Linguistics* 34, 266-301.
- Oseki, Yohei (2015) “Eliminating pair-Merge,” *Proceedings of the 32nd WCCFL*, 303-312.
- Otsuka, Tomonori (2017) “Radical Free Merger,” *English Linguistics* 34, 34-68.
- Richards, Norvin (2001) *Movement in Language: Interactions and Architectures*, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Toreggo, Esther (1996) “Experiencers and Raising Verbs,” *Current Issues in Comparative Grammar*, ed. by Robert Freidin, 101-120, Dordrecht.

収束性を伴うフェイズ
(On Phases with Convergency)

田中章太 (TANAKA Shota)
関西外国語大学大学院 (Kansai Gaidai University)

1. はじめに

(1) 数量詞残留を含んだ ECM 構文

Who did you expect your mother all to meet at the party? (McCloskey (2000: 70))

(2) 多重 WH 疑問文

Who remembers where we bought which book? (Baker (1970: 215))

(3) 多重 WH 疑問文の Pair-List 読み

John remembers where we bought the physics book and Martha and Ted remember where we bought *The Wizard of Oz*. (Baker (1970: 215))

本発表の目的

収束性にもとづいたフェイズ理論において、ECM 構文や多重 WH 疑問文などに見られる諸現象がどのように派生されるのかを説明する。

本発表の提案

- (i) ϕ 素性に関して T/V が DP と完全な一致関係が作られるとすぐにフェイズが完成する。
- (ii) WH 句が持つ Q 素性を Q_S 素性と Q_L 素性の 2 種類に分ける。

2. 収束性フェイズ

(4) 束縛代名詞効果

a. *The book is too dear for Jim to claim [_{CP} that Mary lent __ to Ann].

b. The book is too dear for Jim_i to claim [_{CP} that he_i lent __ to Ann].

(Grano & Lasnik (2018: 481))

(5) a. Unvalued features on the head of the complement to the phase head keep the phase open.

b. The locality domain for the phenomena that give rise to the bound pronoun effect is the phase.

c. Bound pronouns optionally enter the derivation with unvalued ϕ -features.

(Grano & Lasnik (2018: 482))

問題点①：ECM 構文

(6) I believe John to be the winner.

(Chomsky (1986: 189))

(7) John is believed to be the winner.

(8) What all do you think (all) that he'll say (all) that we should buy (all)?

(adopted from McCloskey (2000: 62))

(9) a. Who did you arrange [all for your mother to meet at the party]?

b. *Who did you arrange [for your mother all to meet at the party]? (McCloskey (2000: 70))

- (10) Who did you expect your mother [all to meet at the party]? (McCloskey (2000: 70))
 (11) ECM 補部は CP である。

問題点②：多重 WH 疑問文

- (12) Who remembers where we bought which book? (Baker (1970: 215))
 (13) John remembers where we bought the physics book and Martha and Ted remember where we
 bought The Wizard of Oz. (Baker (1970: 215))
 (14) WH 句には[uQ]が存在する。
 (15) 主節の who と which book が C と一致する必要がある。

3. 提案

- (16) "... C and v^* are the phase heads, and their Agree-feature is inherited by the LI they select."
 (Chomsky (2008: 15))
 (17) Agreement Phase
 ϕ 素性に関して、機能範疇 T/V と DP の間で完全な一致関係が作られるとすぐにフェイズが完成し、T/VP の補部以下が転送される。

3.1. 分析 (ECM 構文)

- (18) 受動化された ECM 構文
 John is believed to be the winner.
 a. [CP C [$\langle\phi, \phi\rangle$ John [TP to be the winner]]]
 b. [CP $\neq$ Phase C [$\langle\phi, \phi\rangle$ John [TP to be the winner]]]
 c. [John ... [CP $\neq$ Phase C [$\langle\phi, \phi\rangle$ t_{John} [TP to be the winner]]]]

- (19) 数量詞残留を含んだ ECM 構文

Who did you expect your mother all to meet at the party?
 a. [CP C [$\langle\phi, \phi\rangle$ your mother [TP to [v^*P t_{your mother} [v^*P meet who all]]]]]
 b. [CP $\neq$ phase C [$\langle\phi, \phi\rangle$ your mother [TP to [v^*P t_{your mother} [v^*P meet who all]]]]]
 c. [who all [CP C [$\langle\phi, \phi\rangle$ your mother [TP to [v^*P t_{your mother} [v^*P meet t_{who} all]]]]]]]
 d. [$\langle Q, Q\rangle$ who [.....[v^*P v^* [$\langle\phi, \phi\rangle$ your mother [VP expect [CP t_{who} all [CP C [$\langle\phi, \phi\rangle$ t_{your mother} [TP to [v^*P t_{your mother} [v^*P meet t_{who} all]]]]]]]]]]]]]

3.2. 分析 (多重 WH 疑問文)

- (20) Qs-Feature と QL-Feature
 a. Qs-Feature は統語部門で Q 素性の一致を要請する。
 b. QL-Feature は LF で Q 素性の一致を要請する。

(21) 多重 WH 疑問文

- a. Who remembers where we bought which book?
- b. who には[uQs]が存在し、統語部門において、主節の C まで移動する。
- c. which book には[uQL]が存在し、LF で主節の C と一致する。

4. 帰結

4.1. 弱フェイズ

(22) CP/ ν *P は強フェイズであり、 ν P は弱フェイズである。

(23) ν P 弱フェイズはフェイズ不可侵条約が適用されない。

(24) John was hit.

[TP John was [ν P=weak phase hit t]]

(25) “If they are irrelevant for Spell-Out and the PIC then they are not phases at all in any useful, meaning sense. A weak phase is simply a non-phases; all phases must be ‘strong’.”

(Richards (2004: 66))

(26) ν_{def} : unaccusative and passive structures

(Gallego (2010: 37))

(27) John was hit.

a. [ν P $\neq$ phase hit John]

b. [TP John was [ν P $\neq$ phase hit t_{John}]]

4.2. 島の制約と問い返し疑問文

(28) 島の制約（付加部島/複合名詞句制約）

a. *What did Ann go home [after Mary read t]? (Grano & Lasnik (2018: 494))

b. *Who does Phineas know a girl [who is working with t]? (中島 (2016: 111))

c. *What did Mary believe the fact [that John had stolen t]? (江頭 (2019: 42))

(29) Merge at Transfer

“Two objects can undergo a ‘last minute’ Merge after the two structures have been transferred (after syntactic structure building is completed), but before they are spelled-out.”

(Wurmbrand (2014: 154))

(30) WH 句が島の内部に残る WH 疑問文の例

a. Who likes books that criticize who?

b. Who got jealous because I speak to who? (Fiengo, Huang, Lasnik & Reinhart (1988: 81))

(31) 島を含む問い返し疑問文

a. U: Mary left [after John met (mumble)].

EQ: Mary left [after John met who_E]? (Chernova (2014: 185))

b. U: I was surprised at the rumor [that he bought the parachute].

EQ: You were surprised at the rumor [that he bought what_E]?

(Inada and Imanishi (2003: 233-234))

(32) WH 移動が生じる問い返し疑問文

U: Mary had tea with Cleopatra?

EQ: Mary had tea with who_E?

EQ': Who_E did Mary have tea with?

(Sobin (2010: 132))

5. まとめ

主要参考文献

- Baker, C. L. (1970) "Notes on the Description of English Questions: The Role of an Abstract Question Morpheme," *Foundations of Language* 6, 197-219. / Chernova (2014) *The Syntax of WH-Movement in Multiple (True and Echo) Questions: A Q-Particle Approach*, Doctoral dissertation, Universitat de Girona. / Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York. / Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA. / Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structure, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam. / 江頭 (2019) 「叙実動詞補文・名詞補文・非架橋動詞補文からの取り出しの禁止について」『大妻比較文化:大妻女子大学比較文化学部紀要』第20号, 39-67. / Fiengo, Robert, C.T. James Huang, Howard Lasnik, and Tanya Reinhart (1988) "The syntax of Wh-in-situ," *WCCFL7: Proceedings of the Seventh West Coast Conference on Formal Linguistics*, 81-98. / Gallego, Ángel J. (2010) *Phase Theory*, John Benjamin, Amsterdam. / Grano, Thomas and Howard Lasnik (2018) "How to Neutralize a Finite Clause Boundary: Phase Theory and the Grammar of Bound Pronouns," *Linguistic Inquiry* 49, 465-499. / Inada, Toshiaki and Noriko Imanishi (2003) "What Wh-Echo Questions Tell Us about the Architecture of Language Faculty," *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, ed. by Shuji Chiba et al., 241-280, Kaitakusha, Tokyo. / McCloskey, James (2000) "Quantifier Float and Wh-movement in a Irish English," *Linguistic Inquiry* 31, 57-84. / 中島(2016)『島の眺望:補文標識選択と島の制約と受動化』研究社, 東京. / Richards, Mark D. (2004) *Object Shift and Scrambling in North and West Germanic: A Case Study in Symmetrical Syntax*, Doctoral dissertation, University of Cambridge. / Sobin, Nicholas (2010) "Echo Questions in the Minimalist Program," *Linguistic Inquiry* 41, 131-148. / Wurmbrand, Susi (2014) "The Merge Condition: A syntactic approach to selection," *Minimalism and Beyond: Radicalizing the Interfaces*, ed. by Peter Kosta, Steven L. Franks, Teodora Radeva-Bork and Lilia Schürcks, 130-166, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

英語の There 受動文が許容する語順パターンに関する通時的変遷と主語移動の適用可能性 (The Diachronic Change in the Word Order Patterns of the Expletive Passives and the Applicability of the Subject Movement)

三上 傑 (Suguru MIKAMI)

東北大学 (Tohoku University)

1. はじめに

There 受動文: (cf. Burzio (1986), Lasnik (1995), Chomsky (2001), 西原 (2009), etc.)

- (1) a. There were several large packages placed on the table.
- b. There were placed on the table several large packages.
- c. * There were placed several large packages on the table. (西原 (2009: 209))

本多 (2015): There 受動文の生起分布に関する通時的変遷 (cf. Jonas (1996)) (⇔(1c))

- (2) a. (...) þere coude be founde no defaute in hem (...)
(...) there could be found no default in him (...) (CMCAPCHR, 51.586/ 本多 (2015: 278))
- b. And there was made a grete hale in the palyse,
and there was made a great hall in the palace (CMGREGOR, 96.22/ 本多 (2015: 285))

- (3) There 受動文に関する三つの語順パターンの生起頻度 (50 万語あたり): (本多 (2015: 281))

語順パターン	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1
虚辞 - be - DP - 受動分詞 - PP	2.56	5.32	6.48	25.89	46.67	40.58	42.58	39.55
虚辞 - be - 受動分詞 - PP - DP	2.56	0	3.89	23.07	17.61	15.12	6.46	8.18
虚辞 - be - 受動分詞 - DP - PP	0	0	3.89	26.91	7.04	3.18	4.62	0

→「虚辞 - be - 受動分詞 - DP - PP」語順は、後期中英語期に他の語順パターンと同様の生起頻度を示していたものの、初期近代英語期を境に著しく減少した。

●本発表の目的

- (4) 英語の There 受動文における許容可能な語順パターンの通時的変遷に関して、主語移動の適用可能性の観点から適切な説明を与えること。

2. 英語における主語移動の義務的適用とその変遷

現代英語における主語移動の義務的適用:

- (5) a. He is respected (by them).
- b. $[_{TP} \text{ he } [_{T-be} [_{VP} \text{ respected } <\text{he}> \text{ (by them) }]]]$
↑
主語移動 (A 移動)

Ohkado (1998): 古・中英語における非対格主語の生起分布: (cf. Kemenade (1997), etc.)

- (6) 古・中英語において、(受動文を含む) 非対格動詞を伴う従属節では主語要素が定形動詞に後続する語順パターンが可能であった。
- (7) in a worshipful town wher was o parysch church & tweyn chapelys annexid
in a worshipful town where was a parish church and two chapels united
'in a worshipful town where a parish church and two chapels were united' (KEMPE I. 58.265/ 田中 (2010: 91))

→古・中英語において、非対格動詞を伴う従属節では主語移動の適用が必ずしも義務的でなかった。

田中 (2010): 英語の非対格動詞文における EPP 素性の要請の満たし方に関する通時的変遷

- (8) 主要部移動を介した EPP 素性の要請の満たし方: (cf. Alexiadou & Anagnostopoulou (1998))
The rich verbal agreement of Greek and Spanish, which is responsible for their *pro-drop* nature, counts as a pronominal element, and hence can satisfy the EPP feature of T without [Spec, TP], when it is carried to T via verb movement.

- (9) a. 古英語と中英語では、一致形態素がすべての動詞形に表れている（特に過去時制において一致形態素と時制形態素は独立している）。
 b. 16 世紀までに、三人称単数現在形、および二人称単数現在形と過去形を除く、すべての動詞形において一致形態素が消失した。
- (10) a. 一致形態素がある程度豊かであった古英語と中英語では、非対格動詞文において、T の有する EPP 素性の要請が、V-to-T 移動（動詞の主要部移動）を介して満たすことが可能であった。
 b. 初期近代英語期に入り、一致形態素が消失すると、V-to-T 移動の適用が不可能になり、T の有する EPP 素性の要請が、主語要素（または虚辞）の指定部位置への併合によって満たされなければならないようになった。

⇒初期近代英語期以降、動詞屈折接辞の衰退に伴い、EPP 素性の要請を満たすための手段が一本化されたことで、主語移動適用の義務化が生じた。

※厳密に言うと、田中 (2010)は EPP 素性の PHON 素性と PRED 素性への分割を提案し、古英語と中英語では主要部移動により前者の要請のみ満たされ得ると主張している。

※英語において V-to-T 移動は、16 世紀中に消失した。(cf. Roberts (1993), Vikner (1997), etc.)

3. There 受動文の複文構造分析と主語移動の適用可能性

竹沢 (2000, 2001): 日本語における「アル完了文」の複文構造分析

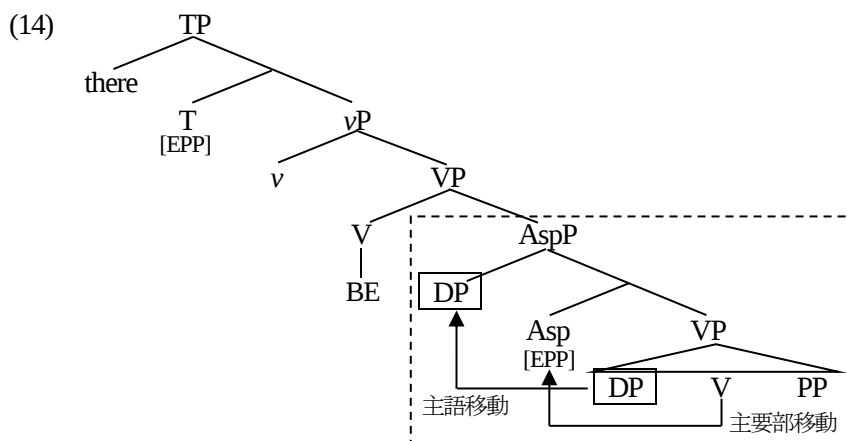
- (11) a. 駐車場に車が止めてある（こと）
 b. [TP 車が_i [VP [AspP PRO [Asp' [VP 駐車場に_{t_i} 止め-テ]Asp]] アル]T]
- ↑
主語移動

※「アル」は、完了相・結果相の解釈を生じさせるアスペクト補助動詞として機能。

- (12) a. 他動詞に「アル」が付加されることで、外項が「抑制」され、対格付与能力も「吸収」されているため、統語的には一種の受動文として捉えられる。
 b. 意味的には、主動詞の表す動作によって引き起こされる「結果的状況の存在」を表している。

●本発表の提案

- (13) a. 英語の *There* 受動文は、「存在」を表す本動詞 BE がその補部として「結果的状況 (AspP)」を選択する複文構造を有している。
 b. 主語要素は Asp の有する EPP 素性の要請を満たすために、AspP 指定部へ主語移動を起こす。（ただし、その適用については、初期近代英語期以降は義務的になったのに対し、後期中英語期までは随意的であった。）



⇒後期中英語期における *There* 受動文の語順パターンに関する多様性と初期近代英語期以降のその消失は、当該時期の主語移動の適用可能性の相違に還元される。

※保坂 (2014)は、*beon* 受動態において BE 動詞が「存在」を表す本動詞として機能していた可能性を指摘。

- (15) 主語移動の義務的適用の有無と There 受動文が示す語順パターンの多様性の相関:

	～後期中英語	初期近代英語～
主語移動の適用	随意的	義務的
虚辞 - be - DP - 受動分詞 - PP	✓	✓
虚辞 - be - 受動分詞 - DP - PP	✓	*

4. 「虚辞 - be - 受動分詞 - DP - PP」語順の認可と主語移動の随意的適用の相関

●調査資料: (cf. (2))

Text Name (File Name)	Date	Dialect	Genre
Capgrave's Chronicle (CMCAPCHR)	a1464	East Midlands (Lynn, Norfolk)	History
Gregory's Chronicle (CMGREGOR)	c1475	Southern (London)	History

議論①: 非対格動詞文における主語移動適用の随意性 (cf. (7))

- (16) a. ... was a parlement at Norhampton, where was reysid a grievous taske
 was a parliamentat Northampton, where was raised a grievous task
 '... was a parliament at Northampton, where a grievous task was levied' (Capgrave 184.27-28)
- b. þe Lord Spencer tok þe town of Crotey, where were killed IIII. hundred armed men
 the Lord Spencer took the town of Crecy, where were killed four hundred armed men
 'the Lord Spencer took the town of Crecy, where four hundred armed men were killed' (Capgrave 165.13-14)

議論②: V-to-T 移動の適用可能性

英仏語における動詞と副詞の相対的位置関係: (cf. Emonds (1978), Pollock (1989))

- (17) a. John often kisses Mary. b. * John kisses often Mary.
- (18) a. * Jean souvent embrasse Marie. b. Jean embrasse_i souvent _{t_i} Marie.
 Jean often kisses Marie. ↑ V-to-T movement
- (19) a. ... a new mony of gold, which we clepe now a ferping of gold
 a new moneyof gold, which we call now a farthing of gold
 '... a new money of gold, which we now call a farthing of gold' (Capgrave 121.12-13)
- b. that hyt causyd afty many mannys dethe
 that it caused after many men's death
 'that it caused the death of many men afterwards' (Gregory 196.24)

英語における否定文の史的発達: (cf. 安藤 (2002: 112))

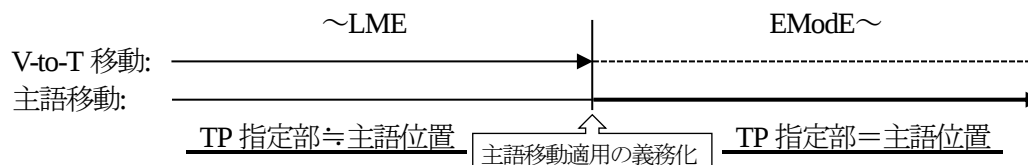
- (20) a. I say not : 14c 末-EModE
 b. I not say (まれ) : 15c-EModE
 c. I do not say : 16c-17c に確立
- (21) a. ... he asked why sche came not to soper
 he asked why she came not to supper
 '... he asked why she did not come to supper' (Capgrave 49.33)
- b. for he sparyd not hyr malysse, nor hyr falssenysse, nor gyle, nor treson, ...
 for he spared not her malice, nor her falseness, nor gyle, nor treason,
 'for he did not spare her malice, nor her falseness, nor wile, nor treason, ...' (Gregory 224. 28-29)

議論③: 許容可能な語順パターンの多様性 (「虚辞 - be - DP - 受動分詞 - PP」語順の認可) (⇔(2))

- (22) a. There was he robbed of mech good which he had gadered
 there was he robbed of much money which he had gathered (Capgrave 243.7-8)
- b. and there were cartayne personys done unto dethe,
 and there were quartan persons done to death (Gregory 176.16-17)

5. TP 指定部の「主語位置」としての位置づけの確立とその帰結

(23) 英語における EPP 素性の要請の満たし方と TP 指定部の位置づけに関する通時的変遷:



⇒主語移動適用の義務化により、TP 指定部は「主語位置」としての位置づけを完全に確立させた。

英語における間接受動文の史的発達: (cf. Denison (1993), Allen (1995), 安藤 (2002), 柳 (2017), etc.)

(24) a. She was given a birthday present.

b. * A birthday present was given her.

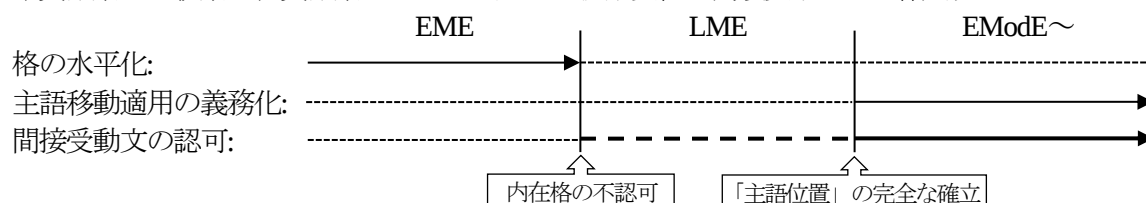
(25) But me was toold, certeyn, nat longe agoone is, That ... : 与格目的語

(Lit.) 'But me was told, certainly, not long ago, that ...' (Chaucer, *Wife of Bath's Prologue* 9-10/ 安藤 (2002: 104))

→当該構文は、14 世紀後半に観察されるようになるが、15 世紀後半までは一般的でなかった。

※当該構文の発達には、格の水平化とそれに伴う内在格の不認可が関与している。

(26) 中英語期から初期近代英語期にかけての形態・統語変化と間接受動文の段階的発達プロセスの相関:



⇒TP 指定部が「主語位置」としての位置づけを完全に確立させたことに伴い生じる強い統語的要請により、その位置を占める間接目的語の「主語化」が進み、間接受動文の使用が急速に拡大したと分析可能。

There 構文における虚辞 there の主語化: (cf. Breivik (1983), Hosaka (1999), etc.)

(27) 虚辞 there の主語としての振る舞いは、16 世紀 (EModE 期) に確立した。

⇒V2 現象が許容されていた古・中英語では、文頭位置を占める虚辞 there が強い談話的機能を有する談話標識として機能していた (cf. 中尾・児馬 (1990))。

⇒虚辞 there の主語化についても、TP 指定部の「主語位置」としての位置づけの完全な確立に伴う統語的要請により引き起こされた現象として捉えることが可能。

主要参考文献: Alexiadou, A. and E. Anagnostopoulou (1998) "Parameterizing AGR: Word Order, V-Movement, and EPP Checking," *NLLT* 16. / Allen, C. (1995) *Case Marking and Reanalysis*, Oxford University Press. / 安藤貞雄 (2002) 『英語史入門』, 開拓社. / Breivik, L. E. (1983) *Existential There: A Synchronic and Diachronic Study*, Department of English, University of Bergen. / Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press. / Denison, D. (1993) *English Historical Syntax*, Longman. / 本多尚子 (2015) 「There 受動文の史的発達に関して」, 『英語と文学、教育の視座』, DTP 出版. / Hosaka, M. (1999) "On the Development of the Expletive There in There+Be Construction," *Studies in Modern English* 15. / 西原俊明 (2009) 「There 受動文と非対格動詞を含む There 構文について」, *JELS* 26. / Ohkado, M. (1998) "On Subject Extraposition Constructions in the History of English," *Studies in Modern English* 14. / Roberts, I. (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative Study of English and French*, Kluwer. / 竹沢幸一 (2000) 「アルの統語的二面性: be/have との比較に基づく日本語のいくつかの構文の統語的解体の試み」, 『東アジア言語文化の統合的研究』筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書. / 竹沢幸一 (2001) 「コンピュータ動詞アルの語彙的二面性とその構文的具現」, 『意味と形のインターフェイス: 中右実教授還暦記念論文集 (下巻)』, くろしお出版. / 田中智之 (2010) 「EPP 再考: 英語史における主語の分布を証拠として」, 『名古屋大学文学部研究論集 (文学 56)』.

調査資料: Gairdner, J. ed. (1986) *The Historical Collections of a Citizen of London in the Fifteenth Century*, Camden Society. / Lucas P.J. ed. (1983) *John Capgrave's Abbreviacion of Cronicles*, Early English Text Society.

北尾 泰幸 (KITAO Yasuyuki)
愛知大学 (Aichi University)

(1) ?* [Which drink]_i was it Boris who bought *t_i*? (Reeve 2012: 27)
 (2) *How_i was it Boris [who bought the drink *t_i*]? (*op. cit.*, p. 27)
 (3) *It is [John's book]_i that Bill met a woman [who had not read *t_i*]. (Rizzi 2013: 171)
 (4) a. ?? It was every boy_i's mother that he_i saw first.
 b. It was his_i mother that every boy_i saw first. (Percus 1997: 344)

(6) a. ? Who_i was it [a picture of *t_i*]_j that he decorated his door with *t_j*?
 b. ? What_i was it [a review of *t_i*]_j that they had that argument about *t_j*?
 c. ? Which books_i is it [the covers of *t_i*]_j that we've got to paste these labels on *t_j*? (op. cit., p. 440)

(7) ? What_i was it [an increase in *t_i*]_j that the parliament discussed *t_j*? (Hartmann 2018: 199)

- | |
|-------------|
| Cleft 焦点句移動 |
|-------------|

 +

PP からの wh 移動

 ⇒ **Freezing Effects**
- | |
|-------------|
| Cleft 焦点句移動 |
|-------------|

 +

DP からの wh 移動

 ⇒ **OK**

● Cleft ではなく、*wh*-interrogatives の場合、PP だけでなく DP の場合も Freezing effect が現れる。

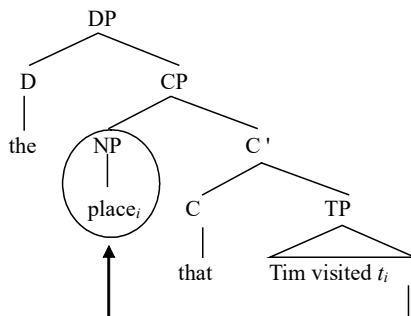
- (12) a. */?? [Whose book]_j do you wonder [[_{NP} how many reviews of *t_j]_i John read *t_i]?
 b. */?? [Which son]_j do you wonder [[_{AP} how proud of *t_j]_i John really was *t_i]?
 c. */?? [Whose month]_j do you wonder [[_{PP} how far into *t_j]_i the dentist stuck his finger *t_i]? (Corver 2017: 1720)******

- wh 移動 + PP からの wh 移動 ⇒ Freezing Effects
- wh 移動 + DP からの wh 移動 ⇒ Freezing Effects

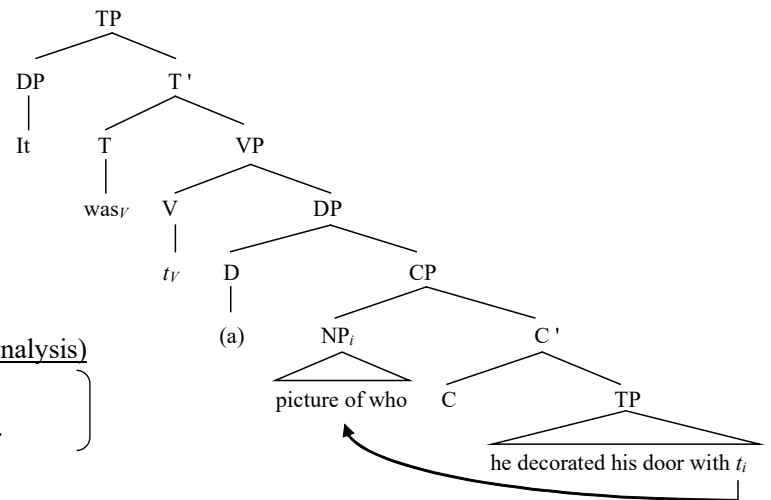
2. 分裂文における主要部上昇移動

● 名詞句を焦点に持つ分裂文は、関係節と同じ代入構造 (substitution structure) のもとで派生される。

(13) 関係節 the place that Tim visited



(14) 分裂文 It was [a picture]_i that he decorated his door with *t_i*.



主要部上昇移動 (The Head-raising/Promotion analysis)

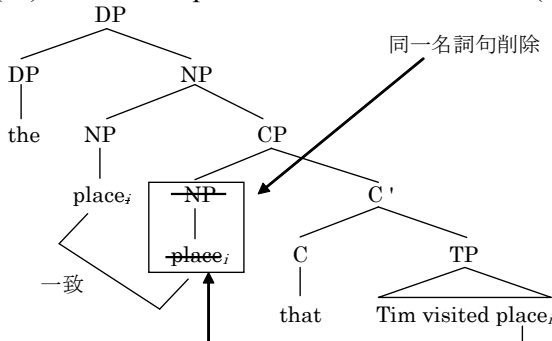
[Brame 1968, Schachter 1973, Vernaud 1974,
Kayne 1994, Bianchi 1999, Cecchetto 2006, etc.]

● NP 焦点句からの DP の抜き出し

- (15) Who_i was it [a picture of *t_i*]_j that he decorated his door with *t_j*? (= 6a)
 (16) [_{CP} C <+wh> [_{TP} it was_V [_{VP} *t_V* [_{DP} D (a) [_{CP} [_{NP} picture of who]_i that [_{TP} he decorated his door with *t_j*]]]?
 (17) [_{CP} Who_i was_V [_{TP} it *t'_V* [_{VP} *t_V* [_{DP} D (a) [_{CP} [_{NP} picture of *t_i*]_j that [_{TP} he decorated his door with *t_j*]]]?
 ↑

● 前置詞句を焦点に持つ分裂文は、付加構造 (adjunction structure) を作り出す。

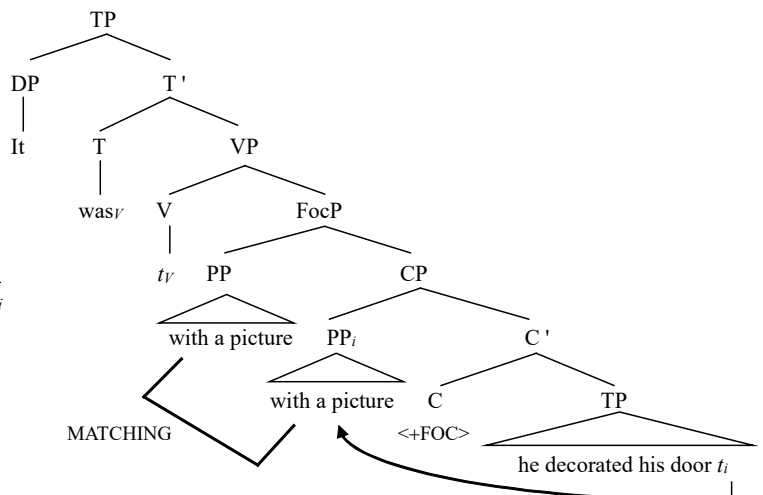
(18) 関係節 the place that Tim visited



一致分析 (The Matching Analysis)

[Sauerland (2000), Fox (2002),
Aoun and Li (2003), Cecchetto (2006), etc.]

(19) 分裂文 It was [with a picture]_i that he decorated his door *t_i*.



- (20) a. Peter put it under the table where I had put it earlier.¹
 b. *Bill was drunk which was disgusting.
 c. *John answered the question politely which I thought was how he should have answered it.
 d. *The cheese was bought by John which was fortunate. (Fabb 1990: 60)

● 焦点句からの DP の抜き出し

(21) *Who_i was_V it [with a picture of t_i]_j that he decorated his door t_j? (= 5a)

(22) [CP C <+wh> [TP it was [VP t_V [PP with a picture of who] [CP [PP with a picture of who]_i C <+FOC> that [TP he decorated his door with t_j]]]?
 MATCHING <+ FOC> ⇒ Frozen

(23) [CP Who_j was_V [TP it t'_V [VP t_V [PP with a picture of who] [CP [PP with a picture of who]_i C <+FOC> that [TP he decorated his door with t_j]]]?
 MATCHING <+ FOC>
 付加詞条件違反

(24) [CP Who_j was_V [TP it t'_V [VP t_V [PP with a picture of who]_i [CP [PP with a picture of who]_i C <+FOC> that [TP he decorated his door with t_j]]]?
 MATCHING <+ FOC> 統語連鎖

(25) 分裂文 (*it*-cleft) 焦点句

・ DP/NP : 代入構造 (Substitution structure)

・ PP : 付加構造 (Adjunction structure)

C の <+FOC> 素性により PP が牽引される

→ 要素の抜き出し OK

→ 意味的同定 (matching)

∴ 凍結 (Frozen)

→ PP からの要素の移動 不可

3. 関係節と分裂文の類似性

● 英語分裂文 (*it*-cleft) 焦点句 DP/NP の「代入構造」の根拠

・ 再構築・連結性 (reconstruction/connectivity)

- (26) a. The portrait of himself_i that John_i painted is extremely flattering. (Schachter 1973: 32)
 b. We admired the picture of himself_i (that) John_i painted in art class. (Aoun and Li 2003: 111)
 (27) a. The *headway* that we made was satisfactory. (Brame 1968)
 b. The careful *track* that she's keeping of her expenses pleases me. (Schachter 1973: 32)

・ 再構築・連結性の欠如

- (28) a. the picture of Bill_i that he_i likes (Munn 1994: 402)
 b. The accident of John_i's that he_i will never forget is the one that affected him_i first. (Cecchetto 2006: 26)
 (29) a. ?? The headway which Mel made was impressive.
 b. ?? The careful track which she's keeping of her expenses pleases me. (Aoun and Li 2003: 110)

● DP/NP を焦点句に持つ分裂文： 再構築・連結性が見られる

- (30) a. It is herself that/who Mary trusts the most. (Kiss 1998: 259)
 b. It was a picture of herself that Mary gave to John. (op. cit., p. 259)
 c. It's careful track that she's keeping of her expenses. (Reeve 2012: 47)

¹ 文法的だが、関係節は under the table ではなく、table を先行詞として取っている。

4. PP 焦点句の「代入構造」による派生

● 分裂文 PP 焦点句を「代入構造」(Substitution structure) に基づいて派生する可能性

(31) P : 機能範疇 → 名詞相当語句 (nominal) における機能範疇

(van Riemsdijk 1978, Emonds 1985, Grimshaw 2000, 2005)

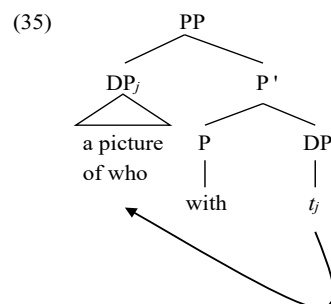
(32) Grimshaw (2000, 2005): Extended Projection

PP – DP – NP: Extended Projection

(33) **PP: Phase** (Citko 2014, etc.)

(34) *Who_i was it [with a picture of t_i]_j that he decorated his door t_j?

(36) [CP C <+wh> [TP it was [VP t_i [DP D [CP [DP a picture of who]_j that [TP [vP [PP [DP t'_j] **with** t_j] [vP decorated his door t_i]]]]]]?



5. 結論

(i) **DP/NP を焦点句とする英語分裂文 (it-cleft) : that 関係節と同じ代入構造 (substitution)**
 → D が CP 指定部にある要素を補部として取るため、付加構造が構築されない。
 → 凍結原理 (Freezing Principle) 違反が生じない。

(ii) **PP を焦点句とする英語分裂文 (it-cleft) : 付加構造 (adjunction)**
 (および話題化等の統語派生を含む (11a, b)、複数の wh 移動が関わる (12a, b) など)
 → 焦点句の移動、話題化移動、従属節の wh 素性を照合した時点で要素が「凍結」(frozen) され、更なる要素の抜き出しである部分抽出 (subextraction) ができない。

参考文献

- Aoun, Joseph and Yen-Hui Audrey Li (2003) *Essays on the Representational and Derivational Nature of Grammar: The Diversity of Wh-Constructions*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bianchi, Valentina (1999) *Consequences of Antisymmetry: Headed Relative Clauses*, Walter de Gruyter, Berlin.
- Brame, Michael K. (1968) "A New Analysis of the Relative Clause: Evidence for an Interpretive Theory," ms., MIT.
- Cecchetto, Carlo (2006) "Reconstruction in Relative Clauses and the Copy Theory of Traces," *Linguistic Variation Yearbook* 5, ed. by Pierre Pica et al., 5-35.
- Citko, Barbara (2014) *Phase Theory: An Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Corver, Norbert (2017) "Freezing Effects," *The Wiley Blackwell Companion to Syntax (Second Edition)*, Volume III, ed. by Martin Everaert and Henk C. van Riemsdijk, 1711-1743.
- Emonds, Joseph E. (1985) *A Unified Theory of Syntactic Categories*, Foris, Dordrecht.
- Fabb, Nigel (1990) "The Difference between English Restrictive and Nonrestrictive Relative Clauses," *Journal of Linguistics* 26, 57-78.
- Fox, Danny (2002) "Antecedent-Contained Deletion and the Theory of Movement," *Linguistic Inquiry* 33, 63-96.
- Grimshaw, Jane (2000) "Extended Projection and Locality," *Lexical Specification and Insertion*, ed. by Peter Coopman et al., 115-133, John Benjamins, Amsterdam.
- Grimshaw, Jane (2005) *Words and Structure*, CSLI, Stanford, CA.
- Hartmann, Jutta M. (2018) "Freezing in it-clefts: Movement and Focus," *Freezing: Theoretical Approaches and Empirical Domains*, ed. by Jutta M. Hartmann et al., 195-224, De Gruyter, Berlin.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kiss, Katalin E. (1998) "Identificational Focus versus Information Focus," *Language* 74, 245-273.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α: Conditions on Its Application and Output*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Munn, Alan (1994) "A Minimalist Account of Reconstruction Asymmetries," *NELS* 24, 397-410.
- Percus, Orin (1997) "Prying Open the Cleft," *NELS* 27, 337-351.
- Pinkham, Jessie and Jorge Hankamer (1975) "Deep and Shallow Clefts," *CLS* 11, 429-450.
- Reeve, Matthew (2012) *Clefts and their Relatives*, John Benjamins, Amsterdam.
- Rizzi, Luigi (2006) "On the Form of Chains: Critical Positions and ECP Effects," *Wh-Movement: Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Covert, 9-133, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (2010) "On Some Properties of Criterial Freezing," *The Complementizer Phase: Subjects and Operators*, ed. by E. Phoebos Panagiotidis, 17-32, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi (2013) "Locality," *Lingua* 130, 169-186.
- Sauerland, Uli (2000) "Two Structures for English Restrictive Relative Clauses," *Proceedings of the Nanzan GLOW 1999 (Proceedings of the Second GLOW in Asia)*, ed. by Mamoru Saito et al., 351-366, Nanzan University, Nagoya.
- Schachter, Paul (1973) "Focus and Relativization," *Language* 49, 19-46.
- van Riemsdijk, Henk C. (1978) *A Case Study in Syntactic Markedness: The Binding Nature of Prepositional Phrases*, Peter De Ridder Press, Lisse.
- Vernaad, Jean Roger (1974) *French Relative Clauses*, Doctoral dissertation, MIT.
- Wexler, Kenneth and Peter W. Culicover (1980) *Formal Principles of Language Acquisition*, MIT Press, Cambridge, MA.

In-situ focus 文の構造*
(The structure of in-situ focus constructions)
森山倭成 (Kazushige Moriyama)
神戸大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員 (Kobe University / JSPS)

1. はじめに

日本語のカートグラフィー研究 終助詞, トピック「は」, 丁寧語, CP モーダル (Kishimoto 2013; Saito 2015)

- (1) 何をもって C 主要部とするか。
a. 時制辞より右側に現れる。 (e.g., 太郎が来た だろう ね)
b. 談話との関連性 (話題, 焦点など) (e.g., 太郎は 帰った)

- (2) In-situ focus 文
太郎が来たの{だ/である}。

- ・時制辞の「た」より右側 + 焦点化に関与 → C 主要部?
- ・「だ/である」は通常のコピュラ文にも現れる → V(/v)主要部?

In-situ focus 文の研究は C 主要部を認定するための一つの基準を提供する。

本発表では, In-situ focus 文の統語構造について検討する。「だ/である」は V(/v)主要部であり, 二重節をなすことを示す。カートグラフィー分析に基づく構造を提示する。

2. 先行研究

- (3) 単一節分析 (Hiraiwa and Ishihara 2002, 2012 (以下 H&I))
[FocP [FinP [TP ... T] の Fin] だ Foc]
・「の」は FinP(CP)の主要部 ・「だ」(「である」)は FocP の主要部
- (4) 二重節分析 (Terada 1993)
[TP [VP [NP [TP ... T] の N] だ] T]
・「の」は NP の主要部 ・「だ」(「である」)は V(/v)主要部

「のだ」「のである」を別個に検討する。

3. 「のだ」の構造

「だ」は C 主要部か V(/v)主要部か

- (5) C 主要部分析の問題点①: 時制辞「た」
太郎が来たのだった。

“[D]atta is not a real tensed predicate but more like a modal particle.” (H&I (2012: footnote 16))

- (6) 反論 1: 埋め込み
[CP(FocP)太郎が来たのだった]のだ。

H&I の分析では「の」は TP を補部にとる Fin 主要部。選択制限に関して問題が生じる。

- (7) 反論 2: (書き言葉では)過去時制も可能。
太郎は何も言わずにただ黙々と作業を続けるのだった。
- (8) C 主要部分析の問題点②: 伝聞を表す「そうだ」への埋め込み
[太郎が来た]そうだ。

TPを補部にとり、CPと関連づけられる要素(Kishimoto 2013; Saito 2015)は埋め込めない。

(9) a. CP モーダル: だろう, まい... b. 丁寧語: ます, です... c. 終助詞: ね, よ, さ...

(10) a. *[太郎が来ただろう]そうだ。 b. *[太郎が来ました]そうです。 c. *[太郎が来るね]そうだ。

(11) 「のだ」文を埋め込むことができる。

[太郎が来たのだ]そうだ。

過去時制と「そうだ」の例ともに V(/v)主要部とすれば問題にならない。

(12) [TP [VP [CP/NP [TP ... T] *no*] -*da*] T]

4. 「のである」の構造

二重節構造の証拠

(13) 過去時制

a. 太郎が来たのであった。 b. 太郎は何も言わずにただ黙々と作業を続けるのであった。

(14) 伝聞の「そうだ」

[太郎が来たのである]そうだ。

(15) 「である」の構造

a. 「である」は一語である。(可能性 1)

b. 「である」の「ある」はダミーの要素である(i.e., *aru-support*)。 (可能性 2)

c. 「である」は「で」の投射と「ある」の投射がそれぞれある。(可能性 3)

(16) 可能性 1 をとらない根拠: 副助詞の挿入

命が助かるのでさえあれば, あとはどうでもいい。

(17) 神戸(*さえ)大学(さえ)

(18) 可能性 2 をとらない根拠: ダミーの要素「ある」(副助詞が挿入されたときのみ, 形容詞の右側に現れる。)

a. 太郎がやさしい。 b. 太郎がやさしくさえある。

(19) 命が助かるのでありさえすれば, あとはどうでもいい。

(20) [TP [VP [CopP [CP/NP [TP ... T] *no*] -*de*] -*ar*] T]

5. In-situ focus 文のカートグラフィー

5.1. 「の」の統語範疇

「の」は Terada (1993)にとっては NP の主要部, H&I にとっては CP の主要部

(21) 代名詞の「の」

a. [昨日君が呼んだ]本を私に貸して。

b. [昨日君が読んだ]のを私に貸して。

(22) 決定詞「その」

a. その[昨日君が読んだ]本を私に貸して。

b. その[昨日君が読んだ]のを私に貸して。

(23) *その[昨日君が本を読んだ]のだ。

C 主要部であると考えられる。(H&I は「が/の」交替のテストから NP である可能性を否定している。)

5.2. Fin としての「の」

H&I は「の」を Fin としているが、根拠は特に示されていない。

- (24) トピックの「は」
太郎は来たのである。

- (25) 等位接続
a. [CopP 太郎が部屋を片付けたので]も[CopP 次郎がゴミを出したので]もない。
b. *[CopP 太郎は部屋を片付けたので]も[CopP 次郎はゴミを出したので]もない。

- (26) 太郎は[CopP 部屋を片付けたので]も[CopP ゴミを出したので]もない。

日本語もイタリア語と同じような CP 分裂の階層をなすと仮定すると, Top の要素を埋め込むことのできない「の」は Fin であることがわかる(Rizzi 1997)。

- (27) Fin ... Top ... Foc ... Top ... Force
の は は

「の」が Fin であるとする、TP を補部にとるので、トピック以外にも CP で認可される主要部は現れないことが予測される。(CP モーダルについては野田(1997: 35)を参照)

- (28) a. *[太郎が来るだろう]のだ。 b. *[太郎が来ます]のです。 c. *[太郎が来るね]のだ。

6. 非上昇構文

- (29) 「が」格主語の構造位置はどこか。
太郎が来たの{だ/である}。

- (30) a. [TP SUBJ [VP [FinP [TP ~~SUBJ~~... T] no] -de-ar/-da] T] (可能性 1: 上昇構文)
b. [TP (pro) [VP [FinP [TP SUBJ ... T] no] -de-ar/-da] T] (可能性 2: 非上昇構文 (Terada 1993))

「ている」文は二重節をなす上昇構文とされる(Kishimoto 2012, 2017)。

- (31) a. 太郎が走っている。
b. [TP SUBJ [VP [FinP [TP [VP ~~SUBJ~~...] -te] Fin] -ir] T]

- (32) a. 雨が降っている。 (無生物主語)
b. あの店で閑古鳥が鳴いている。 (文イディオム)

無生物主語と文イディオムの「のだ」文への埋め込みも可能。一見、上昇構文のように思える。

- (33) a. 雨が降ったの{だ/である}。 (無生物主語)
b. あの店で閑古鳥が鳴いたの{だ/である}。 (文イディオム)

非上昇構文分析の証拠①: 主語尊敬語化 (Kishimoto 2012; 竹沢 2016)

- (34) 山田先生が村田先生にそのことをご説明になった。

- (35) 「ている」文
a. 山田先生がお走りになっている。 b. 山田先生が走っていらっしやる。

- (36) In-situ focus 文
a. 山田先生がお走りになったの{だ/である}。 b. *山田先生が走ったのでいらっしやる。

- (37) 「だ」「である」を尊敬語にできないわけではない。コピュラ文
 a. 山田先生が美人{だ/である}。 b. 山田先生が美人でいらっしゃる。
- (38) コピュラ文の In-situ focus 文への埋め込みと尊敬語化
 a. 山田先生が美人なの{だ/である}。 b. 山田先生が美人でいらっしゃるの{だ/である}。
 c. ?*山田先生が美人なのでいらっしゃる。(査読者は(c)を容認可能と判断している。)

非上昇構文分析の証拠②: 否定辞の作用域 (Kishimoto 2017)

- (39) NPI と否定辞が同一節にある場合
 a. クラスの必ずしも全員が[花子が来たと]思っていない。
 b. 花子が[クラスの必ずしも全員が来なかったと]思っている。
- (40) 同一節にない場合
 a. 花子が[クラスの必ずしも全員が来たと]思っていない。
 b. *クラスの必ずしも全員が[花子が来なかったと]思っている。

否定辞「ない」の作用域は上位節まで拡大しない。

- (41) 「ている」文
 a. クラスの必ずしも全員が来ていない。 b. *クラスの必ずしも全員が来ないでいる。
- (42) In-situ focus 文
 a. クラスの必ずしも全員が来たのではない。 b. クラスの必ずしも全員が来なかったのだ。

7. 結語

In-situ focus 文は二重節構造をなす非上昇構文である。

- (43) a. [TP (*pro*) [VP [_{FinP} [TP SUBJ ... T] *no*] -*da*] T] b. [TP (*pro*) [VP [_{CopP} [_{FinP} [TP SUBJ ... T] *no*] -*de*] -*ar*] T]

「だ/である」は CP の主要部ではない。本発表では、C 主要部の判定法としていくつかのテストを提示した。

参考文献

- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. In T. Ionin, H. Ko, and A. Nevins (eds.) *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research*, 35–54. Cambridge, MA: MITWPL.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15: 142–180.
- Kishimoto, Hideki. 2012. Subject honorification and the position of subjects in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 21: 1–41.
- Kishimoto, Hideki. 2013. Notes on correlative coordination in Japanese. In Yoichi Miyamoto, Daiko Takahashi, Hideki Maki, Masao Ochi, Koji Sugisaki, and Asako Uchibori (eds.), *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito*, 192–217. Tokyo: Kaitakusha.
- Kishimoto, Hideki. 2017. Negative polarity, A-movement, and clause structure in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17: 109–161.
- 野田春美. 1997. 『の(だ)の機能』 東京: くろしお出版.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281–337. Kluwer, Dordrecht.
- Saito, Mamoru. 2015. Cartography and selection: Case studies in Japanese. In Uri Shlonsky (ed.) *Beyond Functional Sequence*, 255–274. Oxford University Press, New York.
- 竹沢幸一. 2016. 「日本語モーダル述語構文の統語構造と時制辞の統語的役割」 藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』, 55–76. 東京: 開拓社.
- Terada, Michiko. 1993. Null-expletive subject in Japanese. *Kansas Working Papers in Linguistics* 18: 91–110.

*本研究は JSPS 科研費 JP19J20008 の助成を受けている。

ラベル決定アルゴリズムによる日本語の複合語の統語的分析
(A Syntactic Analysis of Japanese Compounds with the Labeling Algorithm)

佐藤 亮輔 (SATO Ryosuke)
高知大学 (Kochi University)

1. はじめに

- (1) Kageyama (2001, 2009, 2013) による分類
 - a. 語彙的複合語 (lexical compound)
 - b. Word⁺ 複合語 (word-plus compound)
 - c. 後統語的複合語 (post-syntactic compound)
- (2) 対応する句の存在の有無
 - a. 新婚旅行
 - b. *新婚で旅行
 - c. 焼肉店経営者
 - d. *焼肉店を経営者
 - e. 卒業式終了後
 - f. 卒業式が終了後 (に)
- (3) 丁寧語 (subject honorification) の生起の可否
 - a. *先生は [新婚ご旅行] に出かけられた。 (cf. Shibatani and Kageyama (1988: 474))
 - b. *? [長期 | ご滞在計画] (cf. Kageyama (2001: 249))
 - c. 先生が [ヨーロッパ | ご滞在] の折 (cf. Kageyama (2001: 249))
- (4) アクセントの違い
 - a. 山登り (cf. Shibatani and Kageyama (1988: 459))
 - b. 全国 | のど自慢大会 (cf. Kageyama (2001: 247))
 - c. アメリカ | 訪問 (中) (cf. Shibatani and Kageyama (1988: 459))
- (5) 「照応の島」(Postal (1969)) の有無
 - a. *提督は、艦砲_i射撃の折、それ_iは時代遅れだと言った。
 - b. *提督は、不審船_i射撃準備の折、それ_iはスパイ船だと言った。
 - c. 提督は、不審船_i射撃の折、それ_iはスパイ船だと言った。

2. 先行研究とその問題点

- (6) Kageyama (2001, 2009, 2013) の分析
 - a. 語彙的複合語・Word⁺ 複合語： 語彙部門で形成される
 - b. 後統語的複合語： 統語部門で形成される
 - c. 語彙的複合語は Word⁺ 複合語よりも構成要素間の結びつきが強い

(7) (6) の問題点

- a. 構成要素間の結びつきの「強さ」という概念が不明確。
- b. 語彙的複合語と Word⁺ 複合語、後統語的複合語の違いを説明するため、前者 2 種は語彙部門で形成され後者は音韻部門で形成されると主張しているが、これは単に事実を形成部門の違いに言い換え、規定 (stipulate) しているに過ぎない。
- c. 分散形態論 (Halle and Marantz (1993)) では、そもそも「語」と「句」を区別できない。

3. 提案

(8) ラベル決定アルゴリズム (Labeling Algorithm) (Chomsky (2013, 2015))

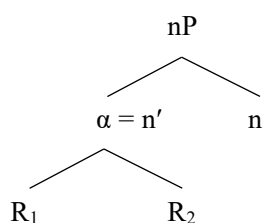
- a. XP と Y が併合 (merge) した場合 : Y が全体のラベルとなる。
- b. XP と YP が併合した場合 :
 - (i) XP が転置 (dislocate) された場合は Y が全体のラベルとなる。
 - (ii) XP と YP が共通の素性 F を持つ場合は F が全体のラベルとなる。
- c. 英語の T と語根 (root) はラベル決定に参加できない。

(9) 反ラベル素性 (anti-labeling feature) λ (Saito (2016))

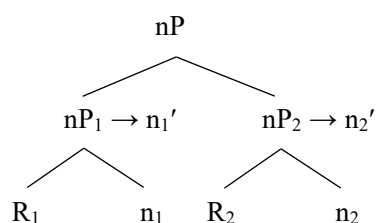
日本語の格助詞は反ラベル素性 (anti-labeling feature) λ であり、この素性を持つ要素はラベル決定に参加しない。

- (10) a. 最初に語根 R 同士が併合され、最後に名詞化要素 n が併合される可能性
 $(R + R) + n$
- b. 最初に語根 R と名詞化要素 n が併合され、さらにその複合体が併合される可能性
 $(R + n) + (R + n)$
- (11) a. (10b) の結果できた統語体に λ 素性が付加しない可能性
- b. (10b) の結果できた統語体に λ 素性が付加する可能性

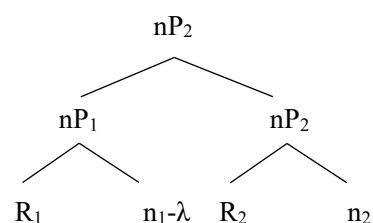
(12) a. 語彙的複合語



b. Word⁺ 複合語



c. 後統語的複合語



cf. Sato (2019) for nominal-feature sharing

4. 分析

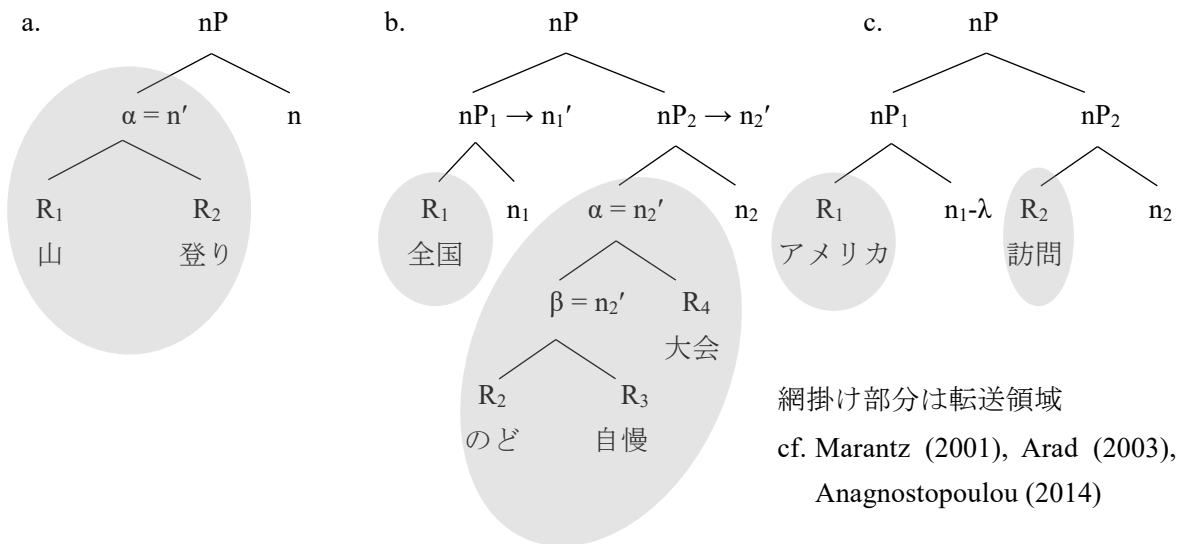
(13) 対応する句の存在の有無 (2)

- a. $[_{nP} [\alpha = n' [R \text{ 新婚}][R \text{ 旅行}]] n]$
- b. $[_{nP} [_{nP \rightarrow n'} [R \text{ 焼肉店}]] n] [_{nP \rightarrow n'} [R \text{ 経営者}]] n]$
- c. $[_{nP} [_{nP [R \text{ 卒業式}]] n-\lambda} [_{\lambda} \text{ が}]] [_{nP [R \text{ 終了後}]] n]$

(14) 丁寧語 (subject honorification) の生起の可否 (3)

- a. $[_{nP} [\alpha = n' [R \text{ 新婚}][R \text{ 旅行}]] n]$
- b. $[_{nP} [_{nP \rightarrow n'} [R \text{ 長期}]] n] [_{nP \rightarrow n'} [R \text{ 滞在計画}]] n]$
- c. $[_{nP} [_{nP [R \text{ ヨーロッパ}]] n-\lambda} [_{nP [R \text{ 滞在}]] n]$

(15) アクセントの違い (4)



(16) 「照応の島」 (Postal (1969)) の有無 (5)

- a. $*[_{nP} [\alpha = n' [R \text{ 艦砲}]]_i [R \text{ 射撃}]] n]$ の折、それ_iは時代遅れだと言った。
- b. $*[_{nP} [_{nP \rightarrow n'} [R \text{ 不審船}]]_i [_{nP \rightarrow n'} [R \text{ 射撃準備}]] n]$ の折、それ_iはスパイ船だと言った。
- c. $[_{nP} [_{nP [R \text{ 不審船}]] n-\lambda}_i [_{nP [R \text{ 射撃}]] n]$ の折、それ_iはスパイ船だと言った。

5. さらなる帰結

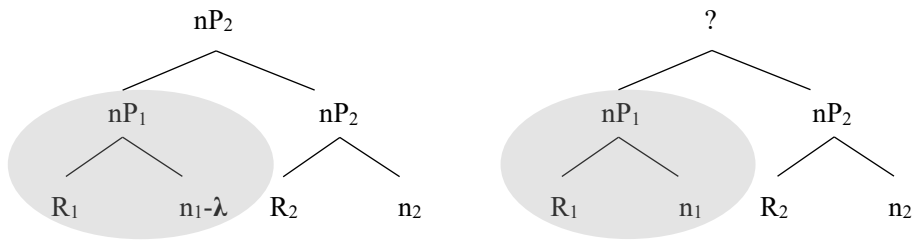
(17) (= (2)) 非合成的解釈 vs. 合成的解釈

- a. $[_{nP} [\alpha = n' [R \text{ 新婚}][R \text{ 旅行}]] n]$
- b. $[_{nP} [_{nP_1 \rightarrow n'} [R \text{ 焼肉店}]] n] [_{nP_2 \rightarrow n'} [R \text{ 経営者}]] n]$
- c. $[_{nP} [_{nP_1 [R \text{ 卒業式}]] n-\lambda} [_{nP_2 [R \text{ 終了後}]] n]$

(18) 英語には日本語のような後統語的複合語がない

a. 日本語 (λにより格表示可能)

b. 英語 (λにより格表示不可能)



(19) 句複合語 (phrasal compound)

- a. He was the groundsman, handyman, **if-there's-any-sort-of-difficulty-ask-William-and-he'll-fix-it-for-you person** about the place.
- b. We've got a **what-the-unions-will-allow-us-to-print press**.
- c. The old **manage-somehow-on-a-shoestring days** were definitely gone.

(Bauer, Lieber, and Plag (2013: 489), boldface in the original)

(20) a. 旅行に行こうキャンペーン

b. 自宅で仕事しよう月間

c. 美しい国を作ろう総理

d. 無料でいいのかクオリティー

参考文献

Anagnostopoulou, Elena (2014) "Roots and Domains," *Theoretical Linguistics* 40, 299-310. / Arad, Maya (2003) "Locality Constraints on the Interpretation of Roots: The Case of Hebrew Denominal Verbs," *NLLT* 21, 737-778. / Bauer, Laurie, Rochelle Lieber and Ingo Plag (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*, Oxford University Press, Oxford. / Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49. / Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 1-16, John Benjamins, Amsterdam. / Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Keyser, 111-176, MIT Press, Cambridge, MA. / Kageyama, Taro (2001) "Word Plus: The Intersection of Words and Phrases," *Issues in Japanese Phonology and Morphology*, ed. by Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nishihara, 245-276, Mouton de Gruyter, Berlin. / Kageyama, Taro (2009) "Isolate: Japanese," *The Oxford Handbook of Compounding*, ed. by Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, 512-526, Oxford University Press, Oxford. / Kageyama, Taro (2013) "Postsyntactic Compounds and Semantic Head-Marking in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 20, 363-382. / Marantz, Alec (2001) "Words," ms., MIT. / Postal, Paul (1969) "Anaphoric Islands," *CLS* 5, 205-239. / Saito, Mamoru (2016) "(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without Φ-Feature Agreement," *The Linguistic Review* 33, 129-175. / Sato, Ryosuke (2019) "Clausal Gerunds and Labeling," *English Linguistics* 36, 48-68. / Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) "Word Formation in a Modular Theory of Grammar: Postsyntactic Compounds in Japanese," *Language* 64, 451-484.

形式と相互行為機能の適合

—極性質問に対する応答の拡張に着目して—

(The Fit between Form and Interactional Function: A Conversation Analytic Study of Post-Confirmation Elaboration)

早野 薫 (HAYANO Kaoru)

日本女子大学 (Japan Women's University)

1. 背景

極性質問 (yes/no 質問) は、その形式によって、質問者が応答として *yes* を想定、期待しているのか、*no* を期待、想定しているのかを表す。そして、その想定を肯定する応答 (confirmation) は、否定する応答 (disconfirmation) に比べ、はるかに高い頻度で、直接的な形で、産出される。この、肯定と否定の間に見られる非対称性は、前者を後者よりも「優先 (prefer)」する会話参加者たちの指向性のあらわれだと言える (Sacks 1987; Pomerantz, 1984)。

ところが、質問を肯定するところから始まった応答が拡張され、最終的には質問が否定されたり、肯定が次第に修正されたり、撤回されることも多々ある。先行研究では、このような「肯定→否定／修正」の形をとる応答は、一律に「*yes but...*」応答 (Schegloff 2007:70) と呼ばれ、肯定応答の優先性の現れとして分析されてきた。しかしながら、肯定の後に続く否定／修正は、必ずしも *but* によって導入されるとは限らず、そこには形式的バリエーションが見られる。

このことに着目した Hayano & Hayashi (to appear) は、日本語会話における「肯定 (うん) →否定／修正」応答が取る文法形式のバリエーションと、それぞれの形式が担う相互行為上の機能を記述した。そこで観察された形式は、a) 逆接接続詞によって導入される独立節 (「うん、でも....」)、b) 「～けど」、「だし」などの接続助詞を伴う後置従属節 (「うん、...だけど.」)、c) 肯定要素との意味関係が文法的にマークされていないもの、の3つである。これを、会話分析の手法を用いて分析した結果、以下の3点が観察された。

- i) a) の形は、「うん」によって行なった肯定を取り下げることなく、そこから導き出される可能性のある含意だけを否定するために用いられる。
- ii) b) のかたちは、いったん行なった肯定を実質的に取り下げの用に用いられる。
- iii) c) の形は、質問の前提そのものに問題があることを主張する際に用いられる。

2. 研究課題

本研究では、前述の日本語データにもとづく研究を出発点とし、英語日常会話に現れる「肯定→否定／修正」応答にはどのような文法形式のバリエーションがあるのか、それらの形式が担う相互行為上の機能はどのようなものなのか、そして、形式と機能の適合という点から見て、日英語で共通した傾向が見られるのかどうか、以上の3点を明らかにすることを目指す。

3. データと方法

データは、英語母語話者同士の日常会話である。先行研究で引用されている事例 11 ケース、*Talkbank* にて公開されている電話会話コーパス *CallFriend* と *CallHome* から抽出した事例 15 ケース、あわせて 26 ケースを分析の対象とし、これを、Gail Jefferson によって開発された会話分析の方法をもとに転記し (Ochs et al. 1996 参照)、会話分析の方法で分析する。

4. 分析

収集された事例から、英語会話における「肯定→否定／修正」応答における否定／修正にも、日本語と同様、

a) 逆接続詞 *but* によって導入される独立節 (*Yeah, but...*)

b) *except, though* などの接続詞を伴う従属節 (*Yeah, except/ though...*)、

c) 肯定要素との意味関係が文法的にマークされていないもの

の 3 つの形式が観察された。さらに、各形式が担う相互行為上の機能も、日本語データについて観察されたものと、概ね共通していることが分かった。以下、例を挙げながら示す。

4.1. 逆接続詞 *but* によって導入される独立節 (*Yeah, but...*)

事例 (1) に先立って、妊娠中の Nina は、悪阻がひどかったことを説明していた。その話が一段落としたところで、Meg が、悪阻の時期は終わりかけているのか、と、極性質問をする。Nina は、この質問をまずは *Yeah* と肯定するが (4 行目)、その後には *but* が導入する独立節が続いている。

(1) [CallFriend eng-n 4175]

```
1 Meg: 'd now you're starting to get past that problem?,
2 (0.2)
3 Meg: [t(im) ]
4 Nina: [ye::a::h. yea:h but no:w li::ke-.h ( ) the the
5 second trimester:'s supposed to be the be:st
6 and I'm: u:h:(h) (0.5) .hhh I'm goin' in: to the:
7 u:h: .hhh thir:d t[ri:mester in two: wee::ks
8 Meg: [o::h hh hh
```

4 行目の *but* 節の内容は、肯定を取り下げ、質問を否定しているわけではない。肯定したこと自体は保持しつつ、しかし、そこから導き出されるであろう含意 (今は体調が良いということ) を否定する働きをしている。

4.2. *Except, though* などの接続詞を伴う従属節

他方、肯定の後に従属節が続く場合、これは、肯定を後から著しく弱めるか、実質的に取り下げる働きをする。事例 (2) で、A は、'N (*And*) *they haven't heard a word huh?* と質問している。この質問は、優先的応答として *no* を期待する形を取っている。B は、まずはこの期待に沿った応答 (*Not a word, uh-uh. Not- Not a word. Not at all.*) をするが、続けて、*except* を接続詞として用いて、相手の仮説を棄却する情報を提供している。

(2) [Sacks 1987: 63]

- 1 A: 'N they haven't heard a word huh?
2 B: Not a word, uh-uh. Not- Not a word. Not at all.
3 Except - Neville's mother got a call...

3行目で産出されている節 (*Except - Neville's mother got a call*) は、A が示した仮説である *they haven't heard a word* を主節とした従属節として組み立てられている。そして、その内容は、2行目でいったんは受け入れた A の仮説を、事実上撤回している。これは、事例 (1) における *but* 節によってなされた「否定／修正」とは、性質が異なるものである。

4.3. 肯定要素との意味関係が文法的にマークされていないもの

肯定に続く否定／修正が、先行する肯定との意味関係を示す文法標識を伴わずに産出される事例は、質問の前提に問題があることを主張する際に観察される。事例 (3) はその一例である。1行目で、Rola は、「Liz の恋人 (Fiore) が、Liz の前でイタリア語を話すことを恥ずかしがらなくなったか」、質問する。Liz は、この質問をまずは *yeah* で肯定するが (3行目)、その後すぐに *it's not really shyness I think ...* と、そもそも、恋人は恥ずかしがっていたわけではない、と、質問の前提に異議を唱えている。この応答の拡張は、接続詞によって肯定した内容と文法的に結び付けられていない。

(3) [CallFriend eng-n 4984]

- 1 Rola: and so: Fiore got over his shyness of speaking
2 Italian in front of you?
3 Liz: ehhe ↓yea::h
4 Rola: [goo:d]
5 Liz: [.hhh]
6 Rola: [>that he'd [()a:lso]
7 Liz: [↑it's ↑no:t ↓really]shy:↓ness= I think
8 he thought my Italian was better but...

以上の分析から、英語日常会話における肯定→否定／修正応答においても、日本語会話で観察されたのと同様の形式が観察され、さらに、それらの形式は、日本語と同様の機能を担っていることが分かる。

5. まとめ

本研究では、極性質問に対する応答の拡張という文脈において、文法形式上の区別が、異なる相互行為上の課題を達成するための手段として区別されていること、そして、その区別が、日本語と英語にまたがって観察されるものであることが示された。これは、Schegloff (1996: 199) が「方法と行為の適合 ("the fit between the practice and the action") 」と呼んだ現象の、一つの現れとして理解できる。肯定の後の否定／修正が独立節 (「でも…」 / "but...") の形を取るとき、二つの要素の間には形式的独立性が保たれることになる。この、形式上の独立性は、それぞれの要素が伝える意味内容の独立性の保持と結びつき、したがって、「うん」あるいは *yes* によって行なった肯定はそのままに、それを損なったり取り下げたりすることなく、応答を展開するのに適った形式として使用される。それに対し、否定／修正が従属節として提示されるとき、これは、肯定された内容を、後続の従属節を含み持つ単位 (文の一部として取り込むことになり、意味の上でも、より深く干渉することと結びつく。さい

ごに検討した、文法標識を伴わない否定／修正は、いったん行なった肯定の「やり直し」として理解されるべきなのかもしれない。このように、相互行為上のプラクティスと、それによって達成される行為との適合性、そこに見られる通言語的傾向を記述することは、今後さらなる展開が期待できるアプローチだと考えられる。

引用文献

- Hayano, Kaoru and Makoto Hayashi. (to appear). "Post-confirmation modifications in response to polar questions." In *Responses to Polar Questions*, ed. by Galina Bolden, John Heritage and Marja-Leena Sorjonen. Amsterdam: John Benjamins.
- Ochs, Elinor, Emanuel A. Schegloff, Sandra A. Thompson (eds.). (1996). *Interaction and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pomerantz, Anita. (1984). "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes." In *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, ed. by J. Maxwell Atkinson, and John Heritage, 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, Harvey. (1987). "On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation." In *Talk and Social Organisation*, ed. by Graham Button, and John R.E. Lee, 54-69. Clevedon: Multilingual Matters.
- Schegloff, Emanuel A. (1996a). "Confirming allusions: Toward an empirical account of action." *American Journal of Sociology* 102: 161-216.
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

as N as 構文の N
(N in as N as Constructions)

松田 佑治 (MATSUDA Yuji)
立命館大学 (Ritsumeikan University)

1. 序

1.1. as N as it gets / as N as they come 構文の定義(松田 2019)

- (1) And here's the big turn. If the first part of Trump's video sounds nothing like his usual style, then the last part is **as Trump as it gets**. (NBC News, 2016/10/8) (松田 2019: 218)
- (2) Flavors like rhubarb-vanilla sorbetto and kaffir lime, pink peppercorn are about **as San Francisco as it gets**; [...] (The New York Times, 2014/6/3) (ibid.: 218)
- (3) Pirates of the Caribbean is **as Disney as it gets**, and it never gets old! (ibid.: 218)
- (4) John's haircut is **as 2019 as they come**. (ibid.: 219)
- (5) The book itself is **as me as it gets**. Who chose the words? Who lived the life?

(J. Carswell, *Talk of Treasure*)

・松田 (2019: 219) は、s N as it gets / as N as they come 構文の N には、都市名、機関名、スポーツ名、季節、ブランド名、出来事、食物を示すような固有名詞が生起すると指摘する。

NP be as N as it gets / NP be as N as they come 構文の定義

NP is a very typical type of someone or something found in N. / NP embodies the essence of N.

(松田 2019: 221)

1.2. as N as 構文

as ... as 構文に固有名詞（年代を含める）N や、人称代名詞（対格）N が生起する (1)-(5) のような構文を、本発表では as N as 構文と呼ぶ。

1.3. 本発表の主張

- ・松田 (2019) で指摘されていない as N as 構文を指摘する。
- ・固有名詞 N・人称代名詞 N は、普通名詞・物質名詞・抽象名詞と異なり、潜在的に多数の性質・属性を備えている。そのため、as N as 構文の N や very N の環境で N が修飾されると、N 内部の多数の性質・属性の全体（または一部）に焦点が当たり、N の形容詞的読みが（強制的に）上書きされる。

2. 先行研究と問題点

2.1.1. 名詞から形容詞への転換 (Quirk et al. 1985)

- (6) a. [Reclassification] They're **very Oxbridge**. (Quirk et al. 1985: 248)
- b. [Conversion to adjective] His accent is **very Mayfair (very Harvard)**. (ibid.: 1562)

2.1.2. 名詞から形容詞への転換 (Huddleston and Pullum 2002)

- (7) [Conversion from noun to adjective] He has a **very Oxbridge** accent or His accent is **very Oxbridge**. (Huddleston and Pullum, 2002: 1643)

2.2. 強制 (coercion)

強制 (coercion) という現象は、Pustejovsky (1995)、Jackendoff (1997)、Taylor (1998, 2002)、Audring

and Booji (2016) などによって指摘されている(八木 (1987: 49) でも、「強制」という語を用いていないが、2.2.1.節と同じ趣旨の言及がある)。

2.2.1. Taylor (1998, 2002)

“What happens, in many cases, is that the construction’s semantics ‘coercion’ the semantic value of one of its parts, such that the part becomes compatible with the construction’s overall meaning.” (Taylor 1998: 194)

“By **coercion**, I refer to the phenomenon whereby a unit, when it combines with another unit, exerts an influence on its neighbour, causing it to change its specification.” (Taylor 2002: 287)

2.2.2. Audring and Booji (2016) による強制の3つの分類(cf. 住吉・鈴木・西村 (2019:10))

・選択強制 (coercion by selection)

- (8) a. *drop/discuss the book*
b. *want/finish the book*

(Audring and Booji 2016: 629)

・拡充強制 (coercion by enrichment)

- (9) a. *The light flashed until dawn.*
b. *We played poker and she won all night.*

(Audring and Booji 2016: 629)

・上書き強制 (coercion by override) ←[本発表における as N as 構文はこのタイプに属する]

- (10) *We’ve got three **Pauls** in the family.* (Audring and Booji 2016: 632)
(11) *This is **so 2013**.* (ibid.: 632)
(12) *This building looks **very American**.* (ibid.: 633)

先行研究の問題点

→どのような原理・仕組みで固有名詞から段階性を持つ形容詞的な語への転換が起きるのか、より具体的な説明が必要。

3. 固有名詞 N・人称代名詞 N が段階性を持つ形容詞として上書きされる事例

3.1. as N as 構文

- (13) I thought in the moment, you know, better to be **as myself as possible**, in the hopes that I might be able to get a slightly better situation, [...] (COCA, Spoken 2019, PBS NewsHour)
(14) Michelle Obama: What I vowed is that I want to be **as me as I can be**. (CNN, 2017/1/13, Live Event/Special)

→ (13)、(14) では、as **much** me/myself as ... のように much を生起させることも可能。

3.2. as N as ever 構文 / John is as John as ever 構文.

- (15) She was as prosperous-looking as ever, as blond as ever, and **as California as ever**. (B. Paul, *Good King Sauerkraut*)
(16) a. John is late again! He never changes! **John is as John as ever**. (インフォーマント提供)
b. Nothing changed Tuesday. **Washington is as Washington as ever**.

(*The Washington Post* 電子版, 2017/6/13, Jerry Brewer 氏執筆)

→ 以降、(15)、(16a, b) も as N as 構文の範疇に含めて議論する。

3.3. as N as 構文以外の事例

[程度副詞による修飾—so/too N]

- (17) He's **so Washington**, his blood type is DC. (COCA, TV 2014, Veep)
- (18) This city disappoints me. It's **too New York**: big buildings and taxicabs.
(COCA, Fiction 2002, Literary Review)

[人称代名詞の比較級化・最上級化—more/the most N]

- (19) In fact, over the weeks, Diane seemed to become **more herself**.
(COCA, Fiction 2006, Fantasy & Science Fiction)
- (20) “I'm **more me** than I've been for ages.” (COCA, Web 2012, A Memory of Light, Chapter One:)
- (21) And I'm gay. And he's gay. And we're ... gay together. And it's **the most me** I've ever felt in my whole life.
(<<00:22:00>> *Grey's Anatomy*, Season 15, Episode 12)
- (22) He said he felt **the most himself** when he was under the sky.
(COCA, Fiction 2006, The South Carolina Review)

3.4. Nに対応する形容詞形が存在していても名詞形が生起できる事例

- (23) a. This watermelon neck pillow is about **as summer as it gets**. [headline] (松田 2019: 218)
b. This watermelon neck pillow is about **as summery as it gets**.
- (24) a. John is **as America as it gets**. (ibid.: 220)
b. John is **as American as it gets**. (ibid.: 220)

4. as N as 構文の N の分析

4.1. 立川 (2020)

- ・形容詞→普通名詞→固有名詞の順で属性の数が増大する一方、個体の数は減少する。
- ・唯一の個体であることを示す固有名詞は、形容詞をいくら重ねても汲み尽くせないほどの属性・複合性をはらむ。

(立川 2020: 215-216)(cf. 佐藤 2020: 61-62)

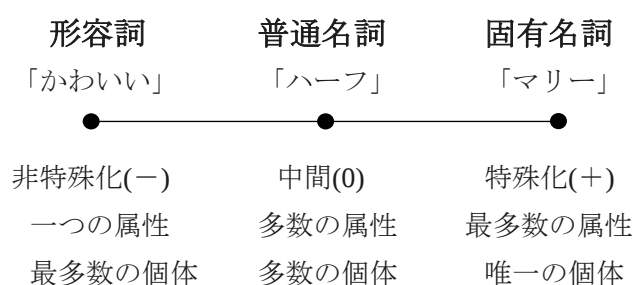


図 1. 形容詞→普通名詞→固有名詞(立川 2020: 217)

4.2. Nが持つ多数の属性・性質

- ・固有名詞 N・人称代名詞 N は、形容詞 1 語では表現できないほどの多数の性質・属性を内包する。
- ・そのため、N 単独で形容詞的なものとして見なすだけの正当な理由が存在する。

・例えば、Oxbridge という固有名詞 N にも、「権威のある、伝統のある、最高峰の…」などの様々な属性・性質が含まれる。Oxbridge が持つ多数の性質・属性に全体(または一部)に焦点が当たれば、形容詞が求められる位置にも、Oxbridge が生起できる。

・もちろん、success/problem のような名詞も段階付けが可能である(Huddleston and Pullum 2002: 532)。しかし、これらの普通名詞は、対応する形容詞形 1 語のみで性質・属性を記述することが可能であるため、固有名詞 N・人称代名詞 N ほどの多数の性質・属性を備えているとは言えない。よって、success/problem は、名詞から形容詞への転換が起こらない。very {*success/*problem}

・性質や属性を元々備えていないと思われる名詞、例えば、抽象度が著しく高い普通名詞や物質名詞、その語だけでは意味をなさない名詞は、as N as 構文の N に生起できない(cf. 松田 2019: 221)。

(25) This is **as** {*world/*weather/*season/*something/*temperature/*time/*version/*cm} **as it gets**.

5. 結語

今後の課題

- (I) 図 1 における普通名詞が持つ属性の再考と、より精微な分類が課題。例えば、*a very fun person* (Huddleston and Pullum 2002: 1643) の fun のような段階的な形容詞に転換したと思われる語の位置付け。
- (II) 固有名詞 N・人称代名詞 N が形容詞化しているかどうかのテストが必要。ただし、そもそも強制(coercion)という現象下において、対象語に対する適切なテストが存在するかどうかは、検討の余地がある。

引用文献

Audring, Jenny and Greert Booij. 2016. *Cooperation and Coercion*. Linguistics 54, 617-637 || Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. || Jackendoff, R. 1997. *The Architecture of the Language Faculty*. Cambridge: MIT Press. || 松田佑治. 2019. 「(語法ノート) N の典型例や象徴を示す as N as it gets / as N as they come 構文—as ... as 構文の ... の位置に名詞が生起しうる例—」英語語法文法研究, 第 26 号, 216-222. || Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: MIT Press. || Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. || 佐藤らな. 2020. 「名詞が程度性を持つとき: N すぎる構文を通して」第 160 回日本言語学大会予稿集. || 住吉誠・鈴木亨・西村義樹. 2019. 「慣用表現・変則的表現はどう考察されてきたか」『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』(住吉誠・鈴木亨・西村義樹(編)) 東京: 開拓社. || 立川健二. 2020. 『言語の復権のために ソシユール、イエラムスレウ、ザメンホフ』東京: 論創社. || Taylor, John R. 1998. “Syntactic Constructions as Prototype Categories.” *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*. Ed. M. Tomasello. Hillsdale NJ: Laurence Erlbaum, 177-202. || Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press. || 八木孝夫. 1987. 『程度表現と比較構造』(新英文法選書 第 7 巻) 東京: 大修館書店.

コーパス

Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>) [COCA と略記]

英語の 2 項名詞句における極度性の役割とその理論的示唆
(The Role of Extremeness in English Binominal NPs and Its Theoretical Implications)

本多正敏 (Masatoshi HONDA)
横浜商科大学 (Yokohama College of Commerce)

1. はじめに

- ・ 英語の比喩解釈を伴う 2 項名詞句 (Binominal NPs) (e.g., Austin (1980), Ike-uchi (1997, 1998, 1999), Aarts (1998), Bennis et al. (1997), Asaka (2002), Den Dikken (1998, 2006))
- (1) a. 2 項名詞句の基本形式 : N_1 of a(n) N_2
b. a jewel *(of a) village [= a village like a jewel]
c. a bummer of a summer, a skyscraper of a man, a jewel of a village, an idiot of a man, etc.
- ・ 先行研究で指摘されている比喩解釈を伴う 2 項名詞句の基本特性
- (2) a. N_2 と N_1 の間には比喩解釈関係がある (Austin (1980), Den Dikken (2006)).
b. N_1 は形容詞的な性質を示す (Ike-uchi (1997), Asaka (2002)).
(e.g., an angel of a girl $\Rightarrow$ an angelic girl / a jewel of a village $\Rightarrow$ a jewel-like village)
c. N_1 は一定の程度性を担う (Bolinger (1972)).
(e.g., *a lawyer of a man vs. a shyster of a man)
d. N_1 は一定の評価 (evaluative) を表す (Aarts (1998)).
- 問い 2 項名詞句の N_1 の文法範疇・程度性・評価は、それぞれどのような性質か？
- ・ 本発表の主張
- (3) 2 項名詞句は、 N_2 位置に生起する名詞を N_1 位置に生起する極度性を伴う名詞になぞらえる比喩解釈を担う。
- 極度性を踏まえ、Den Dikken (2006) を修正・発展させた統語メカニズムを提案する。

2. 先行研究

2.1. N_2 と N_1 の間の比喩解釈関係

- ・ N_2 と N_1 の間の比喩解釈関係 (Austin (1980), Den Dikken (2006))
- (4) a. a village like a jewel
b. a jewel of a village
cf. a jewel village [= a village with lots of jewels / a village where jewels are made]
- (5) # That idiot of a man is not an idiot. (Den Dikken (2006: 170))
- ・ 述部前置分析の概略 (Den Dikken (2006)) ※ 議論と紙面の都合上、構造と派生の一部を簡略化
- (6) [_{XP(=SC)} [_{Subj} a village] [_{X'} X (= like) [_{Pred} SIMILAR a jewel]]] (= (4a))
- (7) a. [_{XP(=SC)} [_{Subj} a village] [_{X'} X [_{Pred} SIMILAR a jewel]]] (= (4b))
b. [_{YP} [_{Pred} SIMILAR a jewel]_j [_{Y'} Y(= of) + X_i [_{XP(=SC)} [_{Subj} a village] [_{X'} t_i t_j]]]] (= (4b))

→ 直喩表現に相当する基底構造 (7a) から、述部前置操作により 2 項名詞句 (7b) を派生する。

- ・ 述部前置分析の要点

- (8) a. 2 項名詞句の派生において、述部前置によって比喩解釈を担う抽象的形態素 SIMILAR が認可され、当該名詞句は比喩解釈を許す。
b. 2 項名詞句が担う一定の評価は、比喩解釈関係に由来するものとして分析される

2.2. N₁ の形容詞性

- ・ N₁ の修飾可能性と形容詞性 (Ike-uchi (1997), Asaka (2002))

- (9) a. Mary is the most angel of a girl that I have ever met. (Ike-uchi (1997: 534))
b. ?? Mary is a more angel of a girl than Jane. (Ike-uchi (1997: 534))
c. ?? She is a very angel of a girl. (Ike-uchi (1997: 535))
- (10) a. * Mary is the most angel that I have ever met. (Ike-uchi (1997: 534))
b. * Mary is a more angel than Jane. (Ike-uchi (1997: 534))
c. * She is a very angel. (Ike-uchi (1997: 535))

→ 2 項名詞句の場合、N₁ は形容詞と類似した修飾パターンを許す。

2.3. N₁ の程度性

- ・ 程度性の制約 (cf. Bolinger (1972: 75-76, fn.14)) ※ 発表者のインフォーマント3名によるデータ

- (11) a. * a lawyer of a man [cf. a man like a lawyer] (「弁護士」)
b. ^{OK} a shyster of a man [cf. a man like a shyster] (「悪徳弁護士／ペテン師」)
- (12) a. * a lad of a man [cf. a man like a lad] (「若者」)
b. ^{OK} a brat of a man [cf. a man like a brat] (「悪ガキ」)

→ N₁ 位置に生起する名詞には、ある一定の程度性が関与する。

2.4. 経験的問題点

- (13) a. 2 項名詞句の N₁ には、一定の程度性を示す名詞句が生起しなければならないので ((11), (12)), 当該名詞句が単純な比喩解釈関係を表すとは言い難い。
b. 形容詞性を示すとされるデータ (9b-c) の容認性がかなり低く、また発表者のインフォーマント3名の間では (9a) の容認性もあまり高くない。
c. 2 項名詞句の N₁ 位置に関わる程度性の性質が具体的に明らかにされていない。

3. 提案：極度性比喩解釈と述部前置

3.1. 英語の 2 項名詞句と極度性の接点

- ・ Den Dikken (2006: 174) の指摘：「(14a) の 2 項名詞句は、(14b) と同様の解釈を持つ。」

- (14) a. that schoolmaster of a man (Den Dikken (2006: 174))
b. He is a real schoolmaster. (Den Dikken (2006: 174), 下線部は筆者による)

→ 発表者のインフォーマント3名によれば、“schoolmaster 「校長」” は「権威者」としての側面を合わせ持ち、(14a) のように“real” を付け足すと、いわば “absolute schoolmaster 「絶対的な権威性を持つ校長」” に相当するような強調的意味合いが生じる。

3.2. 提案：極度性に基づく述部前置分析の修正

- ・ 極度性 (Morzycki (2012b)) と極度性修飾

- (15) a. Your shoes are downright gigantic!!! (Morzycki (2012b: 568))
b. ?? Your shoes are downright big!!! (Morzycki (2012b: 568))
(e.g., downright, absolutely, flat-out, full-on, straight-up etc.)

→ **極度性** 概略, ある言語表現が指示する値が文脈から想起される値を超えていることを示す。

- ・ 名詞句における極度性修飾

- (16) Clyde is a(n) { absolute / downright } idiot/fool. (Morzycki (2012b: 606), 修正有)

- ・ 極度性に基づく Den Dikken (2006) の述部前置分析の修正 (cf. (7a, b))

- (17) a. 極度性の概念を表す文法要素は, 極度性素性 [+Ex(treme)] を持つ。
b. 2 項名詞句は, 抽象的形態素 SIMILAR と極度性素性 [+Ex] を持つ名詞を含む小節述部 (すなわち, N₁) を述部前置することにより派生する。
c. $[_{YP} [_{Pred} \text{SIMILAR } a(n) N_{1[+Ex]}]_j [_{Y'} Y(= of) + X_i [_{XP(SC)} [_{Subj} N_2] [_{X'} t_i t_j]]]]$

→ 2 項名詞句は, 抽象的形態素 SIMILAR と極度性を担う名詞を含む小節述部の前置操作によって, 極度性を伴う比喻解釈を保障する。

3.3. 証拠の提示

- 予測①: 適格例 ((11b), (12b)) の N₁ は極度性修飾を許すのに対し, 不適格な例 ((11a), (12a)) の N₁ は極度性修飾を許さない。

- (18) a. * a lawyer of a man ⇒ * an absolute lawyer (= (11a))
b. a shyster of a man ⇒ ^{OK} an absolute shyster (= (11b))
(19) a. * a lad of a man ⇒ * an absolute lad (= (12a))
b. a brat of a man ⇒ ^{OK} an absolute brat (= (12b))

→ 発表者のインフォーマント 3 名によると予測①は正しい。

- 予測②: N₁ 位置に異なるタイプの程度修飾表現を許す名詞が生起する場合, 当該位置に生起する程度修飾表現は極度を示すものに限られる。

- (20) a. That man is (like) a(n) { slight / big / absolute } idiot.
b. a man like a(n) { slight / big / absolute } idiot

→ 名詞 *idiot* は, 極度を表す *absolute*, 大程度を表す *big*, 低程度を表す *slight* による修飾を許すため, 一種の段階性を許す程度名詞 (e.g., *idiot*, *disaster*) といえる (cf. Morzycki (2012a)).

- (21) a. a(n){ * slight / ^{?(?)} big / absolute }idiot of a man
b. a/the { ?? bigger / [?] biggest } idiot of a man
cf. Clyde is a bigger idiot than Floyd. (Morzycki (2012a: 189))

→ 発表者のインフォーマント 3 名によると予測②は正しい (また, “the biggest idiot of a man” の容認性は, (9a) よりも高いことを指摘している。)

- ・ 比喩解釈と極度性 ※ (22b) は西田光一氏の指摘による。
- (22) a. a(n) { * slight / * big / absolute } angel ⇒ an angel of a girl
 b. a(n) { * slight / * big / absolute } Rolles-Royce ⇒ a Rolles-Royce/Ferrari of a player

→ 比喩的に極度性を表す名詞 (e.g., angel, flower, jewel, Rolles-Royce, Ferrari) は、2 項名詞句の N₁ 位置に自然に生起できる。

- ・ N₁ の極度性と打ち消し

(23) # John is an idiot of a man, although not extremely idiotic.

4. 結論と示唆

- (24) a. 英語の 2 項名詞句の N₁ の文法範疇・程度性・評価は、それぞれどのような性質か？
 ⇒ N₂ に生起する名詞を N₁ に生起する極度性を担う名詞になぞらえることで、極度性を伴う比喩解釈が生じる。
- b. 英語の 2 項名詞句の位置付け
 ⇒ ドイツ語の極度性を表す V2 現象 (Trotzke and Quaglia (2016), Trotzke (2017), Beltrama and Trotzke (2019)) とともに、(単なる比喩解釈ではなく,) 極度性が文法的手段 (語順交替) によって言語化されている現象の一つとして位置付けることができる (cf. Honda (2018)).

* 本研究は、JSPS 科研費・基金・若手研究 (研究課題番号：20K13065) の助成を受けている。

発表者連絡先：honda.masatoshi.84@gmail.com

主要参考文献

- Aarts, Bas (1998) "Binominal Noun Phrases in English," *Transactions of the Philological Society* 96, 117-158.
- Asaka, Toshihiko (2002) "A Lexical Licensing Analysis of the Adjectival Noun Construction," *English Linguistics* 19, 113-141.
- Austin, Frances O. (1980) "A Crescent-Shaped Jewel of an Island," *English Studies* 61, 357-366.
- Beltrama, Andrea and Trotzke, Andreas (2019) "Conveying Emphasis for Intensity: Lexical and Syntactic Strategies," *Language and Linguistic Compass* 13, 1-13.
- Bennis, Hans, Norbert Corver and Marcel den Dikken (1997) "Predication in Nominal Phrases," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 1, 85-117.
- Bolinger, Dwight (1972) *Degree Words*, Mouton, The Hague.
- Dikken, Marcel den (1998) "Predicate Inversion in DP," *Possessors, Predicates and Movement in the Determiner Phrase*, ed. by Artemis Alexiadou and Chris Wilder, 177-214, John Benjamins, Amsterdam.
- Dikken, Marcel den (2006). *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, MIT Press, Cambridge.
- Honda, Masatoshi (2018) *A Cartographic Approach to Focus-Related Linguistic Phenomena*. Doctoral dissertation, University of Tsukuba.
- Ike-uchi, Masayuki (1997) "An Analysis of an Angel of a Girl Type NPs (I)," *Bulletin of Joetsu University of Education* 16, 529-542.
- Morzycki, Marcin (2012a) "The Several Faces of Adnominal Degree Modification," *WCCFL* 29, 187-195.
- Morzycki, Marcin (2012b) "Adjectival Extremeness: Degree Modification and Contextually Restricted Scales," *Natural Language and Linguistic Theory* 30, 567-609.
- Trotzke, Andreas (2017) *The Grammar of Emphasis: From Information Structure to the Expressive Dimension*, Boston/Berlin, Walter de Gruyter.
- Trotzke, Andreas and Stefano Quaglia (2016) "Particle Topicalization and German Clause Structure," *Journal of Comparative German Linguistics* 19, 109-141.

前澤大樹 (Hiroki Maezawa)
藤田医科大学 (Fujita Health University)

(1) a. 太郎が 花子{を/に/が} 進学するよう(に) 説得した。
b. 太郎が 花子{を/*に/*が} 説得した。

(2) 説得する、説き伏せる、諭す、拝み倒す、促す、さそう、励ます、激励する、勧誘する、脅す、脅迫する、叱り付ける、なだめる、たしなめる、…

(3) a. 太郎が 花子{を/に/*が} 粘り強く 進学するよう 説得した。
b. 太郎が 来年 花子{*を/に/が} 進学するよう 説得した。

(4) 太郎が 進学するよう 花子{を/に/*が} 説得した。

(5) a. 太郎が 花子だけを 進学するよう 説得した。 (だけ>説得/*説得>だけ)
b. 太郎が 花子だけに 進学するよう 説得した。 (だけ>説得/説得>だけ)
c. 太郎が 花子だけが 進学するよう 説得した。 (*だけ>説得/説得>だけ)

(6) a. 太郎が 花子をさえ 進学するよう 説得した。 (さえ>説得/*説得>さえ)
b. 太郎が 花子にさえ 進学するよう 説得した。 (さえ>説得/説得>さえ)
c. 太郎が 花子さえが 進学するよう 説得した。 (*さえ>説得/説得>さえ)

(7) 太郎が 一人も 教え子{*を/が} 進学しないよう 説得した。

(8) 太郎が 教え子{を/*が} 一人も 進学するよう 説得しなかった。

(9) a. 太郎が 一人も 教え子に 進学しないよう 説得した。
b. 太郎が 教え子に 一人も 進学するよう 説得しなかった。

(10) a. 太郎が 誰にも 進学しないよう 説得した。
b. 太郎が 誰にも 進学するよう 説得しなかった。

(11) 太郎が 説得したのは、花子{*を/に/が} 進学するように だ。

(12) *太郎が {花子を 息子に/息子を 花子に/花子に 息子を/息子に 花子を} (粘り強く) 進学するよう 説得した。

(13) 太郎が 来年 次郎に 息子が 留学するよう 説得した。

(14) 太郎が 花子_iに 自分_iの息子が 進学するよう 説得した。
 (15) a. *太郎が 花子_iに [自分_iの息子が 彼女_iを 尊敬するよう] 説得した。
 b. 太郎が [花子_iに 自分_iの息子が 彼女_iを 尊敬するよう] 説得した。

(16) 太郎は {先生/*花子のやつ}に おいでになるよう 説得した。

(17) a. *大統領_iが 閣下_iを 嫌っておられる。
b. 大統領_iが [国務長官が 閣下_iを 嫌っていると] ご存じだ。

(18) a. *太郎が 大統領_iに [顧問の野郎が 閣下_iを ご批判になるよう] 説得した。
b. ?太郎が [大統領に 顧問の野郎が 議長を ご批判になるよう] 説得した。

(19) 太郎が 花子が 息子が 進学するよう 説得した。

(20) a. 太郎が 来年 花子が 教え子が 息子が 進学するよう 説得した。
b. 太郎が 来年 花子に 教え子が 息子が 進学するよう 説得した。
c. (?)太郎が 来年 花子に 教え子に 息子が 進学するよう 説得した。
d. ?太郎が 来年 花子に 教え子に 息子に 進学するよう 説得した。

(21) a. *太郎が 来年 花子が 教え子に 息子が 進学するよう 説得した。
b. *太郎が 来年 花子が 教え子に 息子に 進学するよう 説得した。

(22) ... (~に) [Subj Subj ... Subj ... V] 説得
 $\xrightarrow{\text{ニ}} \quad \quad \quad | \quad \leftarrow \text{ガ} \quad$

(23) a. *太郎が 先生に 単位が お出になるよう 説得した。
b. *太郎が 総理に 所得税が お下がりになるよう 説得した。

(24) a. *先生が 単位が 出了。 b. *総理が 所得税が 下がった。

- (25) a. 太郎が [先生に 単位が お出になるよう] 説得した。
 b. 太郎が 先生に [単位が お出になるよう] 説得した。
- (26) a. *司令官_iが [x_i(?) 戦闘機]が 早く 到着した。
 b. ??社長_iが [x_i(?) 開発予算]が 増えた。
 c. ?総理_iが [x_i(?) 官房長官(の野郎)]が 辞めた。
- (27) a. 太郎が 司令官に [戦闘機が 早く 到着するよう] 説得した。
 b. 太郎が 社長に [開発予算が 増えるよう] 説得した。
 c. 太郎が 総理に [官房長官(の野郎)が 辞めるよう] 説得した。
- (28) a. *太郎が [司令官に 戦闘機が 早く ご到着になるよう] 説得した。
 b. ??太郎が [社長に 開発予算が お増えになるよう] 説得した。
 c. ?太郎が [総理に 官房長官(の野郎)が お辞めになるよう] 説得した。

4. ヨウ節の構造的位置

- (29) a. 太郎が 花子{を/に} 本を 読むよう 説得した。
 b. 本を_i 太郎が 花子{*を/に} _t 読むよう 説得した。
 c. 何を_i 太郎は 花子{*を/に} _t 読むよう 説得したのですか。
 d. [Op_i 太郎が 花子{*を/に} _t 読むよう 説得した] 本
- (30) a. 太郎が 花子{を/に} ステージで 踊るよう 説得した。
 b. ステージで_i 太郎が 花子{*を/に} _t 踊るよう 説得した。
 c. どこで_i 太郎は 花子{*を/に} _t 踊るよう 説得したのですか。
 d. [Op_i 太郎が 花子{*を/に} _t 踊るよう 説得した] 場所
- (31) a. [みずきが無事帰るよう]_i 光男は [朱莉が _t 一千万円用意したかどうか] 尋ねた。
 b. [みずきが無事帰るよう]_i 光男は [朱莉が _t 祈ったかどうか] 尋ねた。
- (32) [進学するよう]_i 朋子は [五郎が 理子{(?)/に} _t 説得したかどうか] 尋ねた。
- (33) a. 太郎が 彼女がよい仕事につけるよう 花子{*を/に} 進学するよう 説得した。
 b. 太郎が (天邪鬼の)彼女が進学しないよう 花子{*を/に} 進学するよう 説得した。

5. ヨウ節の大きさ

- (34) 太郎が 花子{を/に/が} {急いで/来年/抜け目なく/賢明にも/*驚いたことに} 留学するよう 説得した。
- (35) A: 花子のベントツ、どうしたの?
 ??B: 太郎が花子{を/に} [ベントツは 息子さんが乗るよう] 説得したって。
 cf. B: ベントツは、太郎が花子{を/に} [息子さんが乗るよう] 説得したって。
- (36) A: ベントツもフォルクスワーゲンも息子さんが乗るって?
 B: (確かに、)太郎が花子{を/に} [ベントツは _{CT} 息子さんが乗るよう] 説得したらしいけど。
- (37) A: 太郎は、何をかうよう説得したの?
 B: 太郎は花子{を/に} [羽毛布団を _F 息子がかうよう] 説得したんだよ。
- (38) [_{FocP} 羽毛布団を _F [_{FinP} ベントツは _{CT} [_{TP} 息子が _{Subj} [_{VP} ...] _T] _{Fin}] _{Foc}]

6. まとめ

- (39) a. フ格被動者は主節要素である。
 b. ニ格被動者のうち最初のものは主節要素・ヨウ節主語の間で曖昧である。
 c. ニ格被動者のうち2つ目以降のものはヨウ節主語である。
 d. ガ格句はヨウ節の主語である。
 e. フ格被動者が伴うヨウ節は付加詞、ニ格被動者が(必須要素として)伴うヨウ節は補部である。
 f. ヨウ節は FocP である。

7. 分析

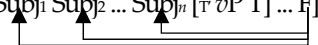
- (40) a. 「説得する」類の動詞はどのような項構造を持つのか。
 b. 「説得する」類の動詞による格付与はどのように行われるのか。
- (41) a. 太郎が 子供たちに 自制を 教えた。 b. 太郎が 子供たちに [Compl 自制するよう] 教えた。
 c. 太郎が 子供たちを (*[Adjunct? 自制するよう]) 教えた。
- (42) a. ?太郎が 花子に 進学を 説得した。 b. 太郎が 花子に [Compl 進学するよう] 説得した。
 c. 太郎が 花子を ([Adjunct 進学するよう]) 説得した。

7.1. 項構造

- (43) a. 太郎が 花子が 進学するよう 説得した。 (但し「被動者=花子」)
 b. pro_i [[Compl 花子が_i 進学するよう] _v説得] → 条件C違反

- (44) LCS: [x ACT] CAUSE [y BECOME [y BE PERSUADED-INTO z]]
 (45) a. AS: $\lambda Agent, \langle \lambda Patient, \lambda Theme \rangle$
 b. 太郎が_{Agent} {花子に/pro} {[(次郎に/か)/e] 進学するよう} / [(次郎の/e)進学]を } 説得した。
 (46) a. AS: $\lambda Agent, \langle \lambda Theme \rangle$
 b. 太郎が_{Agent} {[(花子に/か)/e] 進学するよう} / [(花子の/e)進学]を } 説得した。
 (47) a. AS: $\lambda Agent, \langle \lambda Patient \rangle$
 b. 太郎が_{Agent} 花子を 説得した。
 (48) a. [_{vP} <Agent> [_{v'} [_{vP} <Patient> [_{v'} {DP/FocP}<Theme> √説得]] v]]
 b. [_{vP} <Agent> [_{v'} [_{vP} {DP/FocP}<Theme> √説得] v]]
 c. [_{vP} <Agent> [_{v'} [_{vP} <Patient> √説得] v]]

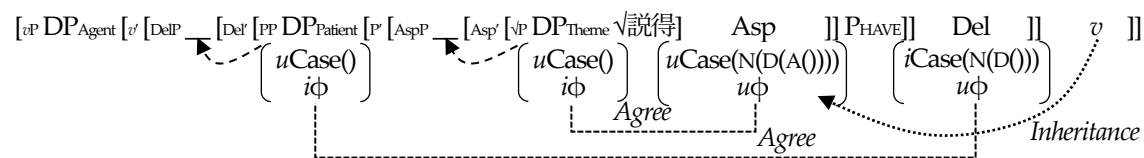
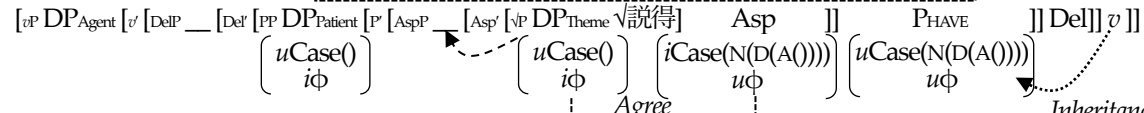
7.2. 格

- (49) ... [F ... [Subj₁ Subj₂ ... Subj_n [T vP T] ... F] ...

 (50) A: ベンツもフォルクスワーゲンも息子さんが乗るって?
 a. B: (確かに、)太郎が_{Agent} 花子に [息子さん{*/が/?に} ベンツは_{CT} 乗るよう] 説得したらしいけど。
 b. B: (確かに、)太郎が_{Agent} 花子に [ベンツは_{CT} 息子さん{が/?に} 乗るよう] 説得したらしいけど。
 cf. B: ベンツは_{CT} (確かに、)太郎が_{Agent} 花子に [息子さん{が/?に} 乗るよう] 説得したらしいけど。
 (51) a. ... [FinP 息子さんに [ベンツは_{CT} [TP 息子さんが_{TP} [vP ...] T] Fin]] ...
 b. ... [FinP ベンツは_{CT} [息子さんに [TP 息子さんが_{TP} [vP ...] T] Fin]] ...
 (52) [[FocP (Focus) [Foc [FinP Subj Subj ... [Fin' [TP Subj Subj ... [T vP T]]] [Fin iCase]]] Foc]] 説得 s-]


7.2.1. 格の上書き

- (53) Values of features are features.
 (54) 格素性の値と形態的具現
 a. 主格=ガ格: Case(N()) b. 与格=ニ格: Case(N(D())) c. 対格=ヲ格: Case(N(D(A())))
 (55) [... [TP [DP uCase(N(D()))] [vP ...] [T iCase(N())]] ... [Fin iCase(N(D()))]]


7.2.2. ヲ/ニ交替と構造格・内在格

- (56) a. 太郎が_{Agent} 花子_{Patient}を 説得した。
 b. 太郎が_{Agent} {?進学を/進学するよう}_{Theme} 説得した。
 c. 太郎が_{Agent} 花子_{Patient}に {?進学を/進学するよう}_{Theme} 説得した。
 (57) a. 花子が_{Patient} 説得された。
 b. ?(花子の)進学が_{Theme} 説得された。
 c. ?進学が_{Theme} 花子_{Patient}に 説得された。
 d. 花子が_{Patient} {?進学を/進学するよう}_{Theme} 説得された。
 (58) a. ??太郎が_{Agent} 花子に 入会を 誘った。
 b. 花子が_{Patient} 入会を 誘われた。
 (59) a. *太郎が_{Agent} 花子に 遅刻を 叱った。
 b. 花子が_{Patient} 遅刻を 叱られた。
 (60) a. ??太郎が_{Agent} 花子に 無礼を たしなめられた。
 b. 花子が_{Patient} 無礼を たしなめられた。
 (61) a. <Patient>ヲ (<Theme>ヲ) 説得
 b. 太郎が_{Agent} 花子_{Patient}を (*進学を) 説得した。
 c. 太郎が_{Agent} 花子_{Patient}を (*進学するよう_{Compl}) 説得した。
 d. 花子が_{Patient} (進学を/進学するよう) 説得された。
 (62) a. (<Patient>ニ) <Theme>ヲ 説得
 b. ?太郎が_{Agent} (花子に) 進学を 説得した。
 c. 太郎が_{Agent} (花子に) [(次郎が/に) 進学するよう] 説得した。
 d. ?進学が_{Theme} (花子に) 説得された。
 (63) [_{vP} DP_{Agent} [_{v'} [DelP ____ [Del' [PP DP_{Patient} [P' [AspP ____ [Asp' [_{vP} DP_{Theme} √説得] Asp] PHAVE]] Del]]] v]]

 (64) [_{vP} DP_{Agent} [_{v'} [DelP ____ [Del' [PP DP_{Patient} [P' [AspP ____ [Asp' [_{vP} DP_{Theme} √説得] Asp] PHAVE]] Del]]] v]]

 (65) **Terminal fusion:** An SO that consists of a pair of terminals {X, Y} can be fused into a single terminal [X, Y] if X and Y are not incompatible in terms of feature composition. (Maezawa (2020: 9))
 (66) If terminals α and β are sisters and α is an affix, the affixal property of α is satisfied by
 a. fusing α and β into a single terminal (terminal fusion), or
 b. raising β to α (head movement); Cost(a) < Cost(b) (ibid.)

現在完了進行形のもつ「結果説明的効果」について： 認知文法的アプローチ

(Explanatory-Resultative Effects Involved in the Present Perfect Progressive: A Cognitive Grammar Approach)

志村春香 (SHIMURA Haruka)

筑波大学大学院 (University of Tsukuba)

1. 初めに

- (1) 現在完了形と現在完了進行形は、発話時より前に起こり、発話時(現在)と関連する状況(行為・出来事・状態を含む)を表す。話し手の関心は、過去の出来事ではなく発話時の状況に置かれる。

→先行研究では、2種類の完了形に共通する特徴は「現在との関連性(current relevance)」であると主張されてきた(cf. Comrie (1976), Leech (2004))。

- (2) いくつかの先行研究では、現在完了形と現在完了進行形は、過去に起こった状況が発話時まで継続するか否かという観点から2分される(Declerck (1991), Depraetere and Reed (2000))。

(a) 継続完了(continuative perfect)... 過去に始まり、発話時まで継続する状況や習慣を表す。

(3) a. I've lived in this neighborhood since I was a kid. (Leech (2004: 36))

b. I have been working in the garden since 8 o'clock. (Declerck (1991: 100))

(b) 不定完了(indefinite perfect)... 発話時より前の期間に当該状況が起こったことを表す。

(経験・完了用法も発話時より前に起こった状況を表すため、不定完了に含まれる。)

(4) a. The taxi has arrived. (Leech (2004: 39))

b. Be careful! John has been painting the door. (荒木・安井 (1992: 1126))

- (5) しかし、現在完了進行形のみに見られる特徴もあり、中でも、不定完了の現在完了進行形は説明や言い訳などを表すことができる(Depraetere (1999), Depraetere and Reed (2000))。

(6) A: You look tired.

B: Yes, I've been working too hard lately. (Declerck (1991: 164))

→このような現象を「結果説明的効果(explanatory-resultative effects)」と呼ぶことにする。

- (7) 「結果説明的効果」は不定完了の現在完了形では表せない。

(8) a. I have been working all day.

b. I have worked the whole day. (Radden and Dirven (2007: 217))

→現在完了形は、発話時に当てはまる「出来事が完了した」状態に焦点が当たり、出来事の完了を表す結果状態を描写する。

- (9) 同じ現在完了進行形であるのに、継続用法には「結果説明的効果」は生じない。

(10) I have been shampooing this poodle for half an hour [and I'm still trying to rinse the soap out of its fur].

(Declerck (2006: 236))

- (11) 「結果説明的効果」は語彙アスペクトの観点からでは説明することができない(Depraetere(1999))。

Depraetere(1999)は、telicity の観点から不定完了の現在完了進行形を分析していたが、アスペクトだけではこの効果を分析できなかった。

(12) a. I've been painting the bathroom. That's why I look so tired. (Depraetere (1999: 234))

b. It's been snowing (Look, the ground is white.) (Leech (2004 :50))

問い 「結果説明的効果」が不定完了の現在完了進行形だけに生じ、その他の現在完了形や継続完了

の現在完了進行形に生じないのはどのようなメカニズムが働いているのか。

主張

Langacker (1991, 2001)、De Wit (2017)による認知文法的アプローチに基づいて、現在完了形と現在完了進行形の2つの用法の時間構造を反映した認知スキーマを構築し、これらの違いは、認知スキーマの違いから出てくることを主張する。

2. 基本的認知スキーマ (Langacker (1991, 2001), De Wit (2017))

(13) 概念化者（話し手と聞き手）は、出来事の始まりと終わりの境界線(boundary)を認識するか否かという観点から、出来事を2つに分けている ⇒2種類のアスペクト

(a) 有界的・非状態的な出来事... 出来事の境界線を射程内に含み、概念化者はその出来事の始まり、過程、終わりの全体を捉える。
(パーフェクティブ)

(b) 非有界的・状態的な出来事... 出来事の境界線が射程内に含まれず、概念化者は出来事の内部（インパーフェクティブ）を部分的に捉える。

(14) これらのアスペクトは2種類のスコープとプロファイルという概念によって捉えられる。

(a) 最大スコープ(maximal scope (MS))... 当該出来事に関わる範囲全体

(b) 直接スコープ(immediate scope (IS))... MSの中でも注意が向けられる(前景化している)範囲

(c) プロファイル... ISの中でより焦点が当たる(ターゲットとなる)箇所

(15) 進行形の認知スキーマ(Langacker (2001))

進行形は、出来事を内部視点(internal view)から捉える特徴があるため、有界的な出来事を非有界的な出来事として捉え直す働きがある。

→有界的な出来事の過程(内部)のみを進行形の直接スコープ(IS-ing)が捉え、IS-ing 内の状況がプロファイルされることによって、非有界的な出来事として再解釈される(Fig.1)。

(16) 現在完了形の認知スキーマ(De Wit (2017))

現在完了形は、発話時現在と先行する出来事との関わりに関心があり、過去の出来事が生起した後に続く発話時の状況（状態）に焦点を当てる特徴がある。⇒現在との関連性

→完了形の直接スコープ(IS_{have})は発話時に当てはまる状態を射程に収め、IS_{have} 内がプロファイル。IS_{have} は発話時現在の状態を捉えるため、時制を表す直接スコープ(IS_T)は IS_{have} と同じ範囲(IS_{have}=T)。

(17) 継続完了は過去から継続している状況の発話時に当てはまる部分に IS_{have} が置かれ(Fig.2)、不定完了は過去の出来事が完了した後に続く結果状態の発話時部分に IS_{have} が置かれている(Fig.3)。

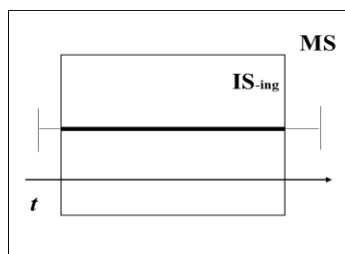


Fig.1 進行形
(cf. Langacker (2001: 259))

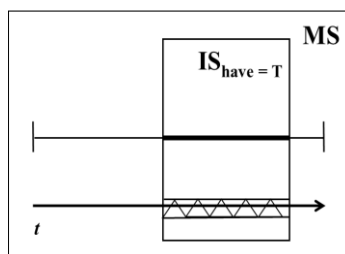


Fig.2 継続完了 (現在完了形)
(cf. De Wit (2017: 34))

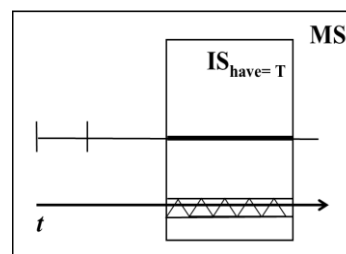


Fig.3 不定完了 (現在完了形)
(cf. De Wit (2017:33))

3. 現在完了進行形の認知スキーマ

(18) 現在完了進行形は現在完了形と進行形の特徴を併せもっており、それらの特徴は現在完了進行形の2用法の認知スキーマに反映されている。

(19) 継続完了の現在完了進行形は、過去から発話時まで継続している状況を表すが、継続完了の現在完了形では表せない非状態述語が表す状況の継続を描写できる。

(20) I have been shampooing this poodle for half an hour. (= (10))

(21) 進行形の特徴(内部視点)により、有界的な出来事が非有界的な出来事として解釈され、現在完了形の特徴(現在との関連性)により、その出来事の中でも発話時に当てはまる部分に関心が向けられる。

→IS_{ing} が出来事の過程のみを捉えている。その中でも発話時に当てはまる状況に IS_{have} が置かれ、その状況がプロファイルされている(Fig.4)。

(22) 不定完了の現在完了進行形は、発話時より前の期間に起こった過去の出来事を表す。また、現在完了形と異なり、過去の出来事により焦点が当たり、発話時に当てはまる結果状態としては、過去の出来事が引き金となって生じた「間接的な結果状態」しか表さない。

(23) Be careful! John has been painting the door. (= (4b))

(24) 現在完了形の特徴により、発話時に当てはまっている結果状態に関心を向けるだけでなく、進行形の特徴により、過去の出来事の過程により焦点が当たっている。

→IS_{have} が、過去の出来事が引き金となって生じた、発話時現在に当てはまる結果状態を捉える。IS_{ing} が過去の出来事に置かれることで、その出来事は非有界的に再解釈される。出来事の全体ではなく出来事の内部のみがプロファイルされる(Fig.5)。⇒内部視点により、より注意を引き付ける。

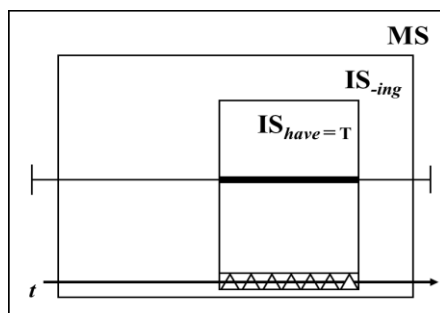


Fig.4 継続完了(現在完了進行形)

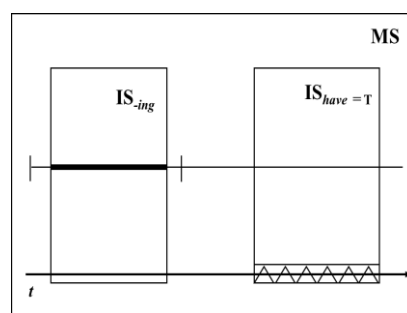


Fig.5 不定完了(現在完了進行形)

4. 結果説明的効果について

(25) 現在完了進行形の認知スキーマを想定することによって、なぜ不定完了の現在完了進行形には「結果説明的効果」が表れるのかを説明できる。

(26) I don't feel like going out this evening. I've been working in the garden all day. (Hornby (1975: 90))

(27) 不定完了の現在完了進行形は、IS_{ing} が有界的な出来事の過程(内部)のみを捉え、非有界的な出来事として再解釈させるため、IS_{ing} 内に当該出来事の境界線が含まれていない(cf. Fig.5)。

→認知スキーマ的には過去の出来事の完了は保証されないため、IS_{have} が捉えている結果状態は、当該出来事が起こったことが引き金となり生じた「間接的な結果状態」しか現れない。

(28) 過去の出来事の IS_{ing} 内の部分のみがプロファイルされる。さらに、発話時に IS_{have} が置かれることで示唆される「現在との関連性」によって、前景化された発話時の間接的な結果状態の原因として、その過去の出来事を捉えようとするような推論が働く。

→(前景化された) 発話時の結果状態との関連で、その状態を誘発する原因として(焦点が当てられている)過去の出来事が生じたと聞き手が推論することで生じる一種の説明的効果が、「結果説明的効果」。

(29) 不定完了の現在完了形の場合、過去の出来事が完了した結果生じる「直接的」な状態の中で、発話時に当てはまる部分にのみ IS_{have} が置かれ、その部分がプロファイルされている(Fig.3)。

→過去の出来事は背景化しているので、現在完了進行形のような推論が生じる条件が揃わない。

(30) 継続完了の現在完了進行形の場合、 IS_{ing} の中に、発話時の状態を捉えている IS_{have} が存在し、その発話時に当たる部分のみがプロファイルされている(Fig.4)。

→不定完了のように過去の出来事に焦点が当たっておらず、 IS_{ing} と IS_{have} の間も「断絶」がないため、過去に「原因」を求める「推論」が生じない。

(31) Declerck (2006)が3つ目の用法として提案する Up-to-now 完了

(i) 発話時直前で終わる過去の期間の中で当該事象がどのくらいの回数起こっているのか、(ii) 出来事が起きてからどのくらいの期間が経過したのか、(iii) もしくは、発話時直前までの期間の中に展開する出来事に言及して、発話時の状態を説明する。

(32) Your little boy has been jumping and shouting for the whole morning. (Chen (1982:183))

→Up-to-now 完了の現在完了進行形も結果説明的効果を伴うことがある(特に、タイプ(iii))。

(33) Up-to-now 完了が結果説明的効果を伴う場合は、過去に繰り返し起こった出来事全体をひとつの出来事としてゲシュタルト的に捉え、ひとまとまりとなった状況が発話時直前で完了している。そして、 IS_{ing} がその状況を捉え、内部視点により状況の内部のみがプロファイルされる。また、 IS_{have} は発話時現在の状態に置かれるが、出来事自体は発話時まで継続していないため、過去の出来事の生起により生じた結果状態を捉えている(Fig.6)。

→不定完了の現在完了進行形と同様に、前景化された発話時に当てはまる結果状態をもとに、その原因となる過去の出来事を推論する認知スキーマであるため、「結果説明的効果」が生じる。

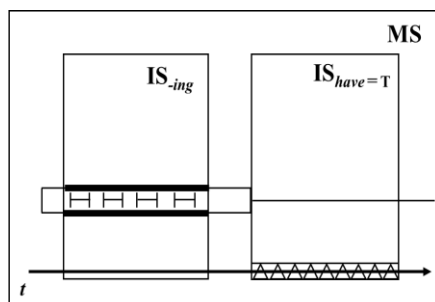


Fig. 6 Up-to-now 完了(現在完了進行形)

【主要参考文献】

Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo. / Declerck, R. (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase Volume1*, Mouton de Gruyter, Berlin. / Depraetere, I. (1999) "Resultativeness and the Indefinite Progressive Perfect" *Thinking English Grammar: To Honour Xavier Dekeyser, Professor Emeritus*. Leuven, Peeters, 227-238. / Depraetere, I. and S. Reed (2000) "The Present Perfect Progressive: Constraints on its Use with Numerical Object NPs," *English Language and Linguistics* 4, 97-114. / De Wit, A. (2017) *The Present Perfective Paradox across Languages*, Oxford University Press, Oxford. / Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume 2, Stanford University Press, Stanford. / Langacker, R. W. (2001) "The English Present Tense," *English Language and Linguistics* 5, 251-273. / Leech, G. (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd edition, Longman, London. / Radden, G. and R. Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.

1. はじめに

・日本語の「動詞の連用形+すぎる」という形式で、何らかの過剰性を表す構文（以下、V すぎる構文）には、形式と意味の間にいわゆる「ミスマッチ」があると考えられてきた。

- (1) a. 美しすぎる (too beautiful) b. 静かすぎる (too quiet)
 (2) a. 働きすぎる (work too long) b. 早く食べすぎる (eat too early)

・(1) にみるように、形容詞・形容動詞の場合、過剰の意味は「-すぎる」が後接する語との関係だけで解釈可能である。一方で、(2a) は働く時間などが過剰だと解釈され、(2b) は副詞の「早く」が過剰だと解釈され、「-すぎる」が形態的に結合しているのは前項の動詞 (V 1) だが、意味的には副詞に結びついているとされてきた。

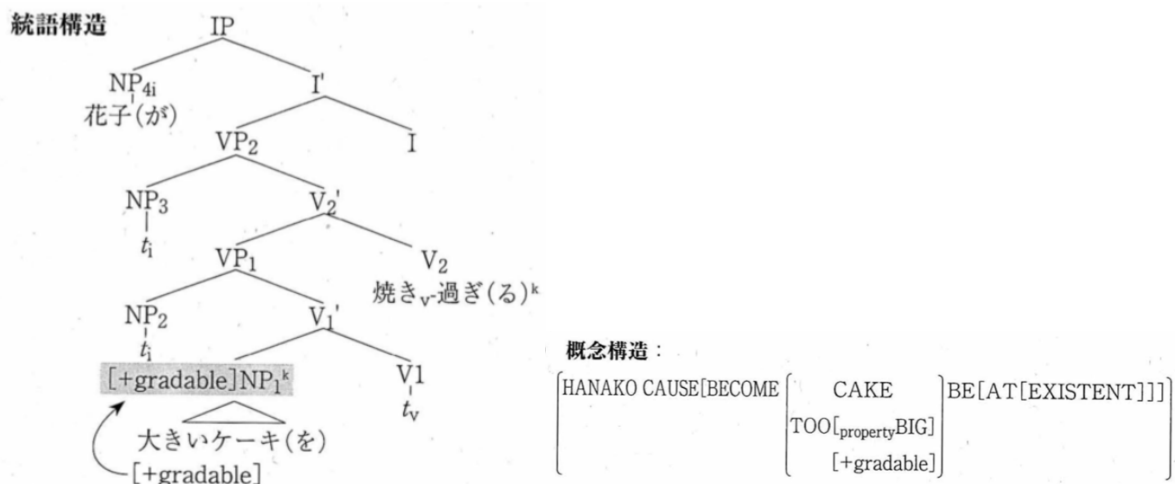
・先行研究では基本的に、「過剰」の意義素 (TOO) が V 1 の概念構造内に存在する段階性のある要素を意味作用のターゲットとして選択すると考えられている (Nakamura 2003, 由本 2005, Kikuchi 2013, 東寺 2018 他)。

・本発表は「形態的には V 1 と結合しているが、概念構造ではそうではないというミスマッチ (由本 2005: 265)」が生じない分析を認知文法の観点から提示する。

2. 先行研究

・影山 (1993)、由本 (1997) などは、補文構造をとる統語的複合動詞として分析している。
 ・「「過ぎる」は統語構造内において統率する要素の中から[+gradable]素性を探し、それをターゲットとして選択する。」(由本 2005: 264 (75))

- (3) 花子が大きいケーキを焼き過ぎた。(由本 2005: 265)



・問題点❶: 次の (4) (5) は、由本の分析に従うとどちらも段階性のある要素「難しい」が TOO のターゲットになると解釈され、概念構造は同一であると予測される。しかしこれでは (4) で「わざと」を

用いることができないことを説明できない。

(4) 教授は(*わざと) 難しい問題を出しすぎた (Nakamura 2003: 489)

(5) 教授は(わざと) 難しすぎる問題を出した (Nakamura 2003: 489)

・問題点②: 過剰となる要素が曖昧で一つに決めることができない例や、何が段階性のある素性なのかがよくわからない例を説明することができない。

(6) a. 早くたくさん食べすぎた。b. 彼は荷物を運びすぎて、腰痛になった。

(7) 彼女を愛しすぎてしまったことが破滅の原因であった。

3. 認知文法による記述: 問題①への回答

・認知文法では、典型的に、2つの component structures が組み合わされて composite structure が成立する場合、一方の構造に他方の構造によって精緻化される(詳細が特徴づけられる) schematic な部分があると考えられている。そのような部分のことを elaboration site (以下 e-サイト) と呼ぶ (Langacker 2008: 198)。

・「-すぎる」の構文の意味を下の図1のように表示する。網掛けは e-サイト、t→は時間の推移を表す。四角の中の太い矢印は行為・状態に含まれる何らかの側面が過剰となっていることを表している。(「何らかの側面」の特定には動詞と結びついたフレームを参照する必要があることは4.3で述べる。)

・「-すぎる」は意味の抽象度が高く、基準点(図1のX)、スケール(四角の中の横線)ともに他の構成要素によって精緻化される必要がある。由本(1997: 102f.)が指摘する「-すぎる」の造語力の高さ、意味の透明性の高さはこの事実の反映だろう。

・この性質は強調などで用いられる英語の do に類似している (e.g. I DO have that!)

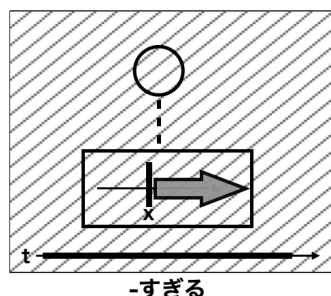


図1 「-すぎる」の意味

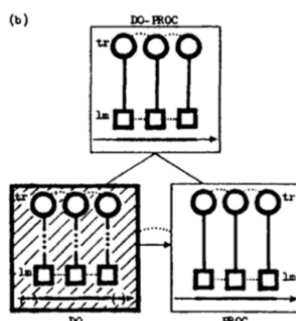


図2 DOの意味表示 (Langacker 1990: 137)

・このDOは意味内容のほとんどが e-サイトとなっている(図2左下網掛け)。

・DOの e-サイトは本動詞(e.g. I DO love youであれば LOVE)の意味によって精緻化されるため、DO自体は複合的な表現の意味に独自の貢献はしないが、高度に抽象的な意味を持っていると考えられる。

・「-すぎる」は、実質的には「過剰」の意味を前項動詞の意味に付加するのみであるが、「過剰」に加えて、前項動詞によって精緻化される schematic な意味を表すと考えるべき理由がある。

・(4)で「わざと」を使うと不自然なのは、前項動詞と「-すぎる」の合成によって生じる意味が「わざと」の意味と衝突するからである。(4)・(5)は、真理条件的に等価な場合であっても、compositional path (以下 CP)において異なっている。認知文法ではCPも含めた全体を複合的な表現の意味と考えるため、CPの違いから(4)・(5)に差が出る場合もあると説明できる。

4. ミスマッチという錯覚：問題②への回答

4.1 副詞を伴うVすぎる構文

・認知文法の立場から記述した場合、副詞に TOO が付与されると考えられてきた例についても、ミスマッチはなく、むしろ自然な形での実現であることが言える。

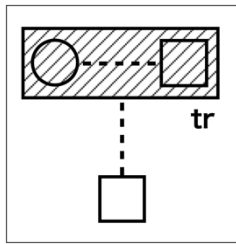


図3 副詞

・認知文法では、副詞は、「何らかの関係」をトラジェクターとした非時間的な関係をプロファイルするとされる (Langacker 2008: 116)。トラジェクターとなる関係（動詞、形容詞、前置詞など）は、他の要素によって精緻化される e-サイトである。つまり、副詞は修飾する要素がなければ使うことができない。

・動詞を修飾する副詞は動詞がなければ e-サイトが精緻化されないため、動詞と結びついてはじめて意味が決まる。

・V すぎる構文は動詞が表すプロセスのある側面が過剰となっていることを表しており、副詞は動詞のその側面を修飾している。

・図4は副詞を伴うV すぎる構文を表している。太い矢印 (→) は精緻化の関係を表し、破線は一致関係を表す。動詞は、副詞の e-サイトを精緻化し、同時に「-すぎる」の e-サイトを精緻化している。これら3つの要素は影響を与え合う関係にある。

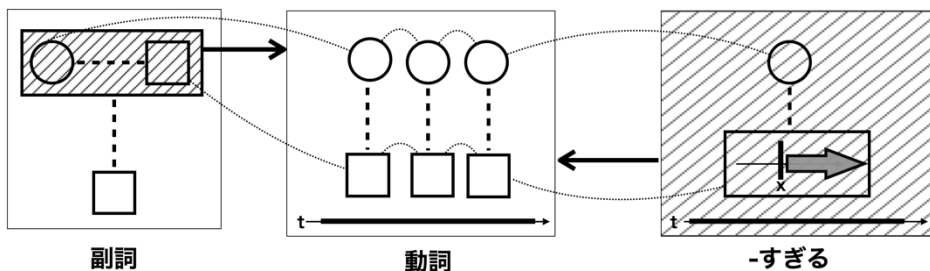


図4 副詞を伴うV すぎる構文

・V すぎる構文の表す X の過剰の X は V の意味によって精緻化され、V が副詞によって修飾されている場合はその修飾された面も X の対応する schematic な面を精緻化する。そのため (6a) のように複数の副詞が動詞を修飾していても、(6b) のように動詞が表す複数の側面が焦点化されても問題はない。

4.2 too early はミスマッチではないのか

・(8a) で英語の early の e-サイトを精緻化するのは動詞 arrive であり、too が副詞の前に置かれることによって、到着の早さの過剰を意味する。英語では過剰を表す副詞である too は副詞や形容詞の前に現れることが慣習化しており、(8b) のように動詞に接続することはできない。日本語では同じ状況を (9a) で表すことができるが、(9b) のように「-すぎる」は副詞に直接後接することができない。

(8) a. you've arrived too early b. *you've too-arrived early

(9) a. 早く着きすぎた b. *早くすぎる着いた

・概念として、何らかの行為・状態が過剰であることは問題なく理解できる。そのため日本語中心の視点に立った場合、「走りすぎる」の表す意味を表現するために、英語では run too much のように too を何らかの副詞と組み合わせなければならないのは、ミスマッチであるとも言えてしまう。伝達内容が同一だとしても (composite structure が同じでも)、英日では、CP が異なっている。どのような経路で伝達される意味にたどり着くのが慣習的かは言語によって (1つの言語の内部でも) 異なりうる。

4.3 フレーム内の焦点化

・「認知言語学では、一般に言語表現の(慣習化したものを含む)意味の成立には、狭義の言語的(「辞書的」、「意味論的」、「コンテキスト中立的)な要因のみではなく、通常言語外的とされる(「百科事典的」、「語用論的」、「コンテキスト依存的)な要因も決定的に関与しており、いわゆる言語的な意味の多くは、実際には、言語外的な知識を基盤としてはじめて成立しようと考えている。」(西村 2007: 654)

・西村 (2007: 654) は、「特集: 形と意味のミスマッチ」において換喩を取り上げ以下のように述べている。従来形式と意味のミスマッチと言われてきた換喩について、ある表現の複数の用法間に換喩的な関係がある場合の多くは、百科事典的なまとまり全体にアクセスした上で、その異なる局面や段階に焦点を合わせる能力が関与している。例えば「村上春樹を読む」のような例の理解には〈村上春樹〉のフレーム全体にアクセスした上で「読む」という動詞の意味と整合する局面[村上春樹の作品]に焦点を合わせるプロセスが含まれていると考えられる。そして、「村上春樹が大好きです」や「村上春樹を高く評価する」のような例では、「村上春樹」が指示しているのが「本人」なのか「作品」なのか決定することはほとんど不可能であり、限定する意味もない。

・Vすぎる構文の意味も、Vの喚起するフレームを考慮しなければ、導かれないものである。副詞的な要素にのみ「-すぎる」の意味が結びついていると考えるべき理由はなく、何が過剰であるのかを特定の要素に限定して求めることにほとんど意味はないだろう。例えば、(7)の「愛しすぎる」は、時間だけが過剰であると考えるのは無理があり、「愛すること」に関する一般的な知識のフレームを参照しなければ意味がわからない。

5. おわりに

・日本語のVすぎる構文は、動詞の意味のフレームから導かれる特定の行為ないし状態が何らかの点で過剰であることを表すために用いられる構文である。Vすぎる構文の「ミスマッチ」は、過剰は意義素TOOによって表示されるという、日英語の差異を無視した根拠のない前提から生じたものにすぎない。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 東寺祐亮 (2018) 「V スギル構文の統語的条件と解釈」『日本語文法』 3-19, 18 巻 1 号.
- 西村義樹 (2007) 「換喩と文法」『英語青年』 653-655. 第 152 巻 11 号.
- 由本陽子 (1997) 「動詞から動詞を作る」影山太郎・由本陽子『語形成と概念構造』 東京: 研究社.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 東京: ひつじ書房.
- Kikuchi, Akira (2013) A Phonologically Empty Degree Adverb: A Case from a Verb Excess in Japanese. 『言語におけるミスマッチ: 福地肇教授退職記念論文集』 85-106. 東北大学大学院情報科学研究科.
- Nakamura, Tsuguro (2003) “Notes on the Japanese Supporting Verb SUGIRU :A Syntax-Semantics Mismatch.” *In Empirical and Theoretical Investigations into Language : A Festschrift for Masaru Kajita*. Edited by Chiba, Shuji et al. 477-492. Tokyo: Kaitakusha.
- Langacker, Ronald.W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald.W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.

二重目的語構文が表す事象構造と所有代名詞の指示の関係について (Ditransitive Event Structures and the Reference of Possessive Determiners)

植田 正暢 (UEDA Masanobu)
北九州市立大学 (University of Kitakyushu)

1. はじめに

扱う形式: NP_{SUBJ}-V-NP_{IO}- [NP Possessive Determiner-N]_{DO}

- (1) Alice handed Beth her letter. (her = ✓A / ✓B)

Van Hoek (1997): 参照点モデル(reference point model)にもとづく照応関係の分析

- (2) i. A full nominal cannot appear in the dominion of a reference point which it corresponds to.
ii. The antecedent for a pronoun must be sufficiently salient (i.e., distinct and prominent) within the context in which the pronoun appears that it can plausibly be construed as a reference point with the pronoun in its dominion. (Van Hoek, 1997: 57))
- (3) a. I gave Sam his book.
b. *I gave him Sam's book.

本研究発表で注目する事例

- (4) a. Alice gave Beth her worried look. (her = ✓A / *B)
b. Alice gave Beth her look at the document. (her = *A/✓B)
c. Alice envied Beth her success. (her = *A/✓B)

問題の所在: (1)と(4)の間に表面的な構造の差が見られないことから、他の要因を探る必要がある
本発表での主張: 事象構造の違いが反映されている

2. 「所有代名詞+名詞」の働き

- 名詞句全体を定的(definite)にする
 - 所有代名詞と名詞の間関係は「所有」以外も表される(親族関係、部分・全体、属性など) (cf. Heine, 1997 など)
 - 「所有代名詞+名詞」が表す関係の成立する時間と主動詞が指し示す時間にずれが生じることがある
- (5) a. ... she started cooking his tea in the kitchen. (Tell it to the Bees)
b. I met my wife for the first time when we were in college.

3. 所有変化に見られる二重の関係性

- 内在的な関係(e.g. John - bicycle in (6))
 - 一時的な関係(e.g. Harry - bicycle in (6))
- (6) John gave Harry his bicycle for the day: but the bicycle just sat there the whole day, I guess Harry didn't need it. (Oehrle, 1976: 24)

二重目的語構文における「所有代名詞+名詞」は内在的關係を表す

- (7) ... Please give me my violin. / And Holmes began to play his violin. (BNC: 344-347)

時間のずれ

- (8) A few months later, my husband gave me my violin for Valentine's Day.

(<https://fiddlerman.com/2012/09/meet-kindascratchy-from-fiddlermans-fiddle-talk-forum-2/> September 2, 2012)

4. 二重目的語構文の事象構造

4.1 所有変化に含まれる2つの関係

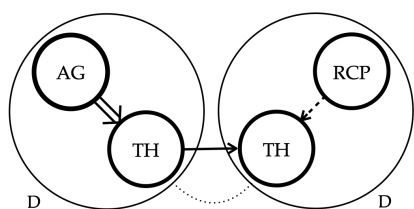


図1 典型的な二重目的語構文が表す事象構造

プロファイルされる関係は RCP と TH の関係であるが、RCP と TH の関係を成立させる過程には2とおりある。

(9) He held out his hand and offered me a sweet.

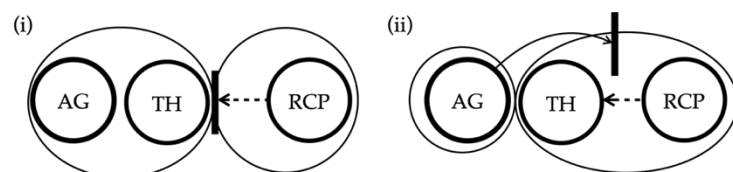


図2 RCP から TH へ働きかける事例((9)が表す事象構造)

(10) "to hold something out to them so that they can take it" (LDOCE, 下線部発表者)

4.2 直接使役・間接使役で前景化される関係の違い

- (11) a. She gave him a look.
b. The other man shook his head, held up his paper, and shouted out, 'Can anybody read this?'
/ 'Give me a look at it,' Cameron shouted back. (BNC: A0N 351-352, 下線部発表者)

4.2.1 直接使役

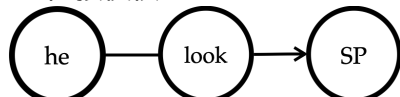


図3 (11a)が表す事象構造(直接使役 = 推進力モデル)

‘Indirect objecthood’が低い

(12) * She gave him a look, and he still has it.

(She gave him a present, and he still has it.)

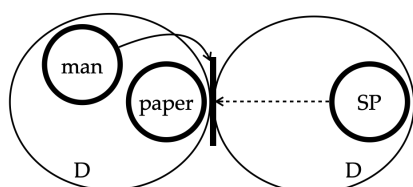
(4) a. Alice gave Beth her worried look. (her = ✓A / *B)

(13) a. Alice promised Beth her assistance. (her = ✓A / *B)

b. He forced her mouth to his and gave her *his* kiss. (With Everything I am, 強調ママ)

4.2.2 間接使役

(i) 書類にアクセスできない状態



(ii) 書類にアクセス可能な状態

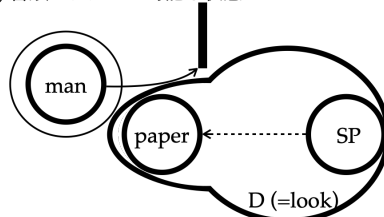


図4 (11b)が表す事象構造(間接使役 = 障壁モデル)

(4) c. Alice gave Beth her look at the document. (her = *A/✓B)

Alice は look に対して直接的な働きかけがなく、Beth と look の間の関係が重要となる

- (14) a. ... she had stopped denying him his existence,' ... (BNC: APS 1069)
 b. ..., the study of whose reading matter has so often given social and cultural historians their main access to the past, ... (BNC: CM6 210)

二重目的語構文が表す所有変化には 2 つの関係が関わり、比喻によっていずれかの関係が前景化されることがある。

4.3 属性を表す表現

- Transfer を表さない二重目的語構文の分析 (Shibuya and Nozawa, 2008; Tsuji, 2016; 2017 など)
- 二重目的語構文における IO を指す所有代名詞の頻度 (BNC)
 give: 142/4215 (3.4%) (無作為抽出), envy: 34/49 (69.4%), begrudge: 15/33 (45.5%)

- (15) a. He forgave her her sins.
 b. He envied the prince his fortune.
 c. You surely don't begrudge him his happiness.
 ((a)-(b) from Goldberg, 1995: 132, (c) from *OALD*¹⁰)
- (16) a. She envied him his ability to distance himself (BNC: JY8 1591)
 b. I envy her her happiness ... (BNC: HWE 1452)
 c. I used to envy you your looks—tall, wandlike, elegant—and that red hair of yours! (BNC: HHA 830)
- (17) a. Kate envied her mother her good looks.
 b. * Kate envied her mother good looks.

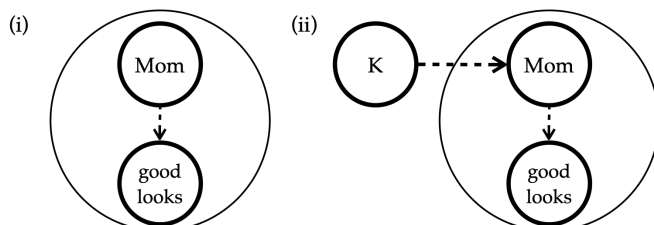


図 5 (16)が表す事象構造 (i)IO-DO の関係が成立している状態に対して、(ii)SUBJ が心的接触をする

類似した事例

- (18) a. Here, he asked Harry to be Teddy's godfather, feeling nothing but forgiveness and gratitude towards the person who had sent him home to the family that gave him his greatest happiness.
 ("Remus Lupin" by J. K. Rowling. 2015. <https://www.wizardingworld.com/writing-by-jk-rowling/remus-lupin>)
 b. That's what gives the JFT tractor its distinctive looks. (BNC: ACR 2602)
- (19) a. It's the thyme that gives the local mutton its superb flavour. (BNC: HHA 2800)
 b. It's the thyme that gives the local mutton a superb flavour.

NOTES: envy は間接目的語を省略しても実質的に同じ意味を表す (cf. Tsuji, 2017)

- (20) a. Kate envied her mother's good looks.
 b. He forgave her sins.
 c. Don't begrudge his happiness.

他の事例でも同じ可能性がある

- (21) a. Finally it is blended with 10 year old Balsamic vinegar to give its distinctive dark, sweet, rich flavour. (BNC: CFS 2982)
b. "Its superabundance of characters is only one of the elements that give its air of Shakespearean complexity." (A review of *Small G A Summer Idyll*. *O Magazine*.)
(22) a. There is no higher authority that can legally deny me my right to do so.
b. There is no higher authority that can legally deny my right to do so. (植田, 2018: 32)

ただし同じ意味にならない場合もある

- (23) a. Capitalism and economic growth will not guarantee the Chinese people their human rights. (BNC: CRC 328)
b. Capitalism and economic growth will not guarantee the Chinese people's human rights.

4.4 lose

DO は IO の支配域の外へ移動する (cf. 大橋, 2004: 407)

- (24) a. the mistakes which lost him his kingdom (LDOCE)
b. One bad report could lose a girl her badge. (BNC: CK0 3481)
c. Robert Slessor's alcoholism lost him his job, ... (BNC: GTS 147)
(25) a.?? The decision to fold lost me a good deal of money that I would have won.
b. The decision to fold lost me all the money I had previously bet.

(Oehrle, 1976: 95)

5. おわりに

間接目的語と、所有代名詞を伴う直接目的語は内在的な関係が成立した状態にある

間接目的語と直接目的語の関係が成立する背後の過程と所有代名詞の照応に関係性がある

主要な参考文献

- Cattell, R. (1984). *Composite Predicates in English*. Academic Press.
Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
Heine, B. (1997) *Possession: Cognitive Sources, Forces, and Grammaticalization*. Cambridge University Press.
Iwata, S. (2006). Where do Constructions Come from? *EL*, 23, 493-533.
Kövecses, Z. (2010). *Metaphor: A Practical Introduction* 2nd. ed. Oxford University Press.
Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford University Press.
Langacker, R. W. (2000). *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
Oehrle, R. T. (1976). *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*. Ph.D dissertation, MIT.
大橋浩. (2004). 「lose の意味」河上誓作教授退官記念
論文集刊行会(編)『言葉のからくり』, 英宝社.
Shibuya, Y. and Nozawa, H. (2008) Systematicity in English Ditransitive Idioms. 『日本認知言語学会論文集』8 巻, 368-
Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics, Vol.1: Concept Structuring Systems*. MIT Press.
辻早代加. (2016). 「なぜ動詞 forgive は二重目的語構文に生じることができるのか」, *JELS*, 33, 183-187.
Tsuji, S. (2017). Why Can the Verb *Envy* Appear in the Ditransitive Construction? *QUERIES*, 50, 18-35.
植田正暢. (2018). 「2 つの目的語の関係—障壁モデルにもとづく二重目的語構文の分析—」大橋浩他(編)『認知言語学研究の広がりに』, 18-34. 開拓社.
Ueda, M. (2019). *Transfer and Causation: A Cognitive Construction Grammar Approach to English Ditransitive Constructions*. Ph.D. dissertation, Seinan Gakuin University.
Van Hoek, K. (1997). *Anaphora and Conceptual Structure*. University of Chicago Press.

共合成による同族目的語構文の派生
(The Derivation of the Cognate Object Construction via Co-composition)

工藤 和也 (KUDO Kazuya)
龍谷大学 (Ryukoku University)

0. 本発表の目標

◇ 英語の同族目的語構文が持つ次の3つの特徴を、生成語彙論の観点から理論的に説明する。

- (1) a. 非能格動詞しか生起しない。
b. 目的語が動詞と同語源でなければならない。
c. 通常、形容詞などの修飾語句を伴う。

1. 同族目的語構文の特徴

(2) 「真の」同族目的語構文 (“true” cognate object construction)

- a. Mary laughed a hearty laugh.
- b. John slept a sound sleep.
➤ 非能格動詞が目的語位置に動詞と同語源の名詞句を取る。

(3) 他動化目的語構文 (transitivising object construction)

- a. Sue sang a charming song.
- b. Sam danced a merry dance.
➤ 他動詞が目的語位置に動詞と同語源の名詞句を取る。

(4) 副詞的同族目的語構文 (adverbial cognate object construction) (Nakajima (2006))

- a. The tree grew a century's growth within only ten years.
- b. The stock market dropped its largest drop in three years today.
➤ 自動詞が付加詞位置に動詞と同語源の名詞句を取る。
(※原理的には、非能格でも可だが、(2)とは解釈が異なる。)

✓ (2)の構文のみが、(1)の3つの特徴を併せ持つ。 ➡ 本発表では(2)のみを扱う。

■ 同族目的語構文の特徴①：非能格動詞しか生起しない。

(Massam (1990), 大室 (1990), Levin and Rappaport Hovav (1995), Macfarland (1995) など)

- (5) a. Bill sighed a weary sigh. (Jones (1988: 89))
b. John screamed a terrifying scream. (Moltmann (1989: 300))
c. Dorothea smiled a wicked smile. (Massam (1990: 161))
- (6) a. *The glass broke a crooked break.
b. *The actress fainted a feigned faint. (Levin and Rappaport Hovav (1995: 40))

■ 同族目的語構文の特徴②：目的語が動詞と同語源でなければならない。

(Baron (1971), 小西 (1981), Massam (1990) など)

- (7) a. *He laughed a syndical grin.
b. *The dog howled fierce barks.
c. *Ellen sneezed a dry cough. (高見・久野 (2002: 144))

■ 同族目的語構文の特徴③：通常、形容詞などの修飾語句を伴う。

(岩倉 (1976), Rice (1988), Moltmann (1989), 大室 (1991) など)

- (8) a. *Willy sneezed a sneeze.
b. *Neil laughed a laugh.
c. *The actress smiled a smile. (Rice (1988: 209))

2. 共合成

- ☆ Pustejovsky (1995)が *The Generative Lexicon* の中で仮定した語彙の創造性を高めるための生成デバイスの1つ。

- (9) a. John baked the potato. (verbs of change of state)
b. John baked a cake. (verbs of creation)

- (10) **bake (verb)** **cake (noun)**
 QUALIA = state-change-lcp QUALIA = CONST = y
 FORMAL = bake_result (e2, y) FORMAL = x
 AGENTIVE = bake_act (e1, x, y) TELIC = eat (e2, z, x)
AGENTIVE = bake_act (e1, w, y)
 (Pustejovsky (1995: 123), slightly modified) (Pustejovsky (1995: 123))

- クオリア構造内に共指定(cospecification)があると、「クオリア統合」(qualia unification)を伴う関数適用が起こる。

- (11) **Function Application with Qualia Unification:**
 For two expressions α , of type $\langle a, b \rangle$, and β , of type a , with qualia structures QS_α and QS_β , respectively, if there is a qualia value shared by α and β , then we can define the qualia unification of QS_α and QS_β , $QS_\alpha \sqcap QS_\beta$, as the unique greatest lower bound of these two qualia structures.
 (Pustejovsky (1995: 124), slightly modified)

- 共合成の結果、bake a cake は「創造タイプ」の語彙概念パラダイムにシフトする。

- (12) **bake a cake**
 EVENSTSTR = E1 = e1: process
 E2 = e2: state
 ARGSTR = ARG1 = x: animate_ind
 ARG2 = y: artifact
 D-ARG1 = w: material
 QUALIA = create-lcp
 FORMAL = exist (e2, y)
 AGENTIVE = bake_act (e1, x, w) (Pustejovsky (1995: 125))

3. 同族目的語構文の派生

- ☆ 同族目的語構文は軽動詞構文と類似性がある (Quirk et al. (1985), Macfarland (1995), Huddleston and Pullum (2002) など)。

- 同族目的語構文の多くは軽動詞構文に言い換えられる (Mufwene (1978), Höche (2009))。

- (13) a. Marcy had a wonderful dream. (cf. Marcy dreamt a wonderful dream.)
 b. The solicitor gave an embarrassed cough. (cf. The solicitor coughed an embarrassed cough.)
 c. I take a deep breath and try to relax. (cf. I breathe a deep breath and try to relax.)

- ✓ 同族目的語構文に出てくる名詞句は「事象名詞」(event nominal) である。

- 同族目的語構文でも、動詞と目的語との間で共指定が成立する。

- (14) **laugh (verb)** **laugh (noun)**
 EVENTSTR = E1 = e1: process QUALIA = FORMAL = y: event
 ARGSTR = ARG1 = x: human AGENTIVE = laugh_act (e, x)
 QUALIA = AGENTIVE = laugh_act (e1, x)

➤ 共合成の結果、**laugh a laugh** も「創造タイプ」の語彙概念パラダイムになる。

(15) **laugh a laugh**

EVENSTSTR = E1 = e1: process

E2 = e2: state

RESTR = $\langle \circ \circ \infty$

ARGSTR = ARG1 = x: human

ARG2 = y: event

QUALIA = create-lcp

FORMAL = exist (e2, y)

AGENTIVE = laugh_act (e1, x)

★ 同族目的語は「結果の目的語」(resultant object) の一種である (Quirk et al. (1985), Nakajima (2006))。

• 代名詞化できない。

(16) a. *John baked a cake and then I baked it.

b. *John smiled a smile then Mary smiled it. (Massam (1990: 181))

• 定冠詞で修飾できない (不定性効果がある)。

(17) a. ?He lived the quiet life./?She smiled the happy smile.

(Massam (1990: 164))

b. *John screamed {this scream/every scream} we heard today.

(Moltmann (1989: 301))

4. 3つの特徴の説明

◇ 共合成が起こるためには...

A) 動詞と目的語が直接構成素になっていなければならない。

(18) a. Smile a happy smile though Chris did, (everyone could see that her happiness was forced).

(Macfarland (1995: 103))

b. I wanted Chris to smile a happy smile that day, and smile a happy smile she did that way.

(Macfarland (1995: 104))

B) 動詞と目的語が隣接していなければならない。

(19) a. Let Ben run (*quickly) a little run.

b. Ben sneezed (*that way) a glorious sneeze.

(Massam (1990: 166))

◇ 統語的に目的語位置が空いている非能格動詞でないとは不可能 : (1a)

C) 動詞と目的語の間に共指定が必要。

(20) Gabriel sneezed {a/his/*her} hefty sneeze.

(Massam (1990: 173))

◇ 動詞と目的語が同語源でないとは不可能 : (1b)

✓ 特定の同族目的語では、目的語の表す行為が主動詞の主体役割のサブセット (i.e. cackle $\subset$ laugh, grin $\subset$ smile) になっている (高見・久野 (2002))。

(21) a. Van Aldin laughed a quiet cackle of amusement.

(Agatha Christie, *The Mystery of the Blue Train*, 大室 (1990: 76)に引用)

b. “Let’s wipe our brows and smile a graduation grin,” said Ms. Ator of Reisterstown.

(T. W. Waldron, *The Baltimore Sun*, Macfarland (1995: 90)に引用)

D) 共合成を起こす言語学的な理由 (i.e. motivation) が必要。

✓ 同族目的語構文の動詞句の事象タイプは process と state の“exhaustive ordered overlap”。

➤ これは非能格動詞が単独で表す process と本質的に同じ。

∴「10 分間笑う」という出来事は「10 分間『笑い』を作る」と等価。

◇ 修飾語句がなければ、派生的に無意味 (cf. 経済性の原理) : (1c)

✓ 修飾語句がないことに意味がある場合は、修飾語句がなくても OK。

(22) As he knew it must be another bibliophil he said nothing but smiled a smile. (大室 (2004: 146))

- 先行文脈の「何も言わなかった」と対比させることで、その smile が何の特徴もないものであり、単に微笑んだだけであると解釈される。
- このような状況では、同族目的語に修飾語句をつけていないということが、かえって特別な意味を持つため、修飾語句がない同族目的語構文が容認される (堀田 (2005: 76))。

★ 同族目的語構文は、出来事そのものの有無よりも、その状況に焦点を当てた表現である。

• what で内容を尋ねられない。

(23) *What did Miss Marple smile? (cf. How did Miss Marple smile?) (大室 (1990: 75))

• 行為が否定のスコープに入らない。

(24) *The old man did not smile a happy smile, that is, he did not smile. (cf. 岩倉 (1976: 60))

• 他の様態副詞と共起できない。

(25) *Tom slept a sound sleep happily. (岩倉 (1976: 60))

• 話し手指向の副詞の代わりには用いられない。

(26) *Hans smiled an evident smile. (cf. Evidently, Hans smiled.) (Massam (1990: 174))

★ 同族目的語構文には副詞による修飾機能を補う役割もある。

• 様態副詞は重ねられないが、同族目的語の修飾語句は重ねられる。

(27) a. *She smiled warmly happily. (大室 (1991: 68))

b. She smiled a warm happy smile.

• 副詞では修飾できない事態も同族目的語なら修飾できる。

(28) a. *He sneezed (most) tremendously. (Dixon (1991: 125))

b. He sneezed a tremendous sneeze.

✓ 「自動詞+形容詞+同族目的語」は「自動詞+副詞」よりも修飾構造が豊富。

➤ 副詞を伴う自動詞文では表しきれない複雑な様態表現をカバーするために、同族目的語構文が発達した可能性もある。

5. まとめ

主要参考文献 : Höche, S. (2009) *Cognate Object Constructions in English: A Cognitive-Linguistic Account*, Gunter Narr Verlag, Tübingen. / 岩倉国浩 (1976) 「同族目的語と様態の副詞と否定」, 『言語教育』6月号, 60-63. / Macfarland, T. (1995) *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*, Doctoral dissertation, Northwestern University. / Massam, D. (1990) "Cognate Objects as Thematic Objects," *The Canadian Journal of Linguistics* 35, 161-190. / Moltmann, F. (1989) "Nominal and Clausal Event Predicates," *CLS* 25, 300-314. / Nakajima, H. (2006) "Adverbial Cognate Objects," *Linguistic Inquiry* 37, 674-684. / 大室剛志 (1990) 「同族目的語構文の特異性(1)」, 『英語教育』11月号, 74-77. / Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge: MA. / Rice, S. (1988) "Unlikely Lexical Entries," *BLS* 14, 202-212. / 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』, 研究社.

反応目的語構文(ROC)の統語的・意味的特徴について
A Syntactic and Semantic Analysis of Reaction Object Constructions

西原俊明 (NISHIHARA Toshiaki) ・ 古川武史 (FURUKAWA Takeshi)
長崎大学 (Nagasaki University) 福岡工業大学 (Fukuoka Institute of Technology)

0. 序

(1) She smiled her thanks.

1. ROC の特徴

(2) a. She smiled to him.

b. She smiled her thanks to me.

c. She smiled to me the heartfelt thanks I had been hoping for.

(3) a.*She smiled warmly her thanks / appreciation.

b. She smiled warmly the thanks we felt we deserved.

(4) a. She smiled across the table at her husband.

b. She smiled at her husband across the table.

c. She smiled her thanks at her husband.

d.*She smiled at her husband her thanks.

e. She smiled her thanks across the table.

f. She smiled across the table *her thanks / the thanks he felt he deserved.

(5) a. What did he nod his agreement of?

b. What did he woof his agreement at?

(6) a. After a delay, her reluctant approval was finally smiled in our direction, and we began the work immediately.

b. A heartfelt thanks was smiled by Mary.

(7) a. Smile her thanks though she did, I didn't recognize it.

b. She smiled her thanks to me, and I did so, too.

(8) Buddy spotted John and smiled a hello, which John returned ▲.

(9) a nod / smile / murmur of thanks / approval

(10) a half-smiled thanks / a warmly smiled thanks

(11) “express (a reaction) by V-ing,” where “V” is the basic sense of the verb. (Levin (1993: 98))

(12) a. Seed tut-tuts his thanks.

b. Atlas woofed his agreement.

(COCA)

- c. They barked our good mornings.
- (13) laugh: approval, comment
shrug: apologies, helplessness, indifference, uncertainty
- (14)...nodded his thanks and acceptance of her present...
(<https://www.cs.cmu.edu/~spok/heidi/heidi.html>)
- (15) a. She smiled her appreciation / *her thanks again and again.
b. He came into the room just as she was smiling her appreciation.
c. She smiled her appreciation repeatedly / for several minutes (until he finally noticed).
d. The bookman smiled his thanks while he followed the craftsman's scrutiny of the pages.
(Cable, *The Flower of the Chapdelaines*)
- (16) a. He gestured his agreement.
b. Barkinfla gestured his agreement by clenching a large fleshy fist. (COCA) (下線は、筆者)
- (17) a. He reluctantly nodded agreement.
b. He grudgingly nodded agreement.
- (18) He expressed reluctant agreement by nodding.
- (19) a. He nodded enthusiastic agreement.
b. He gently nodded enthusiastic agreement.

2. COC との類似点

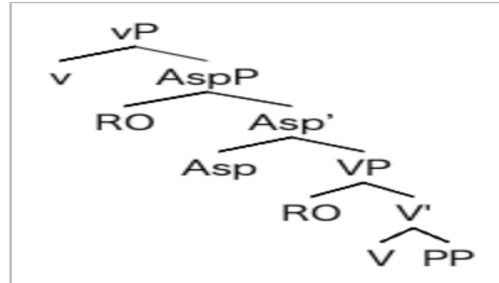
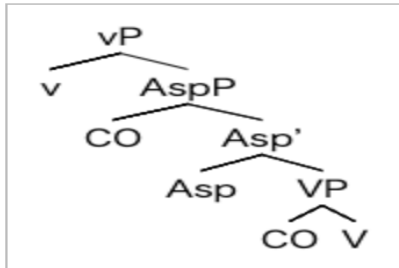
- (20) a. She smiled at him the most beautiful smile he had ever seen.
b. She smiled her most radiant smile at him. (Flesler and Wanner (2001:7))
- (21) a. *She lived happily a life.
b. She lived happily a life that most people might consider boring.
- (22) ? What kind of smile did Chris wonder whether Lee smiled? (大庭 (2013:62))
- (23) Smiles were smiled, goodbyes were waved, and a good time was had by all.
(Wanner (2009: 72))
- (24) a. Smile a happy smile though Chris did, no one questioned her energy.
b. Chris smiled a happy smile, and Mary did so, too.
c. Chris smiled a happy life, and Mary did so, too. (大庭 (2013:62))
- (25) a. Mary laughed a mirthless laugh for hours / in an hour.
b. Josie danced a silly for hours / in one hour. (Tenny (1994: 39))
- (26) a. How did Catherine smile?
b. She smiled a {sudden / *thin-lipped} smile. (Horita (1996: 238))
- (27) a. What sort of smile did Catherine smile?
b. She smiled a {*sudden / thin-lipped} smile. (Horita (1996: 239))

3. ROC の派生

(28) [_{VP} v [_{AspP} CO [_{Asp'} [_{Asp}] [_{VP} [CO] [V]]]]]

(29) a. [x CAUSE [y BECOME EXPRESSED]] BY [x verb]

b. [x CAUSE [yi BECOME EXIST]] BY [x verb]_i



(30) [_{VP} v [_{AspP} RO [_{Asp'} [_{Asp}] [_{VP} [RO] [V' [V] [PP]]]]]]]

5. 結語

References

- Flesler, Claudia and Anja Wanner (2001) “The Syntax of Cognate and Other Unselected Objects,” *Structural Aspects of Semantically Complex Verbs* ed. by Nicole Dehé and Anja Wanner, 105-130, Peter Lang, Frankfurt, Bern and New York.
- Jespersen, Otto (1928) *Modern Grammar of English on Historical Principles*, George Allen and Unwin, London.
- Horita, Yuko (1996) “English Cognate Object Constructions and Their Transitivity,” *English Linguistics* 13, 221-247.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: a Preliminary Investigation*, Chicago University Press, Chicago.
- Marantz, Alec (2005) “Objects out of the Lexicon: Objects as Events,” ms., MIT.
- Massam, Diane (1990) “Cognate Objects as Thematic Objects,” *Canadian Journal of Linguistics* 35, 161-190.
- 大庭幸男 (2013) 「英語の同族目的語構文の統語構造について」『関西英文学研究』6, 59-65, 関西英文学会 (日本英文学会)
- Tenny, L. Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.
- Travis, Lisa deMena (2010) *Inner Aspects: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.
- Wanner, Anja (2009) *Deconstructing the English Passive*, De Gruyter, Mouton.

Tokyo Keizai University

To provide evidence from presuppositions for Interpretive Economy (Kennedy 2007). The semantics of *compared to*-comparison involves presuppositions. When Interpretive Economy applies to *compared to*-comparison, it explains why one interpretation is chosen over others.

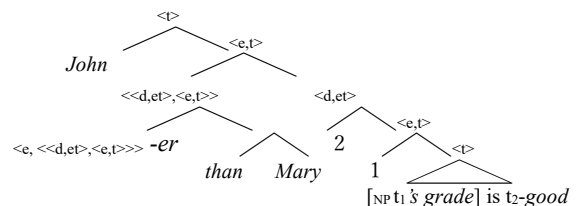
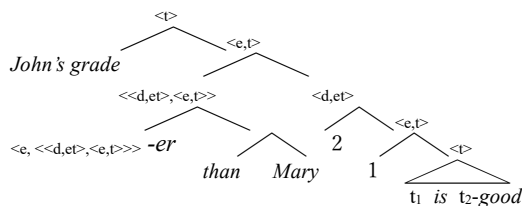
- There are at least two types of comparison, i.e., standard comparison exemplified in (1) and *compared to*-comparison exemplified in (2).

- (1) John is older than Mary. (standard comparison)
 (2) Compared to Mary, John is older.¹ (*compared to*-comparison)

- *Compared to*-comparison can obviate island effect as shown in (3) vs. (4).

- (3) a. #_[NP John's grade] is better than Mary.
b. LF for the available #odd meaning

c. LF ruled out by the left-branch condition



- (4) Compared to Mary, John's grade is better.²
(=John's grade is better than Mary's grade.)

-Similar contrast is observed between (5) vs. (6).

- (5) #John wrote a paper [RelCl that was longer than Bill]. (Beck et al. 2012, p.152)
 (6) Compared to Bill, John wrote a paper [RelCl that was longer]. (Beck et al. 2012, p.152)

- *Compared to*-comparison comes with some kind of minimality constraint. (7) means a comparison of John's brother vs. Mary herself, not Mary's brother. In other words, the reading with no implicit element is chosen.

- (7) Compared to Mary, John's brother is older.
(=John's brother is older than Mary.)
(≠John's brother is older than Mary's brother.)

¹ The comparative form *older* must be adopted, rather than the positive form *old*, in order for (2) to be an equivalent of (1). See Sawada (2009) for relevant discussions.

² Note that *Compared to Mary's, John's grade is better* sounds even better. However, (4) still carries the relevant interpretation. See (23)–(25) for the semantics of *Compared to Mary's, John's grade is better*.

3.3 Syntactic deletion?

-A deletion analysis would be difficult, if not impossible. It would account for (4) as in (8) with the deletion of ~~'s-grade~~, which is not even a constituent. The case of (6) is even more difficult, as it is not clear how the deletion shown in (9) can be made possible. (9) also would give wrong semantics.

-Suppose the deletion of ~~'s-grade~~ is possible. Then for the case of (7), it would be difficult to explain why (11) with the deletion of ~~'s-brother~~ is not allowed.

(8)_{for(4)} Compared to [NP[_{POSSP}[NP Mary]'s]~~-grade~~], John's grade is better.

(9)_{for(6)} Compared to [Bill ~~wrote a paper that was d-long~~], John wrote a paper [_{RelCI} that was longer].

(10)_{for(7)} available reading: Compared to [NP Mary], John's brother is older.

(11)_{for(7)} unavailable reading: Compared to [NP[_{POSSP}[NP Mary]'s]~~-brother~~], John's brother is older.

-A semantics-based analysis captures all the readings in a principled manner.

3. Background

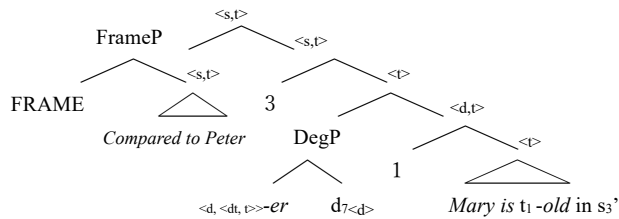
3.1 Hohaus's (2015) contextual comparison with FrameP

-Hohaus (2015) proposed a framework of contextual comparison with FrameP³, where the value of the standard degree of comparison is contextually determined.

(12) Compared to Peter, Mary is older. (Hohaus 2015, p.61)

- *Compared to Peter* is part of FrameP, and the comparative morpheme *-er* takes a free degree variable d_7 whose value is determined via the utterance context.

(13)



(slightly modified from Hohaus 2015, p.63)

-FrameP does not provide the standard degree directly. Instead, it brings a presupposition which restricts the value of d_7 . *Compared to Peter* means some kind of degree comparison with Peter, as shown in (14)a. The FRAME operator, defined as (14)b, brings a presupposition that p holds in a minimal situation. We define minimality as in (14)c, by which p holds in s and not in any smaller situation. Thus FrameP contributes a presupposition that the degree comparison with Peter holds in a minimal situation that is small enough to have the comparison but nothing else.

(14) Semantics of FrameP

a. $\llbracket \textit{compared to Peter} \rrbracket = \lambda s_{\langle s, t \rangle} . \exists x_{\langle e \rangle} . \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle \rangle} [\mu(s)(x) \geq \mu(s)(\textit{Peter})]$

b. $\llbracket \textit{FRAME} \rrbracket = \lambda p_{\langle s, t \rangle} . \lambda q_{\langle s, t \rangle} . \lambda s : \text{MIN}(p)(s) . q(s)$ (Hohaus 2015, p.68)

³ What we call “contextual comparison with FrameP” corresponds to Hohaus’s (2015) “indirect strategy”. I will paraphrase it as “contextual comparison with FrameP” for the purpose of our discussion in order to emphasize its rich implementation of context.

- c. $\llbracket \text{MIN} \rrbracket = \lambda p_{\langle s, t \rangle}. \lambda s. p(s) \ \& \ \neg \exists s' [s' < s \ \& \ p(s')]$ (Hohaus 2015, p.68)
- d. $\llbracket \text{FrameP} \rrbracket = \lambda q_{\langle s, t \rangle}. \lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}. \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\text{Peter})])]. q(s)$

- An informal paraphrase of the truth conditions of (12) given in (15) is as follows: They are defined if a relevant degree comparison involves Peter in a minimal situation s . When defined, the sentence is true iff Mary's age is greater than $g(7)$, whose value is naturally restricted to the age of Peter due to the presupposition. In other words, the μ -operator in the presupposition serves as the *_age_of_* function or more formally, $\lambda s^* \lambda x$. the age of x in s^* .

(15) Semantics of (12) *Compared to Peter, Mary is older.*

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}. \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\text{Peter})])$.

$\text{MAX}(\lambda d. \text{Mary is } d\text{-old in } s) > g(7)$

(Slightly modified from Hohaus 2015, p.68)

3.2 Kennedy's (2007) Interpretive Economy

- Kennedy proposed Interpretive Economy, which allows the contribution of context-dependent meaning only as a last resort.

(16) Interpretive Economy

Maximize the contribution of conventional meanings of the elements of a sentence to the computation of its truth conditions. (Kennedy 2007, p. 36)

-The motivation for Interpretive Economy comes from the difference between relative adjectives such as *tall* and absolute adjectives such as *bent* in their positive forms. An informal paraphrase of the truth conditions of (17) is 'Mary is taller than the contextually salient standard'. Such context-dependent interpretation is absent in (18). *Bent* has a lower closed scale and any non-zero positive degree counts as being *bent*.

-Kennedy argues that *bent* is, in principle, ambiguous between a relative and an absolute adjective. However, Interpretive Economy allows only the absolute meaning to surface.

(17) Mary is *tall*. (with an open scale⁴)

(18) This wire is *bent*. (with a lower closed scale)

4. Analysis

-I propose (19) based on Interpretive Economy.

(19) When truth conditions need to include presuppositions, ones with less presuppositions are preferable.

- (7) is in principle ambiguous between (20)a and (20)b. However, (20)a is chosen due to Interpretive Economy, because it requires less presupposition.

- μ in (20)a and (20)b is $\lambda s^* \lambda x$. the age of x in s^* . Thus $\mu(s^*)(\text{Mary})$ provides 'the age of Mary in s^* '.

- β in (20)b is λx . **the brother of x** . Therefore, $\mu(s^*)(\beta(\text{Mary}))$ provides 'the age of the brother of Mary in s^* '. Because of the **extra presupposition β** , (20)b is less preferred to (20)a.

⁴ Adopted from Kennedy and McNally (2005).

(20) For (7) *Compared to Mary, John's brother is older* :

a. Available (John's brother vs. Mary)

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\text{Mary})])$.
 $\text{MAX}(\lambda d. \text{John's brother is } d\text{-old in } s) > g(6)$

b. Not available (John's brother vs. Mary's brother)

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists \beta_{\langle e, e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\beta(\text{Mary}))])$.
 $\text{MAX}(\lambda d. \text{John's brother is } d\text{-old in } s) > g(6)$

- In (4) and (6), competing interpretations with less presupposition are semantically ruled out.

(21) For (4) *Compared to Mary, John's grade is better* :

a. Semantically ruled out (John's grade vs. Mary herself)

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\text{Mary})])$.
 $\text{MAX}(\lambda d. \text{John's grade is } d\text{-good in } s) > g(6)$

b. Available (John's grade vs. Mary's grade)

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists \gamma_{\langle e, e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\gamma(\text{Mary}))])$.
 $\text{MAX}(\lambda d. \text{John's grade is } d\text{-good in } s) > g(6)$

(22) For (6) *Compared to Bill, John wrote a paper* [_{RelCl} *that was longer*] :

a. Semantically ruled out (The paper written by John vs. Bill himself)

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\text{Bill})])$.
 $\exists y. \text{paper}(y) \wedge \text{write}(y)(\text{John}) \wedge \text{MAX}(\lambda d. y \text{ is } d\text{-long in } s) > g(6)$

b. Available (The paper written by John vs. the paper written by Bill)

$\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists r_{\langle e, e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(r(\text{Bill}))])$.
 $\exists y. \text{paper}(y) \wedge \text{write}(y)(\text{John}) \wedge \text{MAX}(\lambda d. y \text{ is } d\text{-long in } s) > g(6)$

-Contextual comparison does not exclude syntactic deletion.

(23) Compared to Mary's, John's grade is better.

(24) Compared to Mary's ~~grade~~, John's grade is better

(25) $\lambda s: s \in \text{MIN}(\lambda s^*. \exists x_{\langle e \rangle}, \exists \mu_{\langle s, \langle e, d \rangle} [\mu(s^*)(x) \geq \mu(s^*)(\text{Mary's grade})])$.
 $\text{MAX}(\lambda d. \text{John's grade is } d\text{-good in } s) > g(6)$

5. Conclusion

- Contextual comparison with FrameP provides empirical support for Interpretive Economy. I argued that an interpretation with less presupposition is preferable under Interpretive Economy. This implies that amount of presupposition is comparable.

References

- [1]Beck, Hohaus & Tiemann. 2012. A Note on Phrasal Comparatives. *SALT* 22, 146–165. [2]Heim. 1985. Notes on comparatives and related matters. Ms., University of Texas at Austin. [3]Hohaus. 2015. *Context and composition: How presuppositions restrict the interpretation of free variables*. Doctoral diss., University of Tübingen. [4]Kennedy. 2007. Vagueness and grammar: the semantics of relative and absolute gradable adjectives. *L&P* 30:1–45. [5]Kennedy and McNally. 2005. Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 18(2), 345–381. [6]Sawada. 2009. Pragmatic aspects of implicit comparison: An economy-based approach. *Journal of Pragmatics* 41:1079–1103.

Indexical Structures of “Bound” Plurals

Asako Matsuda
Ochanomizu University

1. Issue and goal

The present study focuses on two kinds of phenomena involving the plurality of bound pronouns.

- One is dependent plural phenomena as in (1a), where the morphologically plural pronoun *they* appears to be interpreted as a singular bound variable, at least in one reading (1b).
- The other is partial (split) binding as in (2), in which the pronoun *they*, again in one reading, may be interpreted as being bound by two antecedents, one of which is a quantified DP.

- (1) a. All men₁ think they₁ are smart.
b. $\forall x$ [man(x). x thinks that x is smart] (paraphrasable as ‘Every man₁ thinks *he*₁ is smart.’)
(2) Every woman₁ told [her₁ husband]₂ that they₁₊₂ should invest in the stock market.

The assumption that the bound *they* in sentences like (1a) is taken as a singular variable is supported by the contrast between (3ab). (1)–(3) are from Rullmann (2003).

- (3) a. All men think they are the smartest person in the world.
b. # They are the smartest person in the world.

The most common view for dependent plural facts like (1a)/(3a) assumes that the bound plural pronoun is a minimal pronoun. It is born with no ϕ -features such as person, number and gender, and remains so even at LF. Its ϕ -features are transmitted from its binder by a purely syntactic operation, not affecting its semantic interpretation as illustrated in (4) (Heim 2008; Kratzer 1998, 2009).

- (4) a. Base-LF: All men₁ think $\emptyset_1$ are smart.
b. PF: All men_{3rd-pl} think they_{3rd-pl} are smart.

However, this line of thought cannot be extended to partial binding facts like (2) as pointed out by Rullmann (2003). If *they* in (2) were to be generated ϕ -feature-less, where would it get its plural number feature from? Both of its binder DPs are singular. Various studies have proposed alternative (or revised) views (Heim 2008; Kratzer 2009; Sudo 2012, 2014); but we have not arrived at a consensus.

The goal of this study is to propose a generalizable morphosyntactic account for both of the above phenomena.

2. Bound *we* as multiple-author *we*

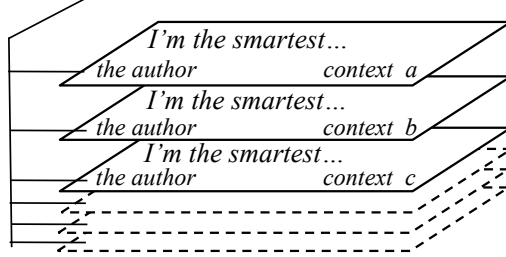
We first focus on the bound *we* as in (5a) and extend the analysis to *they*. The first-person plural *we* is an associative plural, different from additive plurals (e.g. *dogs*). *We* picks out the author of the utterance plus some non-authors. The question of whether *we* could ever represent multiple authors remains controversial:

- ‘A true first person plural [1+1] is impossible because there can never be more than one self.’ (Boas 1911: 39)
- Harley&Ritter (2002) -> The multiple-author *we* is semantically impossible; Cysouw (2003) and Harbour (2016) -> The multiple-author *we* is semantically possible but not grammatically significant.

But at least in certain structural positions, such as inside clauses embedded under attitude/communication verbs including *think*, *hope* and *tell*, the multiple-author *we* seems both semantically and syntactically possible.

- (5) a. We₁ all think we₁’re the smartest person in the world.
b. # We are the smartest person in the world. (Rullmann 2004)
- The clause as in (5b) in isolation in a root environment is illogical because it denotes a set of propositions (e.g., $a \in we$. a is the smartest; $b \in we$. b is the smartest; and $c \in we$. c is the smartest) which contradict one another.
 - In contrast, in (5a), the same string of words embedded under *think* is felicitous because the sentence describes a situation in which each member of *we* is thinking ‘I’m the smartest person.’ This study contends that the embedded *we* in (5a) constitutes an instance of multiple-author *we*, where *we* denotes a cumulation of authors in distinct contexts (illustrated in (6ab)). This does not give rise to a contradiction because there is only one person who is the smartest in each self-ascriptive thought context. See Partee 1989 for the basic idea that a pronoun may take values across contexts.
 - The view of the first person as in (7) remains essentially viable for the denotation of the bound *we* in (6b).

- (6) a. We all think we're the smartest person in the world.



- b. $\llbracket \text{the embedded } \underline{\text{we}} \text{ in (6a)} \rrbracket^C = \text{the authors of } C$ (C stands for a plurality of contexts.)
(Inspired by the denotation of the Amharic plural shifted indexical in LaTerza et al. 2014.)

- (7) $\llbracket 1st \rrbracket^c = \lambda x_e: x \text{ includes speaker}_c. x$ (Heim 2008)

3. Extension to *they*

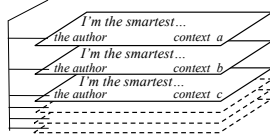
Earlier works on binding (e.g. Higginbotham 1985; Heim et al. 1991) show that bound (or at least coreferential) third-person plurals involve indexicality, the first-person-*ness* or the second-person-*ness*.

- (8) gives rise to the *I*-reading, the *you*-reading and the *we*-reading.

- (8) John and Mary told each other that *they* should leave. (Heim et al. 1991: 64)

The intended readings of (1a)/(3a) are analogous to the *I*-reading of (8), which implies that they are analogous to the reading of the bound we in (6a). (10ab) shows the minimal contrast between we and they.

- (9) All men think they are the smartest person in the world.

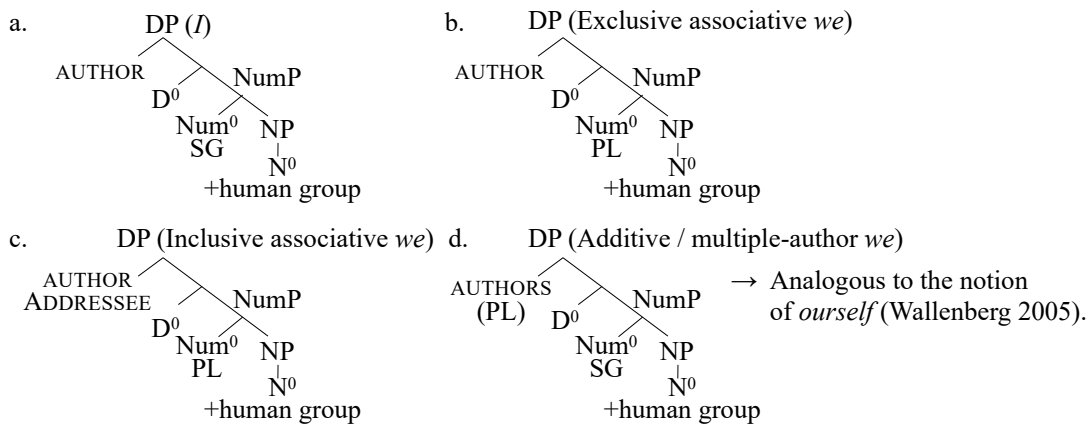


- (10) a. $\llbracket \text{the embedded } \underline{\text{we}} \text{ in (6a)} \rrbracket^C = \text{the authors of } C \text{ inclusive of the author of } c^*$
b. $\llbracket \text{the embedded } \underline{\text{they}} \text{ in (9)} \rrbracket^C = \text{the authors of } C \text{ exclusive of the author of } c^*$
(c^* stands for the context of the actual utterance.)

4. Indexical structures of bound plurals

Proposal: The author-reading of the bound pronoun *they* as in (9)/(10b) arises from its internal structure (11d), not from ϕ -features transmitted from its antecedent. The antecedent, *All men* (see (9)), does not have the author-reading but *they* does. For a sentence like *They all think they are the smartest person*, the first *they* lacks the author-reading but the second *they* is construed as the multiple-authors of the multiple contexts.

- (11)



The above varieties of structures for first-person pronouns build on Vassilieva's (2005, 2008) analysis of the associative plural *we* as in (11b). Let us first consider (11bc), which capture the associative plural nature of the first-person plurals; then we will extend the view to the multiple-author plurals.

- Associative plural structures involve two nominals as in (11b) for instance: one is an NP with non-descriptive [+human] group reference, which may be a singleton or non-singleton; the other is a Spec DP nominal, which describes the group by specifying its most salient member.
- The exclusive associative *we* has structure (11b) with the author as its most salient member. It represents *we* as ‘the author’s group’; the inclusive associative *we* -> (11c); and the singular *I* -> (11a).
- The singular *I* (= (11a)) also has a group denoting NP, which is a singleton with the author as its only member. Both singular and plural first-person pronouns quantify over sets of individuals.

Extending these notions, we propose that the bound dependent plural *they* in (1a)/(3a) as well as the bound *we* in (5a) bears the structure of the multiple-author *we* shown in (11d).

- (11d) represents a plurality of authors at Spec DP and a singleton group NP. -> Analogous to the reflexive *ourselves* in ‘...we just have to do what’s best for ourselves...’ (Wallenberg 2005).
- In the group reading of (1a) ($\forall x$ [man(x). x thinks that THEY are smart], the *we*-reading), *they* has structure (11b) (exclusive associative *we*).
- The partially (split) bound *they* in (2) has structure (11c) (inclusive associative *we*).

The core idea is that the plurality and the indexicality of the bound plural *they* are semantically interpreted due to its internal structure for both dependent plural pronouns and partially/split bound pronouns. (At odds with Déchaine&Wiltschko’s (2002) proposal that variable pronouns have a smaller structure (ϕ P); but in line with studies like Cable (2005) in assuming that bindability and indexicality are compatible.)

5. Implementation: Why third-person?

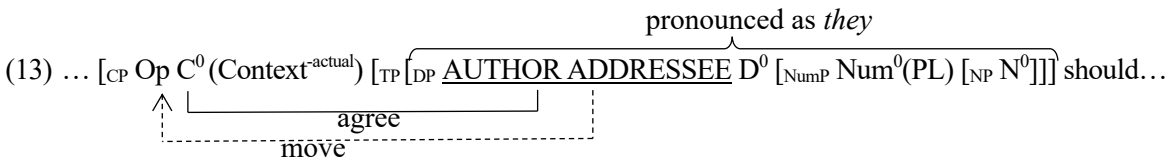
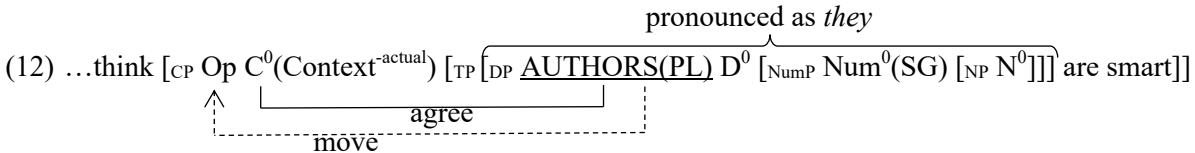
Why is the bound *they* with an author feature realized in third person?

- The author/addressee features are not equivalent to the first/second person features. We presuppose Late Insertion as in Halle and Marantz (1993); what is to be pronounced as *they* enters the derivation with one of the structures in (11) but at this point it lacks person (i.e. first, second or third).
- The author feature is defined as the first person when it is identified with the author of the actual utterance context. In elsewhere cases where it is identified with the author of a shifted nonactual context (i.e. an embedded attitude context), it falls under the third person in languages like English (but not in context-shifting languages such as Amharic and Zazaki; see Anand & Nevins 2004; Schlenker 2003).

A C(omplementizer) head in the lower CP domain is responsible for such identification processes.

- In canonical root environments, this C head hosts Context^{+actual} with a tuple of coordinates such as author_{c*}, addressee_{c*}, time_{c*} and place_{c*}, which define the *actual* context of utterance.
- In embedded attitude clauses, this C head hosts Context^{-actual} with the coordinates of a nonactual shifted context such as author_{c’}, addressee_{c’} and so on (see Bianchi 2003; Schlenker 2003; Sigurðsson 2010).
- The C head agrees with the Spec node of the subject DP and determines its person (nonindexical DPs are third person by default). Indexical DPs with an author Spec node (those in (11)) are morphologically realized in third person when they agree with the C head hosting Context^{-actual} (see Matsuda 2019).

The syntactic framework of (1a) (read as (1b)) can be exemplified as (12). The subject DP has structure (11d). (13) represents the derivation of (2); the partially bound *they* represents both the author and addressee at Spec DP as in (11c).



The null operator is presupposed for *de se/te* readings which seem obligatory for the relevant interpretations; λ -abstraction over the Spec DP node creates a property-denoting CP out of a proposition-denoting TP (see Chierchia 1990; Percus&Sauerland 2003; Matsuda 2019).

Indexical DPs are not constants but variables in that their semantic values are context-dependent. However, in the system above, the matrix argument(s) and the embedded subject are not bound to each other via the same variable index/indices. The system assures that their values covary by the matrix subject being the experiencer of an attitude (e.g. thought) and the embedded subject being the author of that attitude (1a)/(12); or by the matrix subject/object being the source/goal of the reported speech and the embedded subject being the author/addressee of the speech (2)/(13). Thus, ‘crossed’ readings are not allowed.

6. Support: Plural shifted indexical (Amharic)

LaTerza et al. (2014) semantically describes the Amharic plural indexical as involving a plurality of authors of a plurality of contexts. (14) is literally represented as *The candidates said WE will win*.

- (14) itʃʹtʃʹu-wotʃt-tu inn-aʃänf-all-än al-u
 candidate-PL-DEF 1PL-win.IPF-AUX-1PL say.PF-3PL
 ‘The candidates₁ said they₁ will win.’

7. Conclusions and remaining issues

Three major contentions of the present proposal:

- The plurality of the bound *they* as in (1a)/(2) are both semantically interpreted and syntactically represented.
- The target bound plurals have internal structures similar to those of first-person pronouns.
- Although these pronouns have a first-person-like structure, they are morphologically realized in third person in English via complementizer agreement.

Remaining issues:

- Is the dependent plural *they* obligatorily read *de se*?
- Do dependent plural and partial/split binding phenomena involve a set of indices as presupposed in previous semantic works including Heim (2008) and Sudo (2012, 2014)?
- Is Sudo’s (2012, 2014) choice function approach compatible with the present morphosyntactic approach?

One of the reviewers asked whether a [+human] feature is present with *they* in ‘The dogs said they were hungry.’ Our answer is *yes*. If the speaker of the utterance sees the dogs as bearers of mind comparable to human beings, *they* referring to dogs may be [+human].

References

- Anand, P & A. Nevins (2004) “Shifty Operators in Changing Contexts,” *SALT* 14, 20–37. / Bianchi, V. (2003) “On Finiteness as Logophoric Anchoring,” *Temps et Point de Vue*, 213–246 / Boas, F. (1911) “Introduction,” *Handbook of American Indian Languages* Vol. 1, 1–83. / Cable, S. (2005) “Binding Local Person Pronouns without Semantically Empty Features,” Ms., MIT. / Chierchia, G. (1990) “Anaphora and Attitude De Se,” *Semantics and Contextual Expression*, 1–32. / Cysouw, M. (2003) *The Paradigmatic Structure of Person Marking*. / Déchaine, R-M. & M. Wiltschko (2002) “Decomposing Pronouns,” *LI* 33, 409–442. / Halle, M. & A. Marantz (1993) “Distributed Morphology,” *The View from Building 20*, 111–176. / Harbour, D. (2016) *Impossible Persons*. / Harley, H. & E. Ritter (2002) “Person and Number in Pronouns: A Feature-Geometric Analysis,” *Language* 78, 482–526. / Heim, I. (2008) “Features on Bound Pronouns,” *Phi-Theory*, 35–56. / Heim, I., H. Lasnik & R. May (1991) “Reciprocity and Plurality,” *LI* 22, 63–101. / Higginbotham, J. (1985) “On Semantics,” *LI* 16, 547–593. / Kratzer, A. (1998) “More Structural Analogies Between Pronouns and Tenses,” *SALT* 8, 92–110. / Kratzer, A. (2009) “Making a Pronoun: Fake Indexicals as Windows into the Properties of Pronouns,” *LI* 40, 187–237. / LaTerza, C., D. Chacón, J. Johnson, R. Kramer & M. Rood (2014) “Plural Shifted Indexicals are Plural: Evidence from Amharic,” *NELS* 44, 259–269. / Matsuda, A. (2019) *Person in Partial Control*, Doctoral dissertation, Ochanomizu University. / Partee, B. (1989) “Binding Implicit Variables in Quantified Contexts,” *CLS* 25, 342–356. / Percus, O. & U. Sauerland (2003) “Pronoun Movement in Dream Reports,” *NELS* 33, 1–19. / Rullmann, H. (2003) “Bound-variable Pronouns and the Semantics of Number,” *WECOL* 2002, 243–254. / Rullmann, H. (2004) “First and Second Person Pronouns as Bound Variables,” *LI* 35, 159–168. / Schlenker, P. (2003) “A Plea for Monsters,” *Linguistics and Philosophy* 26, 29–120. / Sigurðsson, H. A. (2010) “On EPP Effects,” *Studia Linguistica* 64, 159–189. / Sudo, Y. (2012) *On the Semantics of Phi Features on Pronouns*, Doctoral dissertation, MIT. / Sudo, Y. (2014) “Dependent Plural Pronouns with Skolemized Choice Functions,” *Natural Language Semantics* 22, 265–297. / Vassilieva, M. (2005) *Associative and Pronominal Plurality*, Doctoral dissertation, SUNY Stony Brook. / Vassilieva, M. (2008) “A Syntactic Analysis of Nominal and Pronominal Associative Plurals,” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 14, 339–352. / Wallenberg, J. C. (2005) “A Story of the American -self: A Case Study in Morphological Variation,” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 11, 321–334.

*This project is funded by JSPS KAKENHI (Grant-in-Aid for Early-Career Scientists: 20K13062).

本発表の目的：借用語動詞 persuade の ModE における受容過程を観察し、そこに見られる特徴を明らかにする。その特徴が特異的 (PE の視点・借用元言語視点) であることを示す。

1. はじめに

persuade (「駆り立て」の動詞) —意味の類似した「命令・許可」の動詞との比較

- (1) a. John persuaded Tom to leave immediately.
b. John persuaded [Tom] [PRO to leave immediately]
- (2) a. John ordered Tom to leave immediately.
b. John ordered [Tom] [PRO to leave immediately]
- (3) a. John ordered the prisoner to be transferred to the prison hospital.
b. John ordered [the prisoner to be transferred to the prison hospital] ((2), (3) Chiba (1985))
- (4) a. *He persuaded the Town Hall to be demolished.
b. He persuaded [the Town Hall to be demolished] (Los (2005:251))
- (5) a. *I encouraged there to be a discussion. (Mair (1990:163))
b. I encouraged [there to be a discussion]
- (6) He persuaded John {to see a doctor / into going to see the doctor / *to a doctor}. (Los (ibid.))
「駆り立て」の動詞の主語以外の2つの項は「主題」, 「着点」。「命令・許可」の動詞は「受領者」と「主題」。
「命令・許可」の動詞は二重目的語構文が可能である。

「駆り立て」の動詞の歴史 — 「命令・許可」の動詞との比較

OE (Los (2005))

- (7) On hwilcum godum tihst þu us to gelyfenne? <ÆLS (George) 148>
in which gods urgest thou us_{ACC} to believe_{TO-INF}
'Which gods do you urge us to believe in?' (Los (2005:53)) (ACC=accusative, TO-INF=to infinitive)
- (8) a. ða ðincg ðe ic bebeode eow to gehealdenne <ÆCHom II, 21 181.47>
those things that I order you_{DAT} to hold
'those things that I order you to hold'
- b. Seocum mannum, and cildum, we ne bebeodan nan fasten. <HomM 7 23>
Sick man_{DAT}, and children_{DAT}, we not order no fast
'We do not order sick people and children to fast.' (Los (2005:54)) (DAT=dative)

本発表の目的

Persuade が借用された当時(初期 ModE)の調査・分析を行う。具体的には、OED2の引用例をデータベースとして資料を収集し、その結果を検討する。

2. 資料

2.1. 借用元言語（ラテン語）（本節の引用例は全て Lewis and Short (1879)（以下 *LS*）から）

persuadeo (< *persuade*)

(9) a. “to bring over by talking, to convince of the truth of any thing, to persuade”

b. “to prompt, induce, prevail upon, persuade to do any thing”

(10) *mihi persuaderi numquam potuit, animos ... vivere, etc.*

meDAT be-persuaded never could soul to-be-alive

‘I could never be persuaded that soul can be alive’

(11) *persuasit ei tyrannidis finem facere*

persuaded himDAT tyranny to end

‘he persuaded him to end tyranny’

(12) *numquam tamen haec felicitas illi persuasit neglegentiam*

never still this fortune himDAT persuaded negligenceACC

‘This fortune still never persuaded him of negligence’

2.2. 借用先言語（英語）（本節の引用例は全て *OED2* から）

(13) a. c1595 CAPT. WYATT R. *Dudley’s Voy. W. Ind.* (Hakl. Soc.) 9 Wee had sight of a saile..the which *wee weare perswaded was one of our consorts.*

b. 1526 TINDALE *Matt.* xxvii. 20 The chefe preesteshad parswaded the people that they shulde axe Barrabas.

(14) 1553 KENNEDY *Compend. Tract.* in *Wodrow Soc. Misc.* (1844) 105 The Jewis *perswaded circumcisioun to be necessare with Baptime.*

(15) a1555 RIDLEY *Lament. Churche* (1566) B viij, They *are perswaded it to be truth.*

(16) a. 1531 ELYOT *Gov.* ii. xiv. (1880) II. 185 ...to *persuade the reders to enserche ...vigilauntly.*

b. 1580 E. KNIGHT *Tryall of Truth* 30 (T.) Either the parties *are persuaded* by friends, or by their lawyers, *to put the matter in comprymise.*

c. 1675 WOOD *Life* (O.H.S.) II. 332, I persuaded the society to set it above the arches, but I was not then heard.

(17) 1593 SHAKES. *3 Hen. VI*, III. iii. 176 ... to *perswade me Patience?*

(18) a. c1560 WHITEHORNE *Arte Warre* (1573) 65 To *perswade* or to diswade *a thing vnto fewe* is verye easie.

b. a1643 LD. FALKLAND, etc. *Infallibility* (1646) 97 *The grossest errours*, if they..be but new, may be *perswaded to the multitude.*

c. 1588 PARKE tr. *Mendoza’s Hist. China* 128 There was none that better coulde..*perswade with His Majestie the great importance of that ambassage.*

(19) 1528 G. DE CASSALIS, etc. Let. Wolsey in *Strype Eccl. Mem.* I. App. xxiii. 49 It hath been *persuaded to the Pope,..that there is no way to delyver Italy of war, ...*

(20) a. 1535 CRANMER *Let. to Cromwell in Misc. Writ.* (Parker Soc.) II. 304, I cannot *persuade with myself that he so much tendereth the king’s cause as he doth his own.*

- b. 1651 R. VAUGHAN in *Ussher's Lett.* (1686) 561 This Evidence doth *perswade with me, that Cadwalader went to Rome far before Anno 680.*
- c. c1540 tr. *Pol. Verg. Eng. Hist.* (Camden) I. 161 Quendreda..wente abowte to persuade with her husbände that he should murthere Ethelbertus.
- d. 1603 HOLLAND *Plutarch's Mor.* 406 His friends perswaded with him that voluntarily, he would..give over this violent and lordly rule.
- (21) a. 1555 EDEN *Decades* 93 To *persuade hym of the..munificence..of owre men.*
- b. 1798 FERRIAR *Illustr. Sterne* i. 9 The offensive details..could *persuade us of the extreme corruption of manners.*
- (22) a. 1538 STARKEY *England* I. ii. 29 Yf hyt [i.e. the will] be *persuadyd that gud ys yl, and yl gud.*
- b. 1656 RIDGLEY *Pract. Physick.* 44 Physicians *perswade that..the Artery shall be cut...*
- c. 1577 EARL OF LEICESTER in *Ellis Orig. Lett. Ser. I. II.* 373 We all do what we can, to *persuade from any progress at all.*
- (23) a. 1565 T. STAPLETON *Fortr. Faith* 59 S. Augustin *persuadeth with him to leaue ...*
- b. 1637 HEYLIN *Brief Answ. Burton* 61 His Doctors..*perswaded with him..to vent that humour.*
- (24) a. 1560 J. DAUS tr. *Sleidane's Comm.* 408 b, Ambassadors... might ...*perswade them to peace.*
- b. c1637 A. WRIGHT in *Hist. Papers* (Roxb.) I. Introd. 6 The villanous humour of Jago when he *persuades Othello to his jealousy.*
- (25) 1865 DICKENS *Mut. Fr.* I. vi, Be *persuaded into being respectable and happy.*
- (26) a. 1585 T. WASHINGTON tr. *Nicholay's Voy.* I. xii. 14 ...to *perswade me from it.*
- b. 1724 DE FOE *Mem. Cavalier* (1840) 264, I had *persuaded him off that.*
- c. a1774 GOLDSM. *Hist. Greece* I. 381 To *persuade the young and old against too much love...*
- (27) a. a1657 R. LOVEDAY *Lett.* (1663) 22 The neezing-powder I take constantly, but have much adoe to *perswade it to make me neeze.*
- b. 1897 TIVOLI (H. W. Bleakley) *Short Innings* v. 76 A huge piece of cake went down the wrong throat, and Carrots had to belabour him lustily to *persuade it to take the right direction.*
- c. PE: *The engine was persuaded to run.* 「エンジンはやつとのこと動いた」 (*RHD2*, s.v. *persuade*)
- (28) 1596 SHAKES. *Merch. V. III.* ii. 283 The Magnificoes ...haue all *perswaded with him.*
- (29) 1636 E. DACRES tr. *Machiavel's Disc. Livy* I. 235 A good man may easily have the meanes to *perswade with a licentious and tumultuous people...*
- (30) 1553 T. WILSON *Rhet.* (1580) Pref., These..*perswaded with them what was good, what was bad, and was gainfull for mankinde.*

3. 考察

3.1. *LS*に見られるラテン語法と *ModE* の語法の比較・検討

L との対応が想定できる *ModE* 語法, L との対応が想定し難いと考えられる *ModE* 語法

3.2. *Persuade* と類義の L 借用語 *dissuade* について

(31) “to advise against, dissuade, oppose by argument, resist a proposition”

(32) ... *quam* ego *dissuasi*

whichACC I dissuaded

‘which I opposed’

(33) cum praesertim (senatum) de captivis dissuasurus esset,

when especially about captives dissuading be

‘especially when he was going to oppose about captives’

(34) a. ... non censuerit captivos remittendos, verum etiam dissuaserit,

not resolved captives sent-back but also opposed

‘... not resolved that captives be sent back but also opposed to their being sent back’

b. societatem cum rege Pyrrho inire dissuasit

alliance with king Pyrrho to-enter dissuaded

‘advised against entering alliance with king Pyrrho’

(35) dissuasuri, ne hanc legem accipiat

dissuading but this law you-accept

‘persuading you not to accept this law’

(36) a1577 Sir T. SMITH *Commw.* ii. ii. (1584) 40 The speaker hath no voice in the house, nor they will not suffer him to speake in any bill to mooue or *disswade* it.

(37) a. c1540 POL. VERG. *Eng. Hist.* (Camden) 118 The earle had *diswadyd the king not to place his syster Margaret in maryage unto Charles.*

b. 1605 CAMDEN *Rem.* (1637) 246 Some *disswaded him to hunt that day; but he resolved to the contrary.*

(38) a. 1559 *Homilies* i. *Adultery* ii. (1859) 122 Holy Scripture *disswadeth...from doing that... sinne.*

b. 1598 BARRET *Theor. Warres* ii. i. 29 To *disswade from bad factions.*

(39) 1555 EDEN *Decades* Sect. i., Peter Martyr’s Dedication (Arb. 63) Ascanius..*dissuaded me from my purpose.* But seeing that I was fully resolved to departe..required me to wryte vnto hym.

(40) 1680 HEAD & KIRKMAN *Eng. Rogue* iv. 210 Nothing could *perswade* him *but* that he was cheated of his Money, ...

4. まとめ

主要参考文献

Karttunen, Lauri (1971) “Implicative Verbs,” *Language* 47, 340-358.

Lewis, Charlton T. and Charles Short (1879) *A Latin Dictionary*, Clarendon Press, Clarendon. (Perseus Digital Library (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/>)にて利用)。

Los, Bettelou (2005) *The Rise of the To-Infinitive*, Oxford University Press, Oxford.

Simpson, John A. and Edmund S. C. Weiner (eds.) (1989) *The Oxford English Dictionary*, 2nd edition on CD-ROM Version 1.14 (1994), Clarendon Press, Oxford. [OED2]

小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集委員会 (編) (1993)『ランダムハウス英和大辞典 第二版』小学館, 東京。[RHD2]

対格主語動名詞の史的発達についての一考察 (A Consideration of the Historical Development of Gerunds with Accusative Subjects)

平田 拓也 (HIRATA Takuya)
名古屋大学大学院 (Nagoya University)

1. はじめに

- (1) a. I was dismayed at the editor rejecting my article. (Declerck (1991: 495))
b. I wouldn't like the idea of you travelling to some exotic country on your own. (Declerck (1991: 495))

● 本発表の主張

- i. 対格主語動名詞の頻度は 1670 年代に入り上昇し始めた。
- ii. この頻度の上昇の要因は動詞的動名詞の構造が vP から TP へと拡張したことにより、動名詞内部での主語への格付与が可能になったことに起因する。

2. データ

- (2) 近代英語における対格主語動名詞の生起数および 50 万語あたりの頻度
(PPCEME/PPCMBE2)

	1500-1569	1570-1639	1640-1700	1700-1769	1770-1839	1840-1914
生起数	5	3	20	34	65	51
頻度	4.4	2.4	19.2	20.3	35.1	24.5

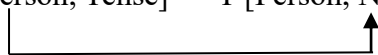
- (3) 1640-1700 年の生起数におけるテキストの年代ごとの内訳

テキストの年代	1640s	1650s	1660s	1670s	1680s	1690s	
生起数	1	1	1	6	7	4	合計 20
テキスト数	1	1	1	5	3	3	合計 14

- (4) To this I answered, That if Appetites being Natural, was an Argument for the indulging them [...] (BURNETROC-E3-P1,39.57)
- (5) [...] I must entirely declare against such Children losing their Time about that Language; (WEBSTER-1718-1,15.51)

- (6) and, after some Contest, sent Messengers to know his Pleasure, who returning, positively forbad him going to Mexico, (COOKE1-1712-1,1,418.27)
- (7) Which word by way of terror sometime used, by them not having the Spirit, extend it to their Non plus ultra, [...] (1647 E. Douglas Mystery Gen. Redemption 13 / OED Online)
- (8) and for that oftentimes I am driven by him falsely reporting my words, [...] (EEBO/A02635 1567)
- (9) and left off making any further inquirie; (COVERTE-E2-H,14.53)
- (10) I hope they will pardon me in not writing, (EHATTON2-E3-P2,2,153.15)
- (11) Besides these, they would have every day some practice of writing English headily, (BRINSLEY-E2-P1,23.216)
- (12) Epicurus and his scholars of old... make this an argument of there being no God. (1657-83 John Evelyn, Hist, Religion, I, 79/ Visser (1966: 1185))
- (13) that is, in certainly discovering the meaning of the Holy Ghost (EEBO/ A41608 1685)

3. 提案

- (14) a. T は解釈不可能な数素性を持つ。
 b. 解釈不可能な数素性のみを持つ不完全な T も一致により対格の付与が可能である。
 c. 接辞-ing は解釈可能な ϕ 素性と解釈不可能な格素性を持つ。
- (15) a. C [Person, Tense] ...T [Number]
 b. C [~~Person, Tense~~] ...T [Person, Number, Tense] (Arano (2014: 25))
- 

*矢印は C から T への素性継承を表す。

- (16) The printer works, but the copier doesn't seem to. (Wurmbrand (2012: 4))

(17) 1670 年代以前の動詞的動名詞の構造

[_{VP} PRO [_{iφ}] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]

(18) 1670 年代以降の動詞的動名詞の構造

[_{TP} PRO [_{iφ}] [_{T'} T [_{EPP}, uNum] [_{VP} *t*PRO [_{iφ}] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]]]

(19) 1670 年代以降の対格主語動名詞の構造

[_{TP} DP [_{iφ}, uCase] [_{T'} T [_{EPP}, uNum] [_{VP} *t*DP [_{iφ}, uCase] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]]]

(20) ...I must entirely declare [against such Children losing their Time about that Language;]

(WEBSTER-1718-1,15.51)

(21) a. [_{TP} such children [_{iφ}, ACC] [_{T'} T [_{EPP}, uNum] [_{VP} *t*_{such children} [_{iφ}, uCase] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]]]

b. [_{PP} against [_{uφ}] [_{TP} such children [_{iφ}, ACC] [_{T'} T [_{EPP}, ~~uNum~~] [_{VP} *t*_{such children} [_{iφ}, ~~uCase~~] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, ACC] [_{VP} ...*t*_V...]]]]]]]

*矢印は一致を示し、取り消し線は素性の値付けと削除を示す。

(22) “The default case forms of a language are those that are used to spell out nominal expressions (e.g., DPs) that are not associated with any case assigned feature or otherwise determined by syntactic mechanisms.”
(Schütze (2001: 206))

(23) 1670 年代以前の対格主語動名詞の構造

a. [_{VP} DP [_{iφ}] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]

b. [_{VP} DP [_{iφ}, uCase] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]

(24) (23a)の構造の下での、外部要素 X との一致

[_{XP} X [_{uφ}] [_{VP} DP [_{iφ}] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]]]

(25) (23b)の構造の下での、外部要素 X との一致

[_{XP} X [_{uφ}] [_{VP} DP [_{iφ}, uCase] [_{v'} [_v V + ing [_{iφ}, uCase]] [_{VP} ...*t*_V...]]]]]

4. 結語

参考文献

- Arano, Akihiko (2014) “Two Types of Main Verb Inversion,” *English Linguistics* 22, 22-44.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Lobeck, Anne (1990) “Functional Heads as Proper Governors,” *NELS* 20, 348–362.
- Schütze, Carson (2001) “On the Nature of Default Case,” *Syntax* 4, 205-238.
- Sugiura, Katsuya (2014) *A Synchronic and Diachronic Study of Gerundive and Participial Constructions in English*, Doctoral Dissertation, Nagoya University.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』 開拓社, 東京.
- Visser, Fredericus, Theodorus (1966) *An Historical Syntax of the English Language*, Part II, E.J. Brill, Leiden.
- Wurmbrand, Susi (2012) “Tense and Aspect in English Infinitives,” ms., University of Connecticut.

コーパス

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Ariel Diertani (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English, Second Edition* (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Andrew, Hardie (2008) *Early English Books Online (V3)* (EEBO (V3)), Lancaster University.

辞書

- Oxford English Dictionary* (OED) Online, Oxford University Press, Oxford.

引用句構文の通時的変化に関する一考察 (A Consideration of the Diachronic Change in Quotative Constructions)

小林 亮哉 (KOBAYASHI Ryoya)
名古屋大学大学院 (Nagoya University)

1. 導入

- (1) a. “We haven’t had that spirit here since 1969,” the captain said.
b. “We haven’t had that spirit here since 1969,” said the captain.
(Gyoda (1999: 276))
- (2) a. Bidap ge her, he cwæð,
Wait you here, he said
“‘You wait here,” he said.’ (coverhomE,HomS_24.1_[Scragg]:65.31)
- b. Gehyr ðu, mann, cwæð se halga Ysodorus,
hear you man said the holy Isidore
“‘You hear, man,” said the saint Isidore.’
(coverhom,HomU_7_[ScraggVerc_22]:157.2956)

2. コーパス調査

表 1: OE-初期 ME の QC の生起数 (名詞句) 表 2: OE-初期 ME の QC の生起数 (代名詞)

	OE1/2	OE3	OE4	ME1	ME2
SV	0	0	0	0	0
VS	1	3	1	16	5

	OE1/2	OE3	OE4	ME1	ME2
SV	2	2	3	10	0
VS	0	4	1	6	0

- (3) a. Iacob, cwæð he.
Jacob, said he.
“‘Jacob,” said he.’ (cootest,Gen:32.27.1336)
- b. Ongitaþ, mine þa leofestan bearn, cwæð Sanctus Isodorus,
Consider, my the dearest children said Saint Isidore
“‘Consider, my dearest children,” said Saint Isidore.’
(coverhom,HomU_7_[ScraggVerc_22]: 20.2824)
- (4) a. Iher me dohter he seið.
hear me daughter he said
“‘Listen to me, daughter,” he said.’ (CMHALL, 127.9)
- b. ‘Where is he?’ said the kyng.
Where is he, said the king
“‘Where is he,” said the king.’ (CMMALORY, 3.64)

表 3: 後期 ME 以降の QC の生起数 (名詞句)

	ME3	ME4	EModE1	EModE2	EModE3	LModE1	LModE2	LModE3
SV	0	1	1	0	0	0	0	8
VS	16	205	46	98	18	12	71	44

表 4: 後期 ME 以降の QC の生起数 (代名詞句)

	ME3	ME4	EModE1	EModE2	EModE3	LModE1	LModE2	LModE3
SV	1	5	1	6	4	0	11	24
VS	48	7	91	90	9	2	58	18

- (5) a. “Per haue I ben,” seyde þe preste,
There haue I been said the priest
““I have been there,” said the priest.” (CMKEMPE,58.1300)
- b. ‘Now make you redy,’ said Merlyn.
Now make you ready said Merly
““Make you ready now,” said Merlyn.” (CMMALORY,4.76)
- (6) a. But only he would be mayster of his horsse, the Scripture sayeth,
(LATIMER-E1-H,32L.240)
- b. Are you my uncle? sayes Will. (ARMIN-E2-H,43.304)
- (7) a. ‘Jump in,’ Fleetwood said to his man. (MEREDITH-1895,19,162.648)
- b. “He must be a first-rater,” said Sam. (DICKENS-1837,546.56)

3. QCにおける動詞の意味の希薄化と動詞移動

*Gyoda (1999)

・QCの動詞は助動詞 have や be と同様に意味的に軽い要素であるので、Tへ移動可能。

*内田(1979)

・QCには[say+α]の意味を含意する動詞が現れ、2つのタイプに分類される。

→ ① R1 (動詞が[say+α]の意味を表す。) ② R2 (動詞がαの意味のみを表す。)

表 4: QC に現れる動詞の具体例

R1	answer, declare, demand, explain, insist, promise, recommend, suggest, whisper, etc.
R2	burp, giggle, groan, growl, laugh, shriek, sigh, sing, sob, weep, etc.

- (8) a. He giggled and said, “Cochon.”
b. *He giggled, “Cochon.” (内田 (1979: 24))
- (9) a. “He worked hard,” Madame Volet said and giggled.
b. “He worked hard,” Madame Volet giggled. (内田 (1979: 24))

表 5: QC に現れる動詞 (時代区分別)

OE	cweþan (say), secgan (say)
ME	seien (say), quethen (quote), crien (cry)
EModE	say, quoth, cry, answer, tell, reply
LModE	say, cry, answer, tell, reply, inquire, interpose, add, ask, sigh, exclaim, explain, murmur, repeat, resume, observe, rejoin, venture, whisper ... etc.

- (10) a. “You see how these fellows drink, and smoke, and roar,” replied
Mr Pickwick. (DICKENS-1837,547.72)
b. “I only wish she could help looking like a girl of seventeen,” sighed
Mrs. Curtis. (YONGE-1865,172.348)
c. “This comes of being the youngest of the family,” observed Colin
meditatively. (YONGE-1865,177.485)

4. QC の派生

(11) *OE - Ealy ME*

“Quote” + Verb + Nominal Subject.

- a. [_v*P Subj_[iφ] V*_[EF] [VP V Quote]]
b. [CP C [TP Subj_[iφ] T_{[uφ][EPP]} [_v*P t_{Quote} [_v*P t_{subj} v*+V_[EF] [VP tV t_{Quote}]]]]
c. [CP Quote V_[EF] [TP Subj_[iφ] tV_{[uφ][EPP]} [_v*P t_{Quote} [_v*P t_{subj} tV_[EF] [VP tV t_{Quote}]]]]

(12) “Quote” + Pronominal Subject + Verb.

- a. [CP Quote Pro-V_[EF] [TP t_{Subj}_[iφ] tV_{[uφ][EPP]} [_v*P t_{Quote} [_v*P t_{subj} tV_[EF] [VP tV t_{Quote}]]]]
“Quote” + Verb + Pronominal Subject.
b. [CP Quote V-Pro_[EF] [TP t_{Subj} [iφ] tV_{[uφ][EPP]} [_v*P t_{Quote} [_v*P t_{subj} tV_[EF] [VP tV t_{Quote}]]]]

(13) *Late ME - EModE*

“Quote” + Verb + Subject.

- a. [_v*P Subj_[iφ] V_[EF] [VP tV Quote]]
b. [CP C_[EF] [TP V_{[uφ][EPP]} [_v*P t_{Quote} [_v*P Subj tV_[EF] [VP tV t_{Quote}]]]]
c. [CP Quote C_[EF] [TP V_{[uφ][EPP]} [_v*P t_{Quote} [_v*P Subj tV_[EF] [VP tV t_{Quote}]]]]

- (14) *LModE - PDE* (SV)
- [_{CP} Quote C_[EF] [_{TP} Subj_[i0] V_{[uP][EPP]} [_{v*P} t_{Quote} [_{v*P} Subj_[i0] tV_[EF] [_{VP} tV t_{Quote}]]]]]
- (15) *LModE - PDE* (VS)
- [_{CP} Quote C_[EF] [_{TP} Subj_[i0] V_{[uP][EPP]} [_{v*P} t_{Quote} [_{v*P} Subj_[i0] tV_[EF] [_{VP} tV t_{Quote}]]]]]
- (16) a. ??“Don’t snore,” pleaded they.
b. ??“I’ve lost my key,” said he. (Collins and Branigan (1997: 7))

5. 結語

References (Selected)

- Artemis Alexiadou and Elena Anagnostopoulou** (1998) "Parameterizing AGR: Word Order, V-movement, and EPP Checking," *Natural Language and Linguistic Theory* 16, 491–539. / **Bobaljik, Jonathan D.** (2002) "A-chains at the PF Interface: Copies and 'Covert' Movement," *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 197–267. / **Collins, Chris and Phil Branigan** (1997) "Quotative Inversion," *Natural Language & Linguistic Theory* 15, 1–41. / **Chomsky, Noam** (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA. / **Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff** (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge. / **Gyoda, Isamu** (1999) "On the Quotative Construction in English: A Minimalist Account," *English Linguistics* 16, 275–302. / **Haeberli, Eric and Tabea Ihsane** (2016) "Revisiting the Loss of Verb Movement in the History of English," *Natural Language and Linguistic Theory* 34, 497–542. / **Kemenade, Ans van** (1997) "V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English," in Ans. van Kemenade and Nigel. Vincent (eds.), *Parameters of Morphosyntactic Change*, 297–325, Cambridge University Press, Cambridge. / **松原史典** (2019) 「引用句倒置の認可条件について」日本英文学会第91回大会 シンポジウム「倒置現象をめぐる」. / **内田聖二** (1979) 「直接話法と伝達動詞」『語法研究と英語教育』第1号, 22–34.

Corpora

- Kroch, Anthony, and Ann Taylor** (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition* (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / **Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani** (2010) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE), University of Pennsylvania, Philadelphia. / **Kroch, Anthony and Beatrice Santorini** (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia. / **Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Freank Beths** (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.

英語における主格ゼロ関係節の通時的発達について
(On the Diachronic Development of Subject Zero Relatives in English)

内田 脩平 (UCHIDA Shuhei)
名古屋大学大学院 (Nagoya University)

1. はじめに

- (1) I met the woman *(that/who) saw John. (Douglas (2017: 1))
- (2) a. & þæs oðres þone mæstan dæl hi geridon butan þam cyng
And the other's the most dale they reached against the king
Ælfrede [little werede unyðelice æfter wudum for.]
Alfred little observer uneasily after woods went
'and they reached the other's best valley against King Alfred who went
easily with little observer behind woods'
(cochronE,ChronE_[Plummer]:878.1.1209)
- b. ich knewe hym in þat trauail [is to-fore me]
I knew him in that hard work is prior me
'I knew him engaging in that harder work than me'
(CMEARLPS,87.3828)

2. 英語史における **pro** と **SZR**

- (3) Forþa ic nu wille geornlice to Gode cleopian.pro Ongan þa giddien
therefore I now want earnestly to God speak began then sing
'Therefore, I now want to speak to God earnestly. Then **he** began to sing.'
(Alfred, Boethius 9.28–9/Gelderen (2000: 131))
- (4) a. **pro** の生産性はテキストによって異なる。
b. **pro** は従属節よりも主節において高い頻度で観察される。
c. (古英語に関して)**pro** の解釈に関する人称分離現象が認められる。
(cf. 縄田 (2012: 102-103))
- (5) a. There was something broke in him.
b. Here's the one'll get it for you.
c. We had a client came in about two weeks ago. (Erdmann (1980: 149))
- (6) soðlice nu þu on innoðe geeacnast.and sunu censt and his naman
Truly now you in womb conceive and son beget and his name
hælend genemnest; **Se** byð mære and þæs hehstan sunu genemned.
savior name **who/he** is great and of the Highest Son called

‘Truly, you will become pregnant and give birth to a son, and you will name him Jesus. He will be a great and will be called the Son of the Highest.’

(Gospel, Luke 1. 31-32/Hosaka (2010: 66))

表 1：焦点要素に後続しない SZR の生起状況

	O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4
SZR	0	9	18	3	8	2	3	9
主格関係節	5	272	206	61	29	48	155	487
SZR 割合	0	3.3	8.7	4.9	27.6	4.2	1.9	1.8

E1	E2	E3	L1	L2	L3
8	9	8	1	0	1
1135	1745	1655	1034	1352	944
0.7	0.5	0.5	0.1	0	0.1

※不変化詞 *þe*、補文標識 *that* によって導かれる関係節を除く。

※*se* 関係節は定形動詞最終の語順のみを数値に含める。

- (7) a. & ðu meahþ þe unyð onberan þæs [ðe onbecymeð]
 and you may yourself uneasily on-bear that you accesses
 ‘and you may hold on that yourself uneasily, which accesses you.’
 (codicts, Prov_1_[Cox]:1.70.129)
- b. Soðfeste [men heom kepten on nihtes;] sæidon,
 genuine men them care about on nights said
 ‘genuine men who care about them at night said that...’
 (CMPETERB, 50.245)

表 2：焦点要素に後続する SZR の生起状況

	O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4
SZR	0	1	0	0	0	0	6	23
主格関係節	0	6	4	3	0	6	24	85
SZR 割合	0	16.7	0	0	0	0	25.0	27.1

E1	E2	E3	L1	L2	L3
28	44	64	7	10	5
227	434	430	185	252	213
12.3	10.1	14.9	3.8	4.0	2.3

- (8) a. For ther is a versifiour [seith that ‘the ydel man excuseth
For there is a poet says that ‘the idle man excuses
hym in winter by cause of...]
him in winter because of...
‘for there is a poet who says that the idle man excuses him in winter
because of...’ (CMCTMELI,233.C2.639)
- b. There was another of my neighbours [had his wife much troubled]
(GIFFORD-E2-H,B1V.96)

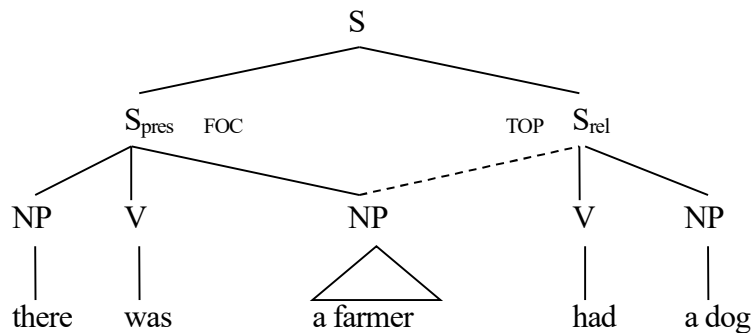
表 3: pro と SZR を認可するテキスト

	Pro	SZR
テキスト	Ancrene Riwe, Hali Meidhad, St. Juliana, St. Katherine, The Lambeth Homilies, The Peterborough Chronicle, Sawles Warde, Trinity Homilies, Kentish Sermons	Ancrene Riwe, St. Katherine, The Lambeth Homilies, The Peterborough Chronicle, The Ormulum, Vices and Virtues, Trinity Homilies, Ayenbite of Inwyte

3. 分析

3.1. 焦点要素に後続する SZR

- (9) a. There was a farmer had a dog.



(Lambrecht (1988: 335))

- b. [CP [TP there was [NP a farmer_i (Focus)]] [TP [NP a farmer_i (Topic)] had a dog]]

3.2. 純粋な SZR

- (10) [CP C [TP Subj_[φ] T_[EPP, uφ] ...] [TP pro_[φ] T_[EPP, uφ]...]]
- (11) buton ge me secgan þæt [[þæt soð is be þisum,
Without you me said that that true is by this
Without you said that, which is true about this (coaelhom, ÆHom_22:378.3503)
- (12) I met the woman [CP Op_i that [TP t_i saw John]]
- (13) a. I met the man φ Mary saw
b. [CP C [TP I_[φ] T_[EPP, uφ] [DP the man] [CP Op_i C [TP Mary T_[EPP, uφ] t_i]]]]]

4. 結語

参考文献

- Breivik, Leiv E. (1983) *Existential There: A Synchronic and Diachronic Study*, Department of English, Bergen University.
- Douglas, Jamie (2017) “Unifying the *That*-Trace and Anti-*That*-Trace Effects,” *Glossa: A Journal of General Linguistics* 2, 1-28.
- Erdmann, Peter (1980) “On the History of Subject Contact-Clauses in English,” *Folia Linguistica* 1, 139-170.
- Gelderen, Elly van (2000) *A History of English Reflexive Pronouns: Person, Self, and Interpretability*, John Benjamins, Amsterdam.
- Hosaka, Michio (2010) “The Rise of the Complementizer *That* in the history of English,” *Language Change Variation from Old English to Late Modern English*, ed. by Merja Kyto, John Scahill and Harumi Tanabe, 59-78, Peter Lang, Berlin.
- Lambrecht, Knud (1988) “There Was a Farmer Had a Dog: Syntactic Amalgams Revisited,” *BLS* 14, 319-339.
- 中澤紀子 (2006) 「There 接触節と関係代名詞の顕在化: ナーサリー・ライムの場合」『近代英語研究』第 22 号, 71-91.
- 縄田裕幸 (2012) 「古英語・中英語における「空主語」の認可と消失—話題卓立言語から主語卓立言語へ—」『島根大学教育学部紀要』40, 101-110.
- Walkden, George (2013) “Null Subjects in Old English,” *Language Variation and Change*, 25, 155-178.

コーパス

- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2010) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, York.

アメリカ英語における *fixing to* の発達^{*1} (The Development of *Fixing to* in American English)

渡辺 拓人 (WATANABE Takuto)
関西学院大学 (Kwansei Gakuin University)

1 導入

● *FIXING TO* の概観^{*2}

由来 南部アメリカ英語。

拡大・分布 Bailey et al. (1993)—オクラホマ州の調査。若い世代や都市部での使用拡大。Gilman (1994: 449); Peters (2004: 209)—アメリカ英語の一般的傾向として、南部方言以外への拡大。Staub and Zentz (2017)—他方言に拡大しているとはいえ、南部で特に容認性が高い。

用法の特徴 Ching (1987)—インフォーマント調査。不定詞で表される行為の実現までわずかな遅れがある、その実現までに何らかの準備的行動が伴う、不定詞部の解釈は瞬間的であり継続的ではない、等々。

● *FIXING TO* の通史

起源 Smith (2009); Myers (2014)—「意思を定める」の *fix* ↔ OED (s.v. *fix* v. 16.a.); DARE (s.v. *fix* v 3)—「準備する」の *fix*

形式 Myers (2014)—初期近代の *be fixed to do/upon doing* といった「意思」や「未来」のニュアンスを含んだ形式、18 世紀の *fix for doing/to do* といった形式を経て、19 世紀の南部アメリカ英語での *FIXING TO* の文法化。Green (2002: 70–71)—現在のアフリカ系アメリカ英語 (AAE) では *finna* などの縮約形に。

用法 Smith (2009)—南部文学のコレクション^{*3}から集めた初期の用例とインターネット上で収集した現代の用例を比較すると、不定詞が有界動詞から非有界動詞 (特に状態動詞) を含むように変化。また、*fixing to*, *fixin' to*, *finna* の 3 形式と私的動詞 *think*, *believe*, *know* のコロケーションを検索すると、*finna* とのコロケーションがもっとも多いので、*finna* が未来表現としてもっとも一般化した意味をもっている。Myers (2014)—(1) を根拠に、*FIXING TO* が認識用法として近接未来を指し始めたのは 19 世紀中頃から。

- (1) “Yes, an’ looks like a thunder-storm **a-fixin’ to** gether this minute,” added a voice outside the door. (Stuart 1897, *In Simpkinsville* [Smith 2009: 13, (4)])

● 本研究

先行研究の問題点 議論は限られたデータに基づいており、特に通時的研究ではそれが顕著。Smith (2009) が依拠した初期の用例は 14 例のみであり、現代の用例もインターネット検索の結果であるため再現性に欠ける。Myers (2014) も、ほとんどが OED や DARE、Wentworth (1944) といった辞書の用例に立脚。

本研究の目的 データの不足や偏りを補ったうえで、特に次の 2 点を扱う。

- 19 世紀から現在に至るまでの *FIXING TO* の用法の変遷。特に、近接未来用法の拡大や定着の程度。
- 形式の違い (*fixing to*, *fixin’ to*, *finna*) による差違について先行研究 (Smith 2009) の検証。

2 手法

コーパス COHA, COCA

検索語 *fixing*, *fixin’*(’), *a-fixing*, *a-fixin’*(’), *finna* の 5 つ。*fixing* は右側 5 語以内に *to* を含む用例から該当例を、それ以外は各形式に不定詞が後続している用例を手作業で抽出し、およそ 1000 件を得た。なお *finna* は COHA でヒットなし。その他の縮約形 *fixina*, *fixna*, *fitna* (Green 2002: 70) は COHA, COCA 共にヒットなし。

3 結果と考察

3.1 用法の発達

- 無生物主語や非対格動詞、状態動詞など、「意思」の意味から離れて近接未来を指す用例は 1920 年代から観察

^{*1} 本研究は JSPS 科研費 JP19K13230 の助成を受けたものである。

^{*2} 以下、綴りの異なる形式を含めた代表形を *FIXING TO* と表記する。

^{*3} Library of Southern Literature (<https://docsouth.unc.edu/southlit/>)。1924 年以前の作品が公開されている。

され始める (2a-e)。going to と同義に用いられている (2c) は注目に値する。fixing と fixin(′) で用法の発達に差は見られない。there 構文は 21 世紀になってから (3)。

- Myers (2014: 52) は、19 世紀半ばの認識的用法への発達として、(1) のような天候に関する文脈での用例を強調しているが、そのような用例は周辺の。COHA で確認できた天候に関する用例は (2e) を含めた 7 例のみ。^{*4}
- 文法化の進んだ用例が 19 世紀から存在したことは事実であっても、そのような用法が広まりを見せたのは 20 世紀に入ってからと思われる。現代でも「有生物主語 (人) + 動作動詞」が典型的であり、FIXING TO は依然として「意思」を指す用法がメイン。

- (2) a. “Look out—catch him, Quinlan!” cried Mr. Geltfin. “Look at his face—he’s **fixing to** faint or something.” The prime intent of this recital, as set forth at the beginning, was to tell why Mr. Max Lobel had an attack of apoplexy. (Cobb 1922, *Sundry Accounts* [COHA])
- b. A faint call was heard, the girl in the distant magnolia. . . . “Hurry, she’s **fixin’ to** fall,” said Pauly. . . . They made fast to the tree and took in the girl and her goat. (O’Donnell 1935, Jesus Knew, *Haper’s Magazine* [COHA])
- c. “Only I saw the track before they tore it up. I saw where it was going to happen.” “But you didn’t know hit was **fixing to** happen when you seed the track. So nemmine that. I heard. And I reckon they ain’t gonter git that away from me, neither.” (1936 Faulkner, *Raid*, *The Unvanquished* [COHA])^{*5}
- d. When he awakened the sun was near to the mountains, **fixing soon to** sink from sight. (Guthrie 1947, *The Big Sky* [COHA])
- e. Dick broke into Evans’ thought, saying, “**Fixin’ to** storm, west.” Not till then had Evans paid any mind to the cloud that had risen low over the hills. “That the way storms come from here?” (Guthrie 1949, *The Way West* [COHA])^{*6}
- (3) “There’s **fixing to** be some tough love. There’s **fixing to** be some guys who won’t end up in this room. . . .” (2015, *USA Today* [COCA])

3.2 形式による比較

- 表 1、表 2 の概観

表 1 COHA のデータを形式別に年代で比較。初出は 1855 年であるため、表に 19 世紀前半は含めていない。ほぼフィクションにのみ生起しているため、ジャンルでの比較は行っていない。20 世紀前半以降、全体の使用頻度に大きな変動は認められないが、優勢な形式が 20 世紀前後半で逆転。前半までは fixin’ to、後半からは fixing to が優勢。^{*7}

表 2 COCA のデータを形式別にジャンルで比較。どのジャンルでも fixing to が優勢。口語寄りのジャンルに偏った分布。

- 形式の入れ替わり

- 19 世紀の fixin(′) の用例はほぼすべて (13/14 例) が、(4) のように AAE の発音を忠実に記述しようとした Joel Chandler Harris (Green 2002: 170–71) による、Uncle Remus シリーズからのもの。20 世紀前後半は、特定の作品や作家の影響は認められない。
- fixin(′) to は 20 世紀以降も AAE の特徴が反映された文脈での使用が多い。COHA のコンコーダンスラインを目視した範囲では、20 世紀前半で 76.7% (66/86 例)、後半で 77.3% (34/44 例) がそのような文脈での使用。(5a–b) のように、極端にも見える程度まで発音によって AAE を表示しているものも多い。^{*8}
- fixing to も同様に集計すると、前半で 14.8% (8/54 例)、後半で 18.9% (18/95 例) が AAE の特徴が見られる文脈。fixin(′) とは異なり、過度に発音に頼った表示をする文脈は見当たらない。(6a–b) は文法的特徴 (you/we was, how you been, 二重否定など) で AAE を表示。

^{*4} このうち 3 例が Lytle 1957, *Velvet Horn* に “a-fixing up to rain” という形で生起する。

^{*5} COHA の書誌情報によるとこの用例の出典は Barnes 1938, *Wisdom’s Gate* であるがこれは誤りである。本調査では COHA で誤った書誌情報が付されているケースが他にも多く見つかった。以下の引用例では可能な限り原典を調査し、COHA で誤った書誌情報が付されている場合はその旨を注記する。

^{*6} COHA の書誌情報では Jackson 1949, *Lottery, or the Adventures of James Harris* である。

^{*7} 表 1、表 2 には 100 万語当たりの換算値を付しているが、この数値は南部方言のテキストがコーパスの各時代・ジャンルに含まれる割合に影響され得ることに注意が必要である。

^{*8} このような表示が AAE の実際の特徴をどれほど正確に反映しているかの問題には立ち入らない。

表1 COHA における FIXING TO

	1850-1899	-1949	-1999	2000-	合計
fixing to	3	54	95	19	171
fixin(') to	14	86	44	8	152
a-fixing/a-fixin(') to	0	4	6	0	10
合計	17	144	145	27	333
per mil	0.332	1.206	1.159	0.916	

表2 COCA における FIXING TO

	TV	MOV	SPOK	BLOG	WEB	FIC	MAG	NEWS	ACAD	合計
fixing to	28	116	70	24	12	109	25	27	1	412
fixin(') to	19	54	6	10	7	48	4	10	0	158
finna	19	39	0	3	3	0	0	0	0	64
a-fixing/a-fixin(') to	1	1	1	0	1	1	0	0	0	5
合計	67	210	77	37	23	158	29	37	1	639
per mil	1.051	3.269	0.604	0.295	0.177	1.322	0.228	0.301	0.008	

- (4) Co'se Brer Rabbit know de game dat Brer Fox wuz **fixin'** fer ter play, en he 'termin' fer ter outdo 'im, (Harris 1895, *Uncle Remus, His Songs and His Sayings*)
- (5) a. "Well, Ah wasn' **fixin'** to tell M'lissy," he acknowledged. "Know you not that that so good little woman would r-rather be hungr-ry than have you give her money that you gained by br-reaking the law?" "Well, Ah wasn' **fixin'** to give hit to her." (Smith 1903, *A Tar-Heel Baron*)
 b. Boy! You got nawthin' to do all day but stand in mah path? You **fixin'** to' get y'se'f soaked? (Algren 1956, *A Walk on the Wild Side*)*⁹
- (6) a. She waved and called, "Hey, you two in green there! Was you **fixing** to sneak past my house?" "No such thing," Crunch grinned, looking upward. "No such thing, ma'am. We was just asking for directions." "Look like you got directed right. Julia, how you been, child? ..." (Baldwin 1979, *Just Above My Head*)*¹⁰
 b. "Can't say. But it was in her room. Get what I mean? And I saw her up there before naked as a worm when I was **fixing** to put up the tree. She jumped back, but didn't do no good. She don't know I got eyes in the top of my head. ..." (Morrison 1981, *Tar Baby*)*¹¹
- fixin(') から fixing に入れ替わった理由
 - 用法の変化または文法化を反映しているとは考えにくい (3.1 節)。
 - 話者の出自を示すための文体上の使い分け。fixing の綴りは白人話者による発話を示す?
 - * (7a-b) は *Gone with the Wind* の連続した会話部分から。(7a) は主人公 Scarlett (白人) の、(7b) は Mammy (黒人) の発話。*¹²
 - * とはいえ William Faulkner の作品 (COHA に収録されている限り) では、登場人物の民族に関わらず fixing が使用されている。(2c) は黒人の Ringo による発話。(8) の Ratliff は白人。*¹³ つまり、fixing/fixin(') の綴りと民族が必ずしも結びつくわけではない。*¹⁴
 - 書き言葉における -in (-ing で [ŋ] の脱落した形式) 自体の減少。*¹⁵
 - * COHA ("*in_v?g*" で検索) では、20 世紀前半に頻度のピーク、後半にかけて減少の傾向。*¹⁶

*⁹ COHA の書誌情報では Roberts 1956, *Boon Island* である。

*¹⁰ COHA の書誌情報では Kemelman 1978, *Thursday the Rabbi Walked Out* である。

*¹¹ COHA の書誌情報では Gray 1981, *World Without End* である。

*¹² この作品 (または映画版) に対してたびたび指摘される黒人への差別的描写の問題については立ち入らないが、fixing と fixin' の綴りの使い分けにそのような背景が存在する可能性も十分考えられるだろう。

*¹³ 登場人物の情報は The Digital Yoknapatawpha Project (<https://faulkner.drupal.shanti.virginia.edu/>) による。

*¹⁴ 20 世紀後半の南部では、fixin to が民族に関係なく同程度に用いられている (Bernstein 2003: 115-16)。

*¹⁵ この [ŋ] の脱落は AAE の特徴であるとはいえ、AAE にのみ限られる訳ではないことに注意が必要である (Green 2002: 121-22)。

*¹⁶ Brown と Frown でも (CQPweb 版 [<https://cqpweb.lancs.ac.uk/>]; ["*in_V*G"] で検索)、110 例 (Brown) から 58 例 (Frown) に減少する。なお、Brown では 64/110 例 (58.2%) が 1 つのテキストに集中して生起する。

* 20 世紀アメリカ文学作品における AAE を含む方言の表し方が、発音よりも文法や語彙などに頼るようになった (Green 2002: 197; Preschler 2003) という文体上の変化と関係? (6a–b) とも比較。

- (7) a. "... Are you going to argue with me about a little matter of Mother's curtains when that trash Emmie Slattery who killed Mother is **fixing to** move into this house and sleep in the bed Mother slept in?" (Mitchell 1936, *Gone with the Wind* [COHA])
 b. "Who is you **fixin' ter** git money frum dat you needs a new dress?" (ibid.)
- (8) "That's right," Ratliff said. "All I wanted was jest a note for it. But he insisted on making me a partner. And I'll tell you something else we're **fixing to** do. We're **fixing to** open a wholesale." (Faulkner 1957, *The Town* [COHA])

• finna の用法

- COCA の 64 例中 (表 2)、finna と私的動詞の共起は皆無。COCA の全用例で比較しても、fixing/fixin(') to より finna の方が状態動詞と多く共起するとも言えず、Smith (2009: 16) の主張は確認できない。Green (2002: 71) の述べる通り、主な差違は発音上のものと捉えるのが妥当であろう。
- TV/MOV に集中しているが (19+39/64 例; 表 2)、その中でも *A Madea Family Funeral* (2019; MOV) (17 例)、*Legends of Chamberlain Heights* (2016–17; TV) (9 例) のように一部の作品に偏っている。また集中して finna が現れるのは 2010 年代以降で、finna の (少なくとも文字化される文脈への) 出現は極めて最近のこと。finna を fixing to と言い直している (9) は、その新規性について示唆的。

- (9) I'm ready, First Lady, ma'am. I been training mighty hard, and I'm **finna** beat you this time.
 "Finna," Elvis? "Finna"?
 'Scuse me, ma'am. I meant "**fixing to**." (2019, *Family Reunion* [COCA: TV])

4 結論

- 「意思」から独立した、文法化の進んだ用法が拡大し始めるのは 1920 年代以降。ただし、現在でも「意思」の用法がメイン。
- 形式による違いについて、先行研究の主張は確認できなかった。20 世紀後半以降 fixing to が優勢になることの背景には、アメリカ文学における AAE の表現法の変化など文体的な要素が考えられる。

参考文献

- Bailey, G., T. Wike, J. Tillery, and L. Sand (1993). Some patterns of linguistic diffusion. *Language Variation and Change* 5(3), 359–390.
- Bernstein, C. (2003). Grammatical features of southern speech: *yall*, *might could*, and *fixin to*. In S. J. Nagle and S. L. Sanders (Eds.), *English in the Southern United States*, pp. 106–118. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cassidy, F. G., J. H. Hall, and L. Von Schneidmeyer (Eds.) (1985–2013). *Dictionary of American Regional English*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press. [DARE].
- Ching, M. K. L. (1987). How fixed is *fixin' to*? *American Speech* 62(4), 332–345.
- Davies, M. (2008–). *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 600 million words, 1990*. <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Davies, M. (2010–). *The Corpus of Historical American English (COHA): 400 million words, 1810–2009*. <https://www.english-corpora.org/coha/>.
- Gilman, E. W. (Ed.) (1994). *Merriam-Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, MA: Merriam-Webster.
- Green, L. J. (2002). *African American English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Myers, J. L. (2014). *Fixin' to*: the emergence of an American quasi-modal. *American Speech* 89(1), 42–73.
- Peters, P. (2004). *The Cambridge Guide to English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Preschler, H. (2003). Language and dialect. In S. R. Serafin and A. Bendixen (Eds.), *The Continuum Encyclopedia of American Literature*, pp. 644–646. New York: Continuum.
- Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner (Eds.) (1989). *The Oxford English Dictionary* (2nd ed.). Oxford: Clarendon Press. [OED].
- Smith, K. A. (2009). The history of *be fixing to*: grammaticization, sociolinguistic distribution and emerging literary spaces. *English Today* 25(1), 12–18.
- Staub, P. and J. Zentz (2017). *Fixin' to*. *Yale Grammatical Diversity Project: English in North America*. <http://ygd.yale.edu/phenomena/fixin-to> (Accessed on 19 Aug., 2020). Updated by Katie Martin (2018).
- Wentworth, H. (1944). *American Dialect Dictionary*. New York: Thomas Y. Crowell.

特別講演

(11 月 8 日 (日) 午後)

第 1 室 ～ 第 3 室

「脳からみた統辞構造の計算」

(The Calculation of Syntactic Structures from the Viewpoint of the Brain)

東京大学 酒井邦嘉 (The University of Tokyo, Kuniyoshi L. Sakai)

講演では最初に、「社会科学的」言語観と対比しながら「自然科学的言語観 (Biolinguistics)」について述べる。事物の名称 (例えば「令和」) などは、社会的慣習に従う「約束事」として自由に定められる。それでも言語は人間の脳による制約を受けており、句 (phrase) や文などの「構造」を生み出すような最適なシステムとして機能する。fMRIなどの脳機能イメージングの手法を用いた言語脳科学の研究により、文の統辞構造の計算においてブローカ野の一部が「文法中枢」として働くことが明らかとなった (酒井 (2019 [1]) など)。

次に、言語学者ノーム・チョムスキーによって半世紀以上にわたって明らかにされてきた「統辞構造 (syntactic structures)」 (チョムスキー (2014 [2]) など) という考え方について、特にあらゆる個別言語 (日本語や英語など) に共通する「普遍文法 (Universal Grammar, UG)」を中心に説明する。このような普遍文法に基づく演繹的な言語理論によれば、句や文などを「木構造」で表すことで、意味の構造的曖昧性を説明できる。また、2つの要素を合わせるという単純な演算である「併合 (Merge)」を再帰的に繰り返すことで、有限の数の音素や単語から、無限の種類や長さの文を作ることができる。このような「離散無限性 (discrete infinity)」は、数学にも応用される真理であるから、自然科学的言語観の重要性は明らかであろう。

最後に、そうした理論的な提案が脳科学によって実証された典型例を2つ紹介したい。Ohta et al. (2013 [3])は、文法中枢の脳活動が「併合度 (Degree of Merger)」の計算を反映することを初めて明らかにした。併合度とは、二つの統辞体を一つにまとめる併合操作の深さであり、短期記憶の負荷などから独立した指標である。また、Tanaka et al. (2019 [4])は、自然な文 (Merge-generable) と人工的な語列 (Non-Merge-generable) を対比することで、両者で脳活動のパターンが大きく異なり、文法中枢は自然言語の文処理において選択的に働くことを示した。以上の実験結果は、自然言語に共通の神経基盤があり、言語が生得的な脳機能であることを示す証拠である。これらの例のように、言語における脳の「機能分化」と「機能局在」を示すことは、自然科学的言語観の基礎を成すと言えよう。

[1] 『チョムスキーと言語脳科学』 (インターナショナル新書)

[2] 『統辞構造論』 (岩波文庫)

[3] *PLOS ONE* 8, e56230

[4] *Front. Psychol.* 10, 2673

脳からみた 統辞構造の計算

酒 井 邦 嘉



201108

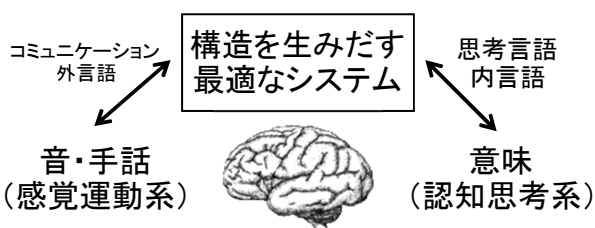
根強い「社会科学的」言語観

音・手話と意味を、社会的慣習として結びつけた「言語という約束事」。これは、社会や人が自由に決めたものである



自然科学的言語観 (Biolinguistics)

言語は人間の脳にあり、音・手話と意味を結びつけ、構造を生み出す最適なシステム



酒井邦嘉
Sakai Kuniyoshi

チョムスキーと 言語脳科学

インターナショナル新書



統辞構造論

付「言語理論の論理構造」序論

チョムスキー 著

福井直樹・辻子美保子 訳



生成文法による言語研究の「革命」開始を告げる記念碑的著作。句構造や変換構造などの抽象的な言語学的レベル、言語の一般形式に関する理論、文法の単純性の概念などが、人間言語に対する深く透徹した洞察を与えることを立証する。傍録の論考および訳者解説では本書の知的背景を詳細に説明し、その後の展開も概観する。



青 695.1
岩波文庫

『統辞構造論』の核心は「変換」

- そして言語構造に関する第3のモデル、即ち **変換** (transformational) モデル〔第5章〕を展開する。このモデルは、〔中略〕文同士の関係を を自然な形で説明できるものである。
 - その説明の対象とされた現象を超える 広範囲の諸現象に対して多くの洞察を与える。
- これが単純で啓発的 (simple and revealing)

普遍文法（UG）とは

1. (第1原理) 木構造で枝分かれの生じる節点では、下に主辞(head)が必ず含まれる。
 2. (第2原理) 木構造で枝分かれの生じる節点では、二股の分岐が必ず生じる。
- 普遍文法は、人間が生まれつき持つ言語機能であり(言語生得説)、教わる必要はない。

Head-Final Language (SOVなど)

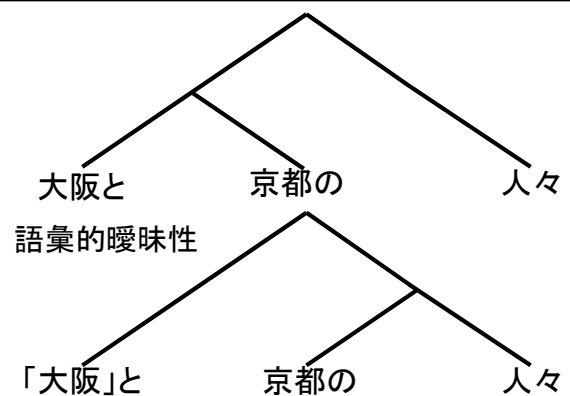
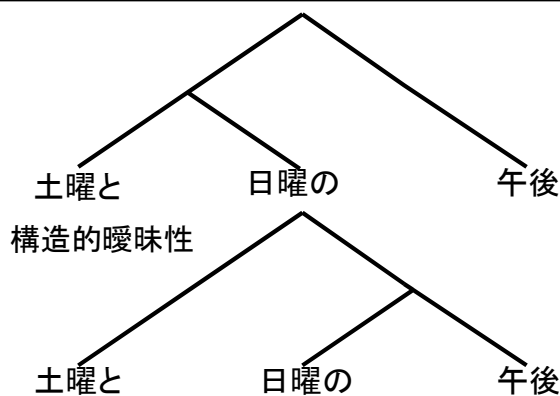
動詞句OVでは
Vがhead

みんなの 家

Head-Initial Language (SVOなど)

動詞句VOでは
Vがhead

a house for everyone



言語は何次元？

- 音声・手話の連鎖は「線型順序」(linear order)
- その次元は「時間」で、1次元
- 人間の言語は、すべて木構造で表される
- 木構造の水平方向の次元は「時間」
- 木構造のもう一つの次元は「分岐」(branching)
- 従って、言語は2次元

演繹的な言語理論の必要性

「言語能力・言語知識に関する情報も、直接観察できる形で提示されているわけではなく、また、現在知られているどのような種類の帰納的手続によっても、データから直接引き出すことは出来ない」

チョムスキー『統辞理論の諸相』岩波文庫 p.64

【演繹 deduction】と【帰納 induction】

離散無限性 (discrete infinity)

- 離散無限性の典型例は「自然数」: 0, 1, 2, ...
- 言語は、有限で離散的な言語要素(音素・形態素・統辞体[syntactic object])から成る
- 言語は、そのような要素を無限に組み合わせてできる「構造」を持つ
- 「水」という物質では、離散的な水分子(H₂O)が無限に(地球サイズまで!)広がった構造を持つ

証明なしで発見される真理もある

ラマヌジャンは、数学の「ネイティブ・スピーカー」だった! 直感によって結論が導かれ、証明は後付け

Ramanujan's nested radical



S. Ramanujan (1887-1920)

$$3 = \sqrt{1 + 2\sqrt{1 + 3\sqrt{1 + 4\sqrt{1 + \dots}}}}$$

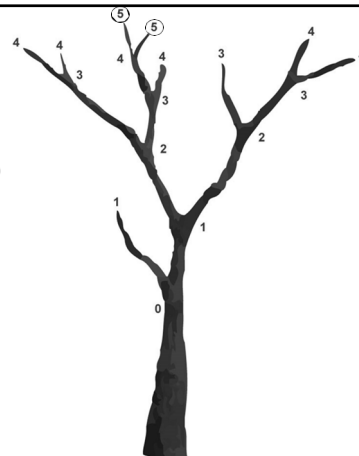
Proof: Define $f(x) = x + n + a$, so that $f(x)^2 = ax + (n + a)^2 + xf(x + n)$.
Set $a = 0$, $n = 1$, $x = 2$ and substitute recursively for $f(x)$.

普遍文法: 言語はフラクタル

- 2つの要素を合わせるという単純な演算「併合」(Merge)を再帰的に繰り返す事で文が作られる。
- あらゆる文は、すべて2股で出来た、階層的な木構造で表される。その幾何学はフラクタル。
- この原理こそ、母語話者の脳にある文法知識。
- 有限の数の音素や単語から、無限の種類や長さの文が作れる。

木構造の複雑さを測る "併合度"
(枝分かれの最大数)

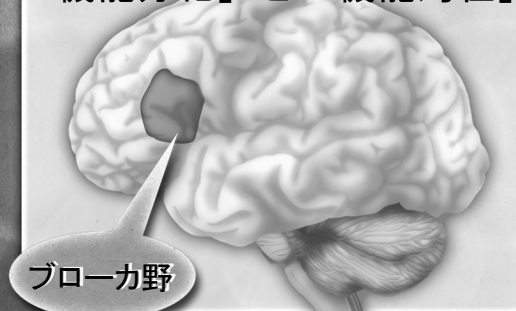
併合: 2つの言語要素
(名詞句や動詞句等)を
まとめていく操作。
併合度は、この最大の
深さを数値化したもの

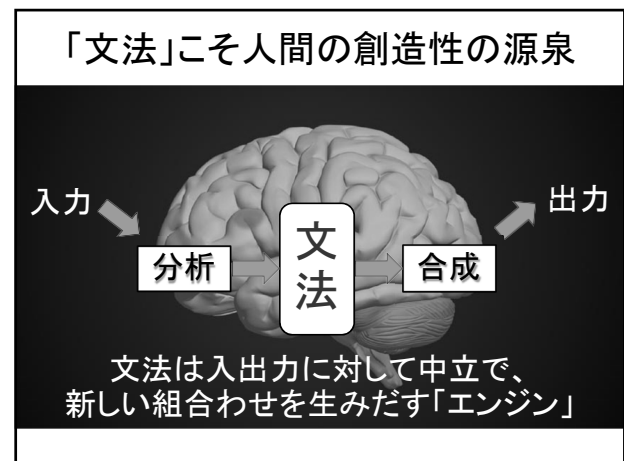
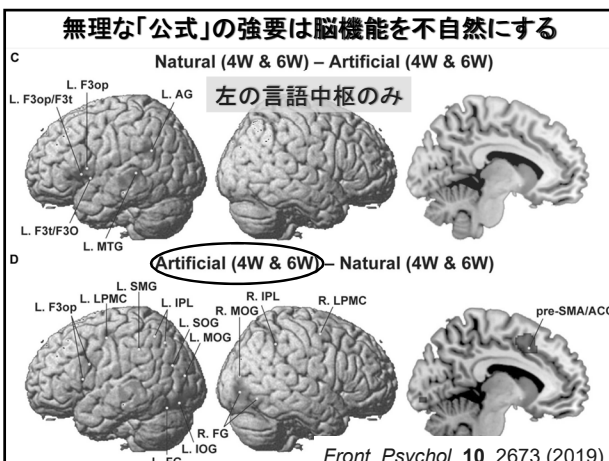
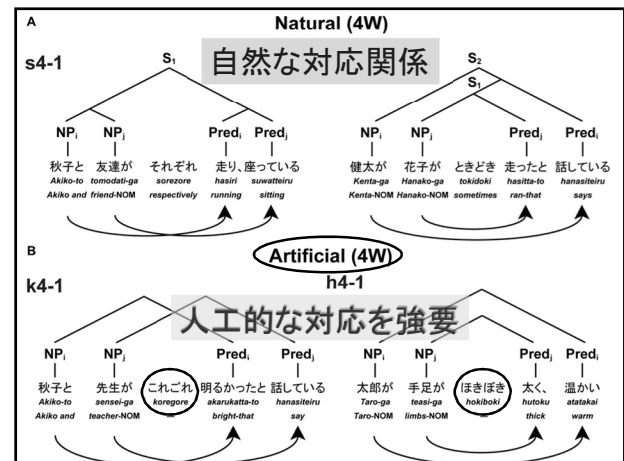
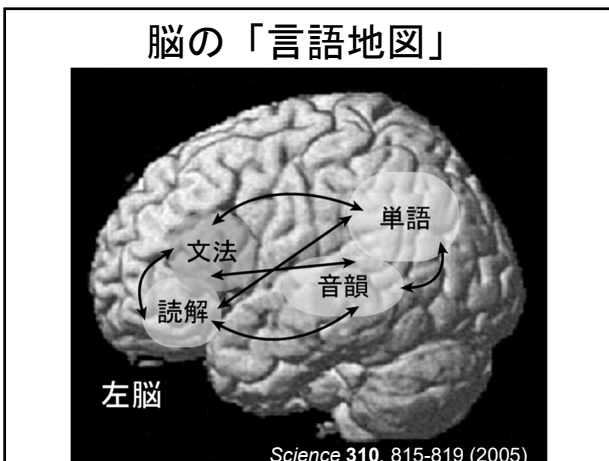
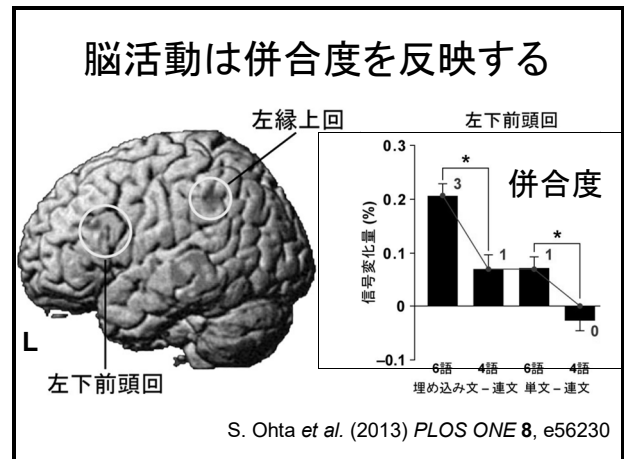
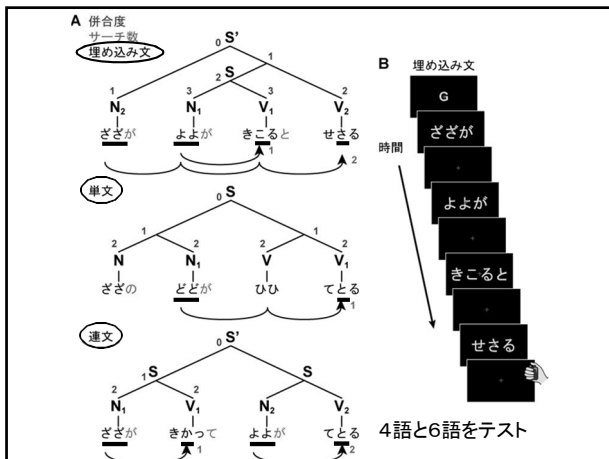


「なぜ、言語は最適に一あるいはそれに非常に近い形で一設計されていなくてはならないのかという問いです。[中略]あるわずかな変化、脳内のわずかな再配線があったことは間違いなく、その再配線によって言語のシステムがどうにかして作り出されたということを意味しています。そこに選択圧は存在しません。ですから、言語の設計は完璧であったのでしょう。それはただ自然法則に従って起こったことなのです。」

チョムスキー 『我々はどのような生き物なのかー
ソフィア・レクチャーズ』 p.32 岩波書店 (2015)

言語における脳の 「機能分化」と「機能局在」





動的文法理論とその展開—語法文法研究から理論へ
Grammatical Dynamism and Its Development:
In Search for a Theory through the Studies of Grammar and Usage
中澤和夫 (青山学院大学)
Kazuo NAKAZAWA (Aoyama Gakuin University)

1. Case Studies

1.1 The English head-internal relative clauses: (Nakazawa 2018a, 中澤 2018b)

Peculiarity of the construction: the head inside the relative clause

- (1) This fish is [the biggest I ever caught ____].
- (2) It is our impression that there are very few *pure syntactic constructions*, that is, constructions which have no specific semantic or pragmatic functions associated with them and which mention no specific lexical items. [The closest we can come ____ to that] is the *subject-predicate* construction of English. [italics original authors'] (Fillmore and Kay 1987: 13)
- (3) a. [The nearest any western fighting technique has come ____ to the eastern martial arts], is in the French art of “la Savate.” (BNC)
b. [The nearest **any western fighting technique** has come ____ to the eastern martial arts], is in the French art of “la Savate.” (BNC)
- (4) a. A friend of mine once passed out from heat on a downtown street, falling into the gutter. [The closest **anyone** came ____ to him] was the man who leaned over, just as my friend was coming to, and said: “Hey, you’re blocking my car.” (Royko (1987a); Royko (1987b))

Examples	Functions [the +Superlative] and its trace assume			Head of the entire NP
	[the +Superlative]	Its trace in the relative		
	Clause Introducer	Argument in the relative	~Argument (Degree Modifier / Predicative) in the relative	
(1)	√	√	--	[the +Superlative]
(2)	√	--	√	[the +Superlative]
(3a)	√	--	√	[the +Superlative]
(3b)	√	--	√	bold face NP
(4)	√	--	√	bold face NP

1.2 The *Dungeon* construction: A syntactic hapax legomenon: (Nakazawa 2018a)

Peculiarity of the construction: *with* followed by theme/subject/agent

The *Dungeon* construction:

- (5) a. Into the dungeon with the traitors! (Jackendoff 1973: 347)
b. Down with the traitors!
c. Away with you!
d. Off with {you/your hat/his head}!
- (6) a. “Traitors shall go down into the dungeon!”
b. “Traitors shall be down!”
c. “You should be away from me!”
d. “{You/Your hat/His head} should be off of {me/you/his body}!”
- (7) a. We stepped into the dungeon with the tourists.
b. Mary walked down the street with her friends.
c. John will be away from Tokyo in Hawaii with his wife.
d. The thief ran off with the money.
e. John sliced cheese with a knife.
- (8) a. ...into the dungeon with NP.
b. ...down...with NP.

c. ...away...with NP.

d. ...off with NP.

- (9) After Bill left, Trina cranked up the stereo and continued wallowing in Sondheim albums. She'd never play musicals that loud when Bill was home, nor would he play his jazz albums at a volume that disturbed her. But **[with him away]**... She washed dishes to the thundering Dies Irae chords from Sweeney Todd. (COCA) [Three dots original–K.N.]

(10) [with him away] → Adverbial Preposing → (11)

(11) Away with you! (= The *Dungeon* construction)

Further extension of the construction:

(12) a. Get along with you, and go to bed. (OED) (cf. *with you get along)

b. Get along with you, vagrant! (COCA)

c. Go along with you. (OED) (cf. *with you go along)

d. Now go along with you. Try to come back with a smile on your face. It troubles me to see you looking so lost. (2009) (COHA)

e. Get away with you, young Tamborel! (COCA) (cf. *with you get away)

(13) Base: Away with you! →

Reinterpreted template: [DIRECTIONAL PHRASE XP][with NP_{THEME/SUBJECT/AGENT}]! →

Derived form: [DIRECTIONAL PHRASE [VP_{nonfinite} get along]][with NP_{THEME/SUBJECT/AGENT}]!

Peculiar features of the *Dungeon* construction:

(14) a. It is a nonfinite clause.

b. It has a directional phrase followed by [PP with NP].

c. NP in the PP [PP with NP] is a definite NP.

d. NP in the PP [PP with NP] is the agent/actor or theme of the event, or put into syntactic terms, the subject NP in the paraphrase for the construction: *the traitors*, for example, in “Into the dungeon with the traitors!” is the agent/actor or theme, or the subject NP in the paraphrase “The traitors shall go down into the dungeon!”

e. Though the preposition *with* is used to express a whole variety of meanings and relations such as ‘contact,’ ‘accompaniment,’ ‘possession,’ ‘instrumental,’ ‘circumstantial condition,’ and many others, it is never followed by an agent/actor or theme, or a subject NP. But, note well, so it is only when in the *Dungeon* construction.

f. The discourse function is “order/command.”

1.3 The post-nominal modifier *combined*: (中澤 2017)

Peculiarity of the construction: all basic features missing

(15) a. More particles are contained in the first receptacle than in [all the others combined]. (Bolinger 1975: 79)

b. China is larger than [Japan and Korea combined].

a'. More particles are contained in the first receptacle than in [all the others that are combined].

b'. *China is larger than [Japan and Korea that are combined].

(16) Stage 1: [(all) NP_{pl} that are combined] (Base: (15a'))

Stage 2: [(all) NP_{pl} combined] (Derived through WHIZ-Deletion: (15a))

Stage 3: [(all) NP_{pl} combined] (Reinterpreted template as a model)

Stage 4: [[NP A and B]_{pl} combined] (Derivatively derived based on the Stage 3 model: (15b))

Grammatical features observed/reserved at Stage 3:

(17) a. NP is post-modified by *combined*.

b. The grammatical number of NP is plural.

c. No reference to the internal structure of the NP: it does not matter whether the head(s) of NP is/are pronominal or nouns, or in the latter case, whether the nouns are coordinated or not.

More peculiar instances:

(18) a. “What about violence?” I inquired, beginning to feel ready for some.

“Sex is a special kind of violence - and money is an abstraction of both,” she answered. “[Sex and money combined] is the basis for almost all violence in the sense that you mean. ...” (Kris Saknussemm. 2009. *Private*)

Midnight. The Overlook Press.) [due to Masaaki Fuji]

- b. “I just thought it would be something dope. Social networking is important,” Wale said recently to Wired.com. “Anything that’s [social and music combined] is something I want to be a part of. ...” (*Billboard*, 12/3/11, p.15) [due to Masaaki Fuji]

Peculiar features observed/acquired in the examples of (18a) and (18b):

(19) a. In (18a), “[Sex and money combined]” is not plural, but singular. (Re: number)

b. In (18b), in “[social and music combined],” nouns modified by *combined* are not the ‘referential’ NPs as they were as in (15), but they are ‘predicative’ NPs. (Re: referentiality)

c. Interestingly enough, in (18b), the coordinated items are not of the same syntactic category, but they are different: *social* is an adjective and *music* a noun. (Re: category and coordination)

d. We do not normally coordinate different categories, but in (18b) the items of the same syntactic-functional category labeled ‘predicative’ are coordinated (cf. (b)). (Re: ‘predicative’)

e. Though normal syntactic rules cannot coordinate different categories (cf. (c) above), the two items combined in (18b) are of the same type called ‘predicative’ and they are actually coordinated (cf. (d) above). But we cannot modify this by a relative clause like “*Anything that’s [social and music that are combined]....” But once “that are” is absent, it becomes fine. (Re: evidence that (18b) is obtained through the derivative-dynamic process)

Back to the original ‘basic’ features of (15a, b):

(20) a. the syntactic structure of the modified phrase: NP

b. the grammatical number of it: plural

c. the internal structure of it: [N_{pl}] or [N and N]

d. referentiality of the internal constituents: referential

Analysis of (18b):

(21) (continued from (16))

Stage 4: [[NP A and B]_{pl} *combined*] (Derivatively derived based on the Stage 3 model: (15b))

Stage 5: [[X and Y] *combined*] (Reinterpreted template as a model)

Stage 6: [[[x social] and [y music]] *combined*] (Derivatively derived based on the Stage 5 model: (18b))

NB: All the ‘basic’ features of the original structures (15a, b), i.e. (20), are totally lost. It is as if all the scaffolding was taken away after the construction is finished.

1.4 The verb *allege* as a semi-auxiliary verb: (中澤 2020)

Peculiarity of the construction: emergence of the semi-auxiliary use of *allege*

(22) a. *I alleged John to be a fool.

b. John, I alleged to be a fool.

c. John is alleged to be a fool. (中澤 2015: 274)

d. Our present arrangement is alleged to reduce the need for saving. (OED Online: 1987)

No reference to semi-auxiliary *allege* in *OED Online* (as of August 3, 2020)

(23) a. So far it alleges to protect the agriculturist, yet it outs the duty on sugar, which is a blow at the planter. (COHA: 1890)

b. ...; and our assiduous patronage rumour alleges to have been the death of it—... (COHA: 1895)

c. These pictures inside a local hospital allege to show children who’ve been injured in airborne chemical attacks. (COCA: 1991) (中澤 2015 : 276)

d. OK, now let’s go to these pictures that CNN has obtained. They allege to show you and Reverend Swaggart leaving a motel in New Orleans. (COCA: 1991)

e. The young women who allege to have been involved with Willie Smith say that they didn’t come forward before because of the prominence of his family. (COCA: 1991) (中澤 2015 : 276)

f. Which Hollywood actress had alleged to have had sex with an entire football team which included John Wayne? (BNC: 1992) (中澤 2015 : 275 - 276)

Analysis:

Examples of “allege NP to VP”

- (24) a. As a result, the plaintiffs “failed to allege facts to support their legal conclusion of injustice or unfairness.” (“Christianity Today,” USA) (WBO: N/A)
- b. It will appear, when we come to the subject of the specification, that the patentee must be entitled to a patent for all that he alleges himself to have invented, or his patent will be void. (COHA: 1837)
- c. “Wherefore? -- You cannot believe that I am, indeed, what they allege me to be -- the chief of the Black Riders -- that dreaded monster -- half man, half dragon -- who slays the men, swallows the children, and flies off with the damsels. Ha! ha! ha! Really, Clarence, I am afraid you are as credulous now at twenty-five as you were at five.” (COHA: 1841)
- d. He thought that all that was needed upon the subject of fugitive slaves, was to amend the existing act of Congress, so as to confine the exercise’ of [sic] the powers conferred to the judges of courts of the United States, and to secure to those who allege themselves to be free, the advantage of an impartial jury to aid the courts in the ascertainment of facts. (COHA: 1850)
- e. A protest was made, alleging the dun gelding G.T. Pilot to be ineligible. (OED Online: 1877)
- f. If we expand S’s second statement into the perceptual claim “I can see that the captain is a very young man” we might want to ask whether this statement is true or false. In one respect it is clearly false; the captain is not (let us say) a very young man, and so S could scarcely be right in saying that he sees that he is very young. Still, the fact remains that the increment in knowledge which S alleges himself to have acquired by visual means is an increment which he can easily bridge and, in the present case, is actually bridging with respect to that fellow over there (the porter). (COHA: 1967)
- g. The markets have exposed the fatal flaw of Margaret Thatcher’s government. This is not the fallacy (although some allege it to be so) of Nigel Lawson’s exchange rate policy, nor the fallacy (which others allege) of the money supply policy which Mrs Thatcher would prefer, but the fallacy of supposing government can be conducted successfully on the basis of ambiguous vacillation. (BNC: 1989)

(25) Dynamic analysis of the semi-auxiliary *allege* (I)

- a. Bases
 Syntactic Base: NP₁ allege NP₂ to VP (cf. (24))
 Semantic Base: “NP₁ claims the proposition ‘[NP₂ VP]’ without proof”
- b. Flat structure models: ‘NP allege to VP’ (WH- and NP-movement of NP_{ACC})
- c. Derived structure: Type F: NP allege to VP

(26) Dynamic analysis of the semi-auxiliary *allege* (II)

- a. Bases
 Syntactic Base: NP₁ allege NP₂ to VP (cf. (24))
 Semantic Base: NP_i allege [NP_i (= reflexive_i) to VP] (cf. (24b, d, f))
- b. Models: *want*-type verb
 Syntactic Model: NP_i want Δ_i to VP
 Semantic Model: NP_i want [NP_i (= Δ_i) to VP]
- c. Derived structure: NP allege to VP

2. Grammatical Dynamism (aka. Dynamic Model of Grammar)

2.1.1 Kajita (1977, 2002): K-Model

- (27) If the grammar of a language L at stage i, G(L,i), has property P, then the grammar of the language at the next stage, G(L,i+1), may have property P’. (Kajita 2002: 161)

(28) The Kajita Format (K-model)

If A, then B is possible;

where A stands for the proposition “the grammar of a language L at stage i, G(L,i), has property P,” and B for the proposition “the grammar of the language at the next stage, G(L,i+1), has property P’.”

2.1.2 Problems

- (i) “How far it goes” and “When to stop”

(ii) Tautology

2.2 Revised model: R-model

(29) The Revised Format (R-Model)

If *B*, then *A*;

where *B* stands for the proposition “the grammar of a language *L* at stage *i* ($i \neq 0$), $G(L,i)$, has property *P*,” and *A* for the proposition “the grammar of the language at the stage *i*-1, $G(L,i-1)$, has property *P*.”

(i) Accidental Gap/Accidental Hap

(ii) Explanation

3. Advantages of R-Model

3.1 The vowel in *money*

(5) a. As part of *P'*: The word *money* has a short stressed vowel [ʌ] for the letter -o-; the word *monetize* has a short stressed vowel [ʌ] for the letter -o-.

b. As part of *P*: The word *money* has a short stressed vowel [ʌ] for the letter -o-; according to the normal sound-spelling relationship in English, when the letter -o- represents a short stressed vowel, it is [ʌ].

NB: Now it is clear that *monetize* with a short stressed vowel [ʌ] is a normal practice. And since in *P* there are two descriptions such as, first, a description about *money* with a short stressed vowel [ʌ] and, second, a description about the normal practice of a letter -o- having a short stressed vowel [ʌ], we know that in the case of *money* having the vowel [ʌ], it is an exceptional feature for the word *money* to have a vowel [ʌ] in the place of the letter -o-. There is no roundabout here. (Nakazawa 2018: 143-144)

3.2 On ‘peculiarity’: How and why the construction is peculiar

$$[[P']] - [[P]] = p$$

3.2.1 head in HIRC: how peculiar! (cf. §1.1)

3.2.2 “command” in the *Dungeon* construction (cf. §1.2)

3.2.3 scaffolding in *combined* construction (cf. §1.3)

3.2.4 verb type change of *allege* from *believe*-type to *want*-type as a semi-auxiliary verb (cf. §1.4)

3.3 Multiple motivations for extension

K-Model: $[[P]] + \{p_1 \& p_2\} = [[P']]$ (Are two or more motivations possible? If so, how are they sequentially and/or functionally organized? Why and how this very $\{p_1 \& p_2\}$ is chosen?)

R-Model: $[[P']] - [[P]] = p$ (No such problems arise)

3.3.1 *allege*

3.3.2 Nomura (2019)

3.3.3 N. Nakazawa (2006)

4. Postscript

この障壁を打ち破るためには、「可能な文法」の限定の仕方について、発想を根本からあらためねばならない。(梶田 1984 (3))

この事態を打開する方向としては、つぎの 2 つの方向が考えられる。1 つは、今までどおり既存の理論のどれか 1 つを出発点とし、これを部分的に手直ししてよりよい理論に変えていく方向。もう 1 つは、「可能な文法」をできるかぎり狭く限定するという Chomsky の基本路線には従いながらも、その限定の仕方については、発想を根本からあらため、まったく新しい可能性を探っていく方向。(梶田 1984 (4))

肝心なことは、既存の理論に共通の隠された前提を明確な形で取り出し、それが適切かどうかを検討していくことだ。そのためには、まず現在までの諸理論の共通点を—それも当事者たちが明示あるいは認識していないような基本的な共通点を—探り出すことから始めるのが得策だろう。(梶田 1984 (4))

もし規則自体のあいだに基本的なものとそうでないものとの段階的な区別があるとすれば、その区別は、上記のような漠然とした直感に反映されるというだけでなく、もっとほかにもいろいろなところでその影響

が現れてくるだろう。たとえば、他の条件が同じであれば、基本的な規則ほど早く習得されるというようなことがあっても不思議ではない。習得した文法を実際に使うときにも、基本的な規則ほど優先的に適用されるというようなことがあるかもしれない。また言語類型学的にいても、基本的な規則ほど、それと同類の規則がより多くの言語に出てくるのではないか。さらに言語の歴史的な変化においても、基本的な規則ほど変化・消失しにくい、という傾向が見られるだろう。(梶田 1984 (5))

References

- Anderson, Stephen R. and Paul Kiparsky (eds.) (1973) *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English," Adam Makkai and Valerie Becker Makkai (eds.) *The First LACUS Forum 1974*, 57-80, Hornbeam Press, SC, USA.
- Fillmore, Charles J. and Paul Kay (1987) "Construction Grammar Lecture" (A Course Textbook), LSA Summer Institute, Stanford University, CA.
- Jackendoff, Ray S (1973) "The Base Rules for Prepositional Phrases," Anderson and Kiparsky (eds.), 345-356.
- Kajita, Masaru (1968) *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*, Sanseido, Tokyo.
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *SEL* 5, 44-76.
- 梶田優 (1984) 「英語教育と今後の生成文法 (1) - (6)」(『学校新聞』(1983-1984) 文英堂. 東京) 宇賀治正 朋 (代表) 『言語普遍性と英語の統語・意味構造に関する研究』昭和 57・58 年度科学研究成果報告書.
- Kajita, Masaru (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," Ukaji et al. (eds.), 378-393.
- Kajita, Masaru (2002) "A Dynamic Approach to Linguistic Variations," Kato (ed.), 161-168.
- Kato, Yasuhiko (ed.) (2002) *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, Sophia University, Tokyo.
- 中澤和夫 (2015) 「統語的機能構造について」江頭浩樹他編『より良き代案を絶えず求めて』開拓社, 東京, 267 - 278.
- 中澤和夫 (2017) 「後位修飾語 combined の語法」英語語法文法学会第 25 回大会, 専修大学.
- Nakazawa, Kazuo (2018a) *A Dynamic Study of Some Derivative Processes in English Grammar: Towards a Theory of Explanation*, Kaitakusha, Tokyo.
- 中澤和夫 (2018b) 「潜伏名詞句の意味論と統語論をさぐる」日本英語学会第 36 回大会シンポジウム「名詞句をめぐる拡張の諸相」横浜国立大学.
- 中澤和夫 (2020) 「19 世紀における動詞 *allege* の助動詞化」近代英語協会第 37 回大会 (オンライン).
- 中澤紀子 (2006) 「There 接触節と関係代名詞の顕在化—ナーサリー・ライムの場合」『近代英語研究』22, 71-91.
- 野村忠央 (2019) 「仮定法の倒置をめぐる」日本英文学会第 91 回大会シンポジウム「倒置現象をめぐる」安田女子大学.
- Ukaji, Masatomo, Toshio Nakao, Masaru Kajita and Shuji Chiba (eds.) (1997) *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, Taishukan, Tokyo.

Data

- BNC: The British National Corpus (via Shogakukan Corpus Network).
- COCA: Corpus of Contemporary American English.
- COHA: Corpus of Historical American English.
- OED: *The Oxford English Dictionary* (Second Edition) 1989, Oxford: Oxford University Press; also OED Online.
- Royko, Mike (1987a) "Some Good Reasons to Keep Walking," *Chicago Tribune* October 1, 1987.
- Royko, Mike (1987b) "Woman Gives Aid and Gets AIDS?" *The Japan Times* October 30, 1987.
- WBO: WordbanksOnline (via Shogakukan Corpus Network).

歴史語用論の歩み：
分類・射程・拡がりから見える分野の特徴
(A review of *Historical Pragmatics*:
Features captured from its classification, range, and development)

小野寺 典子 (ONODERA Noriko)
青山学院大学 (Aoyama Gakuin University) onodera@cl.aoyama.ac.jp

§ 1. 歴史語用論の歩み

(1) 「1995 年創設説」

1995 Andreas H. Jucker (ed.) *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. 初の論文集.

1998 最初の Workshop on Historical Pragmatics (IPrA 1998, Reims, France)

3 sessions: 1 Pragmatic factors in language change. (Development of DMs: Traugott & Schwenter, Onodera, Fludernik)

2 Diachronic speech act analyses. (Jucker & Taavitsainen, Semino & Culpeper, Honegger)

3 Data problems in historical pragmatics. (Culpeper & Kytö, Kryk-Kastovsky)

2000: 当初論文集の計画 → *Journal of Historical Pragmatics* (年 2 回刊行) 創刊へ
1998WS の参加者 → 編集 → 今に至る

『歴史語用論入門』(高田・椎名・小野寺(編) 2011: 6)・『歴史語用論の世界』(金水・高田・椎名(編) 2014: iii)・『歴史語用論の方法』(高田・小野寺・青木(編) 2018: 1)

(2) 「それより以前」

英語研究 1960 年には Brown and Gilman “The pronouns of power and solidarity.” あり。その後の欧州 T-V 言語における人称代名詞の使用と社会的要因「力関係・親疎」との関係の研究の基礎。

ドイツ語研究 1970 年代には言語史研究において、語用論に対する関心が見られる。「歴史語用論」(Cherubim 1980: 4) など。

日本語研究

特に国語学において、「敬語史」「待遇表現史」がある。('文章論' も。)

山田 (1924) 『敬語法の研究』、時枝 (1941) 『国語学原論』、山崎 (1963)、辻村 (1968) など多数。

・ Jacobs and Jucker (1995: 26)自身も「歴史語用論は、全く新しい学問領域を描くという訳ではない」と言っている。

→ 利点：複数分野に存在している、同じ関心を持つ研究を 1 つの土俵に上げ、議論できる。(例：独・日・英・伊語・ネワール語・アラビア語における文法化など。)

§2. 日本における歩み

日本で最初の歴史語用論についての書籍『歴史語用論入門』(高田・椎名・小野寺(編)2011)の出版からちょうど 10 年が経つ。

2005 初の「歴史語用論」ワークショップ 日本語用論学会年度大会

オーガナイザー 金水敏氏

パネリスト 福元広二氏・森山由紀子氏・小野寺 (DMs の発達・敬語の発達)

科学研究費による研究 (共同・個別とも)

学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト(2008-10 年度)『歴史語用論に関する総合的研究』海外協力研究者 Taavitsainen 氏 2009.3, Jucker 氏・Traugott 氏 2011.3 来日。17 名による。

青山学院大学総合研究所プロジェクト(2014-15 年度)『英日語の「周辺部」とその機能に関する総合的対照研究』6 名。Traugott 氏 2014.12 来日。

2011 『歴史語用論入門』(第 1 刷)・2020 (第 2 刷)

2014 『歴史語用論の世界』

2018 『歴史語用論の方法』

関連研究会：HiSoPra 研究会 年一度の研究会。日本語用論学会、IPrA, DiPVaC、East Asian Pragmatics 等。

§3. 歴史語用論分野の特徴

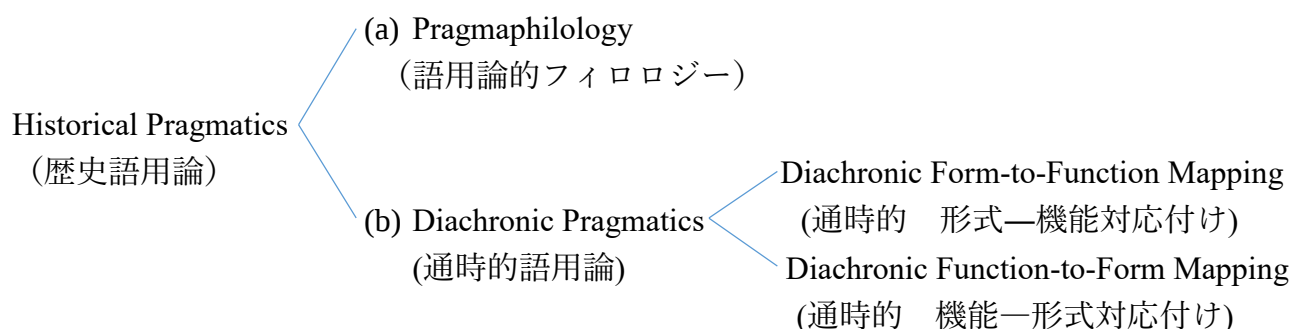
① 表：近代の言語史における歴史語用論分野の位置づけ

	中心領域 (音声・音韻・形態・統語・意味)	周辺領域 (社会・語用)
非歴史的視点	II. 共時的言語理論 (構造主義、生成文法) (20 世紀)	III. 社会言語学、語用論など (20 世紀後半)
歴史的視点	I. 比較言語学、文献学 (19 世紀)	IV. 歴史社会言語学、歴史語用論など (21 世紀)

(堀田 2017 より。高田・小野寺・青木編 2018: 11)

② 分類から見てくる特徴

図：歴史語用論の分類（Jacobs and Jucker 1995; 図式は高田・小野寺・青木 2018: 7 より）



(1) 歴史語用論は、ヨーロッパ的語用論(a)とアングロ・アメリカ的語用論(b)の両方を捉えている。社会全体のコンテクストに基盤を置く a と含意や場面における意味を中心に置く b があることで、a・b というかなり様相の異なった研究を取り込んでいる。

● 語用論的フィロロジー 研究例：高田 (2018)「辞書のなかの語用論--18 世紀ドイツにおける日常語への眼差し」

18 世紀後半ドイツにおける言語的営みについての研究。挨拶ことばなど話しことばを多くくみとったアーデルング編纂の『ドイツ語辞典』収録の例文を分析し、その言語使用には「身分制社会から市民社会への社会変動の進行プロセス」が反映していると結論づけた。

Valle (2004) "The pleasure of receiving your favour": The colonial exchange in eighteenth-century natural history.

18 世紀の英国—北米間で交わされた書簡（コーパス）の談話分析から、博物学に関するやりとりを通して、共同体が形成されているさまを描いた。植民地で発見された動物・植物の見本とともに命名の提案をイギリス Royal Society(王立協会)へ送り、イギリスからは科学知識・名称・分類が本や雑誌の形で返されていた。友情・温情もやりとりされていたと分析されている。

家入 (2018) など。

● 通時的語用論「形式—機能の対応付け」

1 つの言語形式に着目し、その意味発達や形態統語的变化を見る。文法化・語用論化・(間)主観化・構文化研究など。

研究例：「英語」Traugott and Schwenter (2000) "Invoking scalarity: The development of *in fact*.", Traugott 文法化・(間)主観化 (1982, 1989, 1995, 2003, 2010 など)、

Brinton 語用論標識の文法化 (1996, 2017) , 柴崎(2017), 小野寺(2020),
Narrog (2012)ほか多数.

「日本語」金水 (2011), 青木(2018), Onodera 談話標識の文法化・(間)主観化(2004,
2011, 2017) . 「韓国語」談話標識の文法化 Rhee (2020). 「ドイツ語」 Günthner
(2000), 佐藤 (2018) . 「(ラテン語から) イタリア語」 Ghezzi and Molinelli (2014).
「ネワール語」桐生 (2018). 「韓日対照」堀江・金 (2011). 「英日対照」Higashiizumi
(2006).

●通時的語用論「機能—形式の対応付け」

1つの言語機能に着目し、その通時的変遷を見るもの。

研究例：フィッツモーリス (2018)「18世紀の英語ポライトネス—立場依存的な
多義性と誠実さ」、新里 (2018)「古代語の係り結び・現代語のノダ構文・沖縄語
の係り結びの比較」、椎名 (2011)「何を「誓い」、何を「呪い」、何を「願う」の
か？」.

- (2) (1)と呼応する形で、言語現象を(a)マクロな視点で、また、(b)ミクロな視点で捉える
のか、その両方を擁する。(1)のヨーロッパ的伝統であるマクロ的な語用論では、より
広い社会的コンテクストが重要な関心事であり、社会言語学とも重複する。
Sociopragmatic (社会語用論)と呼ばれるのも、ヨーロッパにおいてである。IP r A や
Verschueren et al.(2003)によるハンドブックなども同様のスタンスを取る。(cf. 高田・椎
名・小野寺 2011: 19-20)

一方、アメリカ的伝統においては、語用論は「話者の意味を考える」分野である。
含意 (Grice 1975)や人の行為の意図などを考察。このミクロな枠組みでは社会的コン
テクストは外的要因と考え、社会言語学が扱うものとする。Horn and Ward (2004: xi)は、
社会学に基盤を置いたヨーロッパ的視点を境界線のあいまいなものとして排除し、「ア
ングロ・アメリカ的で、言語学・哲学的な語用論に絞って編纂する」と明言している。
(cf. 高田・椎名・小野寺 ibid.)

- (3) Historical Pragmatics と名付け、旗を上げたことで、各個別言語の研究領域で行われて
いた研究が、同じ土俵で行えるようになった。命名することで研究の顕在化がされる。
歴史語用論の名のもとに、英・日・独・伊語、リトアニア語・ネワール語・アラビア
語等の文法化研究。(また、最近では東アジア言語 (中・韓・日語) もまとまって語用
論研究を行う土壌もできてきた (East Asian Pragmatics))。

§ 4.意味機能変遷のもう1つの傾向?: 間主観的から接続的機能へ<通時的語用論より>

文法化・意味機能変遷の分野で、主観化・間主観化も含め、意味機能発達の傾向 (方向
性) について、これまでいくつもの提案がなされてきた。(a)の傾向は 1990 年代、2000 年

代を通して多くの言語の実例から実証されてきた.<ここから最終版 PDF をご参照下さい>

(a) propositional > ((textual) > (expressive)) (Traugott 1982, 1989)
命題的 接続的 表出的

ところが、最近、(b)という新たな 1 方向性が複数言語で確認され (Narrog 2012 (英・リトアニア語), Shinzato 2002(日), 朱・堀江 2020 (英・日・露・中語) 注目される。

(b) intersubjective > textual
間主観的 接続的

この講演の後半では、英・日・リトアニア語などの例をあげ、方向性(b)について考察し、1 つの提案を行う。

(a)の傾向は、のちに propositional > (textual > (inter)subjective)と考えられるようになったが (cf. Traugott and Dasher 2002: 94-95 and elsewhere)、では、(b)はもとの仮説的方向性(a)の反例にあたるのかどうかも議論に値する争点となりそうである。((inter)subjective は主観的または間主観的機能である。)

Selected References <References 全体は、最終版 PDF をご参照ください>

- 青木博史 (2018) 「準体助詞「の」の発達と定着：文法化の観点から」、高田・小野寺・青木 (編)『歴史語用論の方法』, 141-165.
- 家入葉子 (2018) 「従属節の配置に見る読者との対話：『カンタベリ物語』最終話「牧師の話」をめぐる」、高田・小野寺・青木 (編)『歴史語用論の方法』, 95-113.
- Brinton, Laurel J. (1996) *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- フィッツモーリス, スーザン (中安美奈子訳) (2018)「18 世紀の英語ボライトネス」, 高田・小野寺・青木 (編)『歴史語用論の方法』, 310-331.
- Ghezzi, Chiara and Piera Molinelli (2014) *Discourse and Pragmatic Markers from Latin to the Romance Languages*, Oxford University Press, Oxford.
- Günthner, Susanne (2000) “From Concessive Connector to Discourse Marker: The Use of *Obwohl* in Everyday German Interaction,” *Cause-Condition-Concession-Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*, ed. by Elizabeth Couper-Kuhlen and Bernd Kortmann, 439-468, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Higashiizumi, Yuko (2006) *From a Subordinate Clause to an Independent Clause: A History of English because-clause and Japanese kara-clause*, Hituzi Syobo Publishing, Tokyo.
- 堀江薫・金廷珉 (2011) 「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化：機能主義的類型論の観点から」, 高田・椎名・小野寺 (編)『歴史語用論入門』, 193-207.
- Horn, Laurence R. and Gregory Ward, eds. (2004) *The Handbook of Pragmatics*, Blackwell, Oxford.
- 堀田隆一 (2017) 「HiSoPra*に参加して (2)」『hellog～英語史ブログ』 #2884 (2017 年 3 月 20 日) <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2017-03.html>
- Jacobs, Andreas and Andreas H. Jucker (1995) “The Historical Perspective in Pragmatics,” *Historical Pragmatics*, ed. by Jucker, 3-33.

- Jucker, Andreas H., ed. (1995) *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*, John Benjamins, Amsterdam.
- 桐生和幸 (2018) 「ネワール語の名詞化辞=gu の意味拡張：16 世紀から現代における文法化と（間）主観的意味への変化」, 高田・小野寺・青木（編）『歴史語用論の方法』, 166-188.
- 金水 敏 (2011) 「丁寧語の語源と発達」, 高田・椎名・小野寺（編）『歴史語用論入門』, 163-173.
- 金水 敏・高田博行・椎名美智（編）(2014)『歴史語用論の世界：文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房, 東京.
- Narrog, Heiko (2012) “Beyond Intersubjectification: Textual Uses of Modality and Mood in Subordinate Clauses as Part of Speech-Act Orientation,” *English Text Construction* 5:1, 29-52.
- 小野寺典子 (2020) 「アメリカ英語における General Extenders の談話標識化・文法化」, 米倉よう子・山本修・浅井良策（編）『ことばから心へ：認知の深淵』, 278-289, 開拓社, 東京.
- Onodera, Noriko O. (2011) “The Grammaticalization of Discourse Markers (Chapter 50),” *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, ed. by Heiko Narrog and Bernd Heine, 614-624, Oxford University Press, Oxford. 佐藤恵 (2018) 「ドイツ語の前置詞 wegen の歴史的変遷：文法化と規範化」『歴史語用論の方法』高田・小野寺・青木（編）189-217.
- 椎名美智 (2011) 「何を「誓い」,何を「呪い」,何を「願う」のか?」, 高田・椎名・小野寺（編）『歴史語用論入門』, 112-128.
- 柴崎礼士郎 (2017) 「アメリカ英語における破格構文：節の周辺部に注目して」, 天野みどり・早瀬尚子（編）『構文の意味と広がり』, 201-221, くろしお出版, 東京.
- 新里瑠美子(2018)「古代語の係り結び・現代語のノダ構文・沖縄語の係り結びの比較」, 高田・小野寺・青木（編）『歴史語用論の方法』, 285-309.
- Shinzato, Rumiko (2002) “From Imperatives to Conditionals: The Case of ～Shiro/Are and ～Te Miro in Japanese,” *CLS* 38, 585-600.
- 朱冰・堀江薫 (2020) 「命令・禁止表現から接続表現へ：日中語における（間）主観化とテキスト機能の発達」, 山梨正明（編）『認知言語学論考 No.15』, ひつじ書房, 東京.
- 高田博行 (2018) 「辞書のなかの語用論—18 世紀ドイツにおける日常語への眼差し」, 高田・小野寺・青木（編）『歴史語用論の方法』, 28-54.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子（編）(2011)『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店, 東京.
- 高田博行・小野寺典子・青木博史（編）(2018)『歴史語用論の方法』ひつじ書房, 東京.
- Traugott, Elizabeth Closs (1982 (1980)) “From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization,” *Perspectives on Historical Linguistics*, ed. by W. P. Lehmann and Y. Malkiel, 245-271, John Benjamins, Amsterdam.
- Traugott, Elizabeth Closs (1989) “On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change,” *Language* 65:1, 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs (1995) “The Role of the Development of Discourse Markers in a Theory of Grammaticalization,” paper presented at ICHL XII, Manchester (August, 1995).
- Traugott, Elizabeth Closs (2010) “Grammaticalization,” *Handbook of Historical Pragmatics*, ed. by Andreas H. Jucker and Irma Taavitsainen, 97-126, De Gruyter Mouton, Berlin.
- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店, 東京.
- Valle, Ellen (2004) ““The Pleasure of Receiving Your Favour”: The Colonial Exchange in Eighteenth-Century Natural History,” *Journal of Historical Pragmatics* 5:2, 313-336.
- 山田孝雄 (1924) 『敬語法の研究』東京宝文館, 東京.

異なるタイプの言語の対照から見える普遍性—コリャーク語と英語の場合

呉人 恵

(富山大学)

1. はじめに

コリャーク語 (Koryak) は、シベリア北東端に分布する話者 2000 人ほどの小さな言語であるが、言語学的には新旧両大陸の「要」的な言語として注目されてきた (渡辺 1992)。講演ではコリャーク語を英語と対照する。具体的には、まず、英語とは異なる類型の特徴として、複統合性、アラインメント、結合価の増減、語順を取り上げ、両言語が複統合的 vs. 孤立的、能格型 vs. 主格対格・中立混合型、逆受動 vs. 受動、語用論的語順 vs. 統語論的語順など、形態的にも統語的にも対照的な特徴を示すことを見る。

次に、英語と類似した特徴として所有表現を取り上げ、英語の所有格形 / of 形とコリャーク語の 4 つの属格接辞の選択には名詞句階層 (Silverstein 1976) が関わっている点、両言語とも階層の上位・下位では有生性の尺度が、中位では談話的な尺度が働く点で共通していることを論じる。

2. コリャーク語概観

コリャーク語は、ロシア連邦カムチャツカ州旧コリャーク自治管区、ならびにオホーツク海を隔てた大陸のマガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区に分布する。コリャーク語を話すコリャークは大きく、トナカイ遊牧に従事する「チャウチュヴァン (cawcəvan)」と、海獣猟やサケ・マス漁に従事する「ヌムルウン (nəməlʃən)」に分かれる。講演で対象とするのは、このうち前者が話すチャウチュヴァン方言である。

コリャーク語は、チュクチ・カムチャツカ語族に属する。コリャーク語以外にこの語族に属する言語には、北からチュクチ語 (Chukchi)、ケレク語 (Kerek)、アリュートル語 (Alutor)、イテリメン語 (Itelmen) がある。

コリャーク語は子供たちが母語として学ばなくなってしまった危機言語である。コリャーク語を話せる人もほぼ全員ロシア語とのバイリンガルである。最年少の話者が 50~60 代であることを考えると、コリャーク語は、近い将来、死語となる公算が極めて高い。

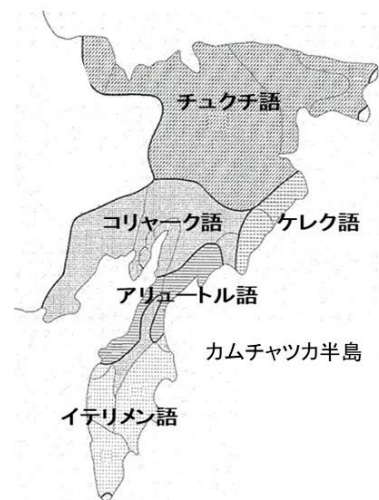


図 1 チュクチ・カムチャツカ語族

3. 英語との相違

3.1. 複統合性

英語が屈折的特徴を失い、孤立語化してきたことはよく知られているが、一方、コリャーク語は一語の中に多くの形態素を含むうる複統合的言語である。複統合性は、通常、動詞について言われるが、コリャーク語では、他言語では文に相当するような動詞の一語文 (holophrase) が容易に創出される。このような一語文の創出を可能にしているのは、屈折の面では多人称標示、派生の面では語彙的接辞¹、抱合、不連続形態素 (語幹の前後に配置される接周辞) などである (Kurebito 2017, 呉人 2020)。また、動詞語幹の前後には派生接辞、さらにその外側に屈折接辞が配置され、両者は絡まり合うことがない。すなわち、屈折部分と派生部分が明確に区別され、外側の屈折接辞を剥が

¹ 語彙的な動詞の意味を表わす接辞のこと (e.g. -u/-o 「食べる, 飲む」, -ŋəjt 「狩る」, -ŋta 「取りに行く」, -yijke/-yejka 「捕まえる」, -yili/-yle 「探す」, -jt 「～に行く」 etc.)。

していくと、内側の派生語幹が残る「玉葱の皮型形態法（‘onion skin’ morphology）」(Fortescue 2013:15) を示す。(1) では定形動詞の構造を示す。イタリックが屈折部分、普通体が派生部分を示す。

(1) [S/A/O/Inverse][TAM](Valency1)Incorporation(Valency2)**stem**(Valency3)[Pluralizer][TAM][S/A/O]

(2)(3) は形態素が玉葱の皮型に配置される複統合的な一語文の例である。

(2) mət-ko-qoja-ɣijke-lqew-ŋəvo-la-ŋ
1PL.S-IPF-reindeer-catch-go-HAB-PL-IPF
「私たちはいつもトナカイを捕まえに行っている／た」

(3) tʰ-ə-toja-ajɣəvenʹŋ-ə-qoja-n-omak-av-ə-k
1SG.S-E-new-evening-E-reindeer-CAUS-gather-CAUS-E-1SG.S
「私はトナカイを晩早いうちに集めた」

(2)(3) とともに、文ではなく 1 語である。(2) では、接尾辞 -lqew「～しに行く」が主要部となり、その前にはこれを副詞的に修飾する語彙的接尾辞 -ɣijke「捕まえる」が付加される。さらに -ɣijke「捕まえる」の意味上の目的語である名詞語幹 qoja「トナカイ」がその前につく。一方、-lqew の後ろには習慣的意味を持つ -ŋəvo が後接する。こうして形成された派生動詞語幹を、屈折接辞 ko-..ŋ (不完了), -la (複数), さらに一番左側の人称接頭辞 mət- (1 複主) が取り囲み、語が完結している。この一語文には 7 形態素が含まれる。(3) では、主要部である他動詞 n-omak-av「集める」は、使役の n-..-av と omak「集まる」からなる。この前に目的語に相当する qoja「トナカイ」が抱合されている。さらにその前に「夕方早く」を意味する toja-ajɣəvenʹŋ (toja「新しい」, ajɣəvenʹŋ「夕方」) が付加された派生語幹を、語頭・語末から人称接周辞 tʰ-..-k (1 単主) が取り囲み、語が完結している。この一語文には 6 形態素が含まれる。

3.2. アラインメント

格標示のアラインメントとしては、主格・対格型、能格型、中立型、三立型、他動詞文中和型、活格型が知られている。英語は、2 人称以外の人称代名詞は主格・対格型、その他は中立型を示す。一方、コリヤーク語は能格型である。すなわち、自動詞主語と他動詞目的語は絶対格（ゼロ格）を取り、他動詞主語がこれらとは異なる能格を取る。

(4) は自動詞文、(5) は他動詞文である。(4) の主語は (5) の主語とではなく、(5) の目的語と同じ絶対格単数を取る。

(4) enʹpic jet-ti.
father (ABS.SG) come-PF
「父は来た」

(5) enʹpici-te ʃejŋew-ni-n kəmiŋ-ə-n
father-INSTR(ERG) call-3SG.A-3SG.O child-E-ABS.SG
「父は子供を呼んだ」

(5) で、他動詞主語 enʹpici「父」は道具格の -te を能格として用いている。しかし、すべての名詞が同様なわけではなく、名詞により専用の能格、場所格、道具格が使い分けられる。絶対格が主要格であるのに対して、これらは斜格であることが重要である。3 つの格の使い分けには、表 1 のような名詞句階層 (Silverstein 1976) が関わっている（紙幅の関係上、単数の場合のみを挙げる）。

表 1 能格標示における名詞句階層

能格標識	-nan (能格)	-ne-k (場所格)	-te/-ta (道具格)
階層	A	B	B/C C
名詞句	人称代名詞	固有名詞 (人・動物) 「誰」, 親族呼称	人間名詞, 親族名 称, 指示代名詞, 「どれ」 動物名詞, 無生物 名詞

階層の高い順から、A, B, B/C, C 階層とする。最上位の A には人称代名詞、B には固有名詞、疑問人称代名詞「誰」、親族呼称、C には動物名詞や無生物名詞が該当する。さらに、B としても C としてもふるまう名詞があり、人間名

詞、親族名称、指示代名詞、疑問代名詞「どれ」が該当する。

名詞句階層は、Silverstein(1976) がオーストラリア先住民諸語に見られる能格と主格・対格の分布の仕方から着想したものであり、(6) のような階層をなしているとされる。

- (6) 【シルバースティーンの名詞句階層】1 人称代名詞>2 人称代名詞>3 人称代名詞>親族名詞・固有名詞>人間名詞>動物名詞>無生物名詞

細部の違いはあるものの、コリャーク語の能格標示が示す階層と基本的には共通している。ところで、コリャーク語では、名詞句階層は能格標示だけではなく格標示全体に及んでいる。後述する所有表現もその例外ではない。

3.3. 結合価の増減

能格構文では、絶対格（ゼロ格）を取る自動詞主語、他動詞目的語が、焦点として前景化している。これに対して、能格（斜格）を取る他動詞主語は背景化している。コリャーク語には、他動詞主語をはじめとする斜格名詞を前景化させるために結合価の増減を起こす手段がある。他動詞主語を絶対格に昇格させ、同時に目的語を斜格に降格させるのが逆受動（antipassive）、その他の付加詞的な斜格名詞を絶対格に昇格させ、目的語化させるのが充当相（applicative）である。いずれも英語にはない構文である。一方、コリャーク語には、英語のような受動文はない。他動詞目的語は上述のように絶対格を取って前景化しているため、受動化は必要ない。(7a) は他動詞文、(7b) は逆受動化接頭辞 *ine-* がついた逆受動文の例である。逆受動文は他動詞主語を絶対格に昇格させ、他動詞目的語を場所格に降格させることにより、自動詞活用する。

(7a) *ajyøve vava-na-k ye-jici-linew picy-u.*
yesterday grandma-HUM.SG-LOC (ERG) RES-gather-3SG.O food-ABS.PL

(7b) *ajyøve vava ye-ine-jici-linew picy-ə-k.*
yesterday grandma (ABS.SG) RES-ANTIP-gather-3SG.S food-E-LOC

「おばあちゃんは昨日、食料を集めた」

(8a) は受益者「私」を与格で表わした自動詞文、(8b) は「私」を絶対格に昇格させ目的語にした充当相である。

(8a) *enniw yəmk-ə-ŋ ənn-ə-jet-i.*
uncle (ABS.SG) 1SG-E-DAT fish-E-bring-PF

(8b) *ənniv-ə-ne-k yəmmo ine-nn-ə-jet-i.*
uncle-E-HUM.SG-LOC (ERG) 1SG.ABS 1SG.O-fish-E-bring-PF

「叔父は私に魚を釣ってきてくれた」

3.4. 語順

英語の基本語順は、AOV 型である。一方、コリャーク語では基本語順を決めるのが難しい。コリャーク語の談話・民話テキストである Kurebito (ed.)(2014, 2016, 2017, 2018, 2019) から他動詞平叙文 1,702 例を抽出し、A, O, V の出現と語順を調べたところ、図 1 のようになった。OV と V が同程度の高い出現率を示し、VO, AV と続く。一方、A, O, V がすべて揃っている他動詞文は、全体の 11% に満たない。加えて、A, O, V の配列順序は、6 通りすべて可能である。よって、コリャーク語の語順は、英語のような統語的な語順ではなく、語用論的要因により決定づけられると考えざるをえない。

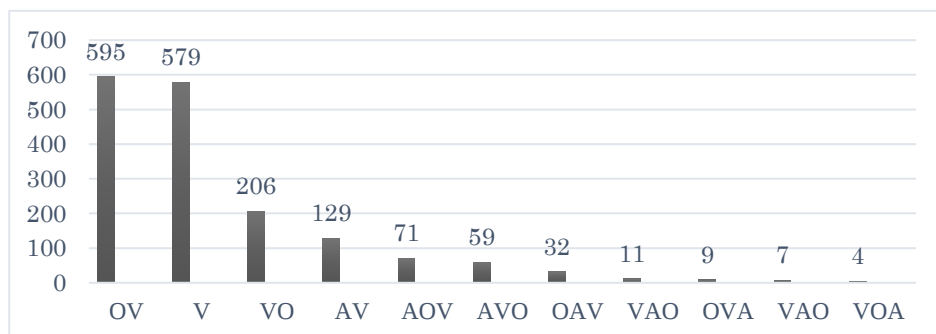


図 2 コリャーク語テキストにおける A, O, V の出現と語順

4. 英語との類似：所有表現

以上見たように、類型的にも両言語は大きくかけ離れた言語であるが、その一方で、顕著な類似点を見出すこともできる。講演では、所有表現に着目する。英語では所有関係は、所有格形 (9a) と of 形 (9b) の2種類により表わされる。

(9a) Mary's house

(9b) the wall of the house

一方、コリャーク語では所有関係を表わすのに、-nin, -nən, -in/-en, -kin/-ken という4種類の属格接辞が使い分けられる(語末形。母音の異なる異形態は母音調和による)。この使い分けにも、表2のような名詞句階層が関わっている(呉人 2019)。無生物名詞のうち、時空間を表わす名詞がひとつのクラスDをなし名詞句階層の最下位に位置するために、能格標示よりも階層がひとつ増えている。

表2 所有形式に見る所有者(単数)の階層

所有接辞	A	B	B/C	C	D
	-nin	-nən	-nən~in/-en	-in/-en	-kin/-ken
名詞の種類	人称代名詞	固有名詞・親族呼称・「誰」・指示代名詞	人間名詞	親族名称・動物名詞・無生物名詞	無生物名詞(時空間)

Aの-ninは人称代名詞、Bの-nənは固有名詞、親族呼称、「誰」を表わす疑問人称代名詞、指示代名詞、Cの-in/-enは親族名称、動物名詞、無生物名詞、Dの-kin/-kenは時空間を表わす無生物名詞につく。さらに、人間名詞は、B,Cどちらの接辞も取ることができる。(10a)はAの接辞を取る1人称単数の人称代名詞、(10b)はBの接辞を取る親族呼称、(10c)はBの接辞、Cの接辞の両方を取る人間名詞、(10d)はCの接辞を取る親族名称、(10e)はDの接辞を取る無生物名詞の例である。

(10a) yəm-nin jaja-ŋa

1S-GEN house-ABS.SG 「私の家」

(10b) appa-nən ujetik

daddy-GEN sledge (ABS.SG) 「父さんの橇」

(10c) el'ʕa-nən ~ el'ʕ-en kojŋ-ə-n

woman-GEN woman-GEN cup-E-ABS.SG 「女のコップ」

(10d) en'pic-in ujetik

father-GEN sledge (ABS.SG) 「父の橇」

(10e) jaja-ken təllətəl

house-GEN door (ABS.SG) 「家の入口」

ところで、名詞句階層は一体、どのような尺度によって成り立っているのだろうか? 名詞句階層は、'Animacy hierarchy' (Comrie 1979:322) と呼ばれるように、有生性が関わっているとされてきた。コリャーク語でも、人称代名詞が最も階層が高く、無生物名詞が最も階層の低いことから、有生から無生へと階層化していることは間違いなさそうである³。一方、(10c)のようにB接辞もC接辞も取ることができる人間名詞の場合には、有生性とは異なる尺度が働いていると考えるべきである。(11a)(11b)は、それを探る手掛かりとなる例である。所有者である tumy 「友人」という人間名詞は、(11a)ではBの-nənを取り、(11b)ではCの-inを取っている。

(11a) 【私は、友だちのジュカ、ジャクジェント、コッテと一緒に犬橇に初めて乗ったという話をしている】

jatan yəm-ə-k tumy-ə-nən en'pic-in ko-tva-ŋ
only 1S-E-LOC friend-E-GEN father-GEN IPF-be-IPF

² 必ずしも、常に意味的に所有関係を表わすわけではないが、便宜的に「所有」と呼ぶことにする。

³ 能格など他の格標示では、動物名詞と無生物名詞が同じ階層に分類されていることを考え合わせると、厳密には人間・非人間の区別とすべきかもしれない。

janot yakanje.

first dog.sledge (ABS.SG)

「はじめ、私の友だちのお父さんにだけ犬橇があった」

(11b) 【隣家でろうそく用に使っている豚の脂を欲しがっている私に対して、母親が】

unekem tumy-in ejek n-a-nu-ni-n.

seemingly friend-GEN candle (ABS.SG) OPT-E-eat-3SG.A-3SG.O

「(この子は) どうやらよその蠟燭を食べようとしているのね」

(11a) では、「友だち」が「ジュカ、ジャクジェント、コッテ」であることはすでに言及されており、旧情報である。したがって、特定性・指示性が高いと考えられる。一方、(11b) では、隣家のことを指しているものの、特定の誰かを想定しているわけではない。この場合の tumy は、「よその」くらいに訳するのが適切である。したがって、(11b) は (11a) に比べると、特定性・指示性が低い。

以上から、コリャーク語の属格標示に見られる名詞句階層においては、階層の上位・下位では有生性の尺度が、中位では特定性という談話的尺度が働いていると考えられる。

5. 英語との対照

5.1. 階層化の類似性

藤川 (2019) によれば、Deane (1987) は英語の所有格形/of 形の選択に基本的に名詞句階層が関わっていることを指摘している。Deane (1987) が示した名詞句階層は (12) の通りである。

- (12) 1st person pronoun > 2nd person pronoun > 3rd person anaphor > 3rd person demonstrative > Proper name > Kin-Term > Human and animate NP > Concrete object > Container > Location > Perceivable > Abstract (Deane 1987:67)

階層の上位の名詞句は所有形の容認度が高く、of 形の容認度が低い。一方、階層の下位の名詞は所有格形の容認度が低く、of 形の容認度が高い。人称代名詞から無生物名詞へと階層化している点では、コリャーク語とも共通している。ただし、相違点もある。まず、人称代名詞は、英語では1人称>2人称>3人称と階層化しているのに対し、コリャーク語では区別がない。指示詞、固有名詞、親族名詞（親族呼称・親族名称）も英語では階層化しているが、コリャーク語では親族名称以外は同じB階層に分類される。人間名詞は、英語では有生名詞として一括りにされているのに対し、コリャーク語では動物名詞は無生物名詞とともにC階層、人間名詞はB/C階層と別個に分類されている。

5.2. 尺度の類似性

コリャーク語では上述の通り、階層の上位と下位では有生性が尺度となっている一方、中位では特定性という談話的要因が尺度となっていることを見た。一方、英語について、藤川 (2019) は、Rosenbach (2008) が、英語の所有格形/of 形の選択には ①有生性の尺度：人間>有生物>無生物と②指示性/定性の尺度：代名詞>固有名詞>定>不定>不特定という2つの尺度が独立して働いているとしていることを受け、一般化を試みている (13) (図3)。

- (13) 英語の所有格形/of 形の選択に関して、
a. 有生性は名詞句階層の高い位置と低い位置で優位に働く。
b. 談話的要因は名詞句階層の中心に進むにつれて、その影響の度合いが大きくなる。

(藤川 2019:25-26)

階層	人称 > 固有 > 親族 > 人間・有生 > 具体物 > 抽象物
所有表現	← 所有格形 of 形 →
有生性	← →
談話的要因	→ ←

図3 英語の階層における尺度の反映の度合い

すなわち、階層の上位では所有格形、下位では of 形が有生性により相補的に分布しているが、中位では両形は併存し、談話的要因によって使い分けられている。具体的には所有者が階層中位に近いほど、所有者がトピックで被所有者がフォーカスである場合には所有格形が、所有者がフォーカスで被所有者がトピックである場合には of 形が選択される。この一般化が、コリャーク語の4つの所有表現にも当てはまることは、上述の通りである。

6. おわりに

本発表では、系統的にも類型的にもきわめて異質なコリャーク語と英語がいずれも名詞句階層を基盤として所有表現を形成していることを見た。所有表現におけるこのような顕著な類似性は、言語に名詞句を認知的際立ちによって秩序づけるといったような普遍的な傾向がある可能性を示唆している。

【略語】 A=agent-like argument (transitive subject), ABS=absolutive, ANTIP=antipassive, CAUS=causative, DAT=dative, E=epenthetic, ERG=ergative, GEN=genitive, HAB=habitual, HUM=human, INSTR=instrumental, IPF=imperfect, LOC=locative, O=object, OPT=optative, PF=perfect, PL=plural, RES=resultative, S=single argument (intransitive subject), SG=singular

【参考文献】

- Comrie, B. (1979) The Animacy Hierarchy in Chukchee. In: P. R. Clyne, W. F. Hanks, and C. L. Hofbauer (eds.) *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels, Including Papers from the Conference on Non-Slavic Languages of the USSR*, 322–329. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Deane, P. (1987) English Possessives, Topicality, and the Silverstein Hierarchy. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 13: 65-76.
- Fortescue, M. (2013) Polysynthesis in the Arctic/Sub-Arctic: How Recent Is It? In: B. Bicke, L. A. Grenoble, D. A. Peterson, and A. Timberlake (eds.) *Language Typology and Historical Contingency. Festschrift for Johanna Nichols*, 241-264. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (Typological Studies in Language 104).
- 藤川勝也 (2019) 「英語の所有表現に見られる名詞句階層」 富山大学人文学部編『富山大学人文学部叢書Ⅲ人文知のカレイドスコープ』, 15-27. 富山: 桂書房.
- 呉人恵 (2019) 「コリャーク語の所有表現と名詞句階層—英語との共通性に着目して」 富山大学人文学部編『富山大学人文学部叢書Ⅲ人文知のカレイドスコープ』, 28-40. 富山: 桂書房.
- 呉人恵 (2020) 「コリャーク語の複統合性再考: その「新しさ」と人称スロットの特異性をめぐって」『北方言語研究』 10: 41-59.
- Kurebito, M. (2017) Koryak. In: M. Fortescue, M. Mithun, and N. Evans (eds.) *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, 832-850. Oxford: Oxford University Press.
- Kurebito, M. ed. (2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2017) *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2018) *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, M. ed. (2019) *Koryak Text 5*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Silverstein, M. (1976) Hierarchy of Features and Ergativity. In: R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171. Canberra: Australian National University.
- 渡辺己 (1992) 「新旧両大陸の要: チュクチ・カムチャツカ語族」 宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』, 147-177. 東京: 三省堂

自由選択表現の意味と分布について
(On the Meaning and Distribution of Free Choice Items)

中西公子 (NAKANISHI Kimiko)
お茶の水女子大学 (Ochanomizu University)

1. 不定語システム

- 日本語の不定語システム (Kuroda 1965)
 - a. 疑問: 誰が来ましたか?
b. 存在量化: 誰かが来た。
c. 全称量化: 誰もが来た。
d. 否定極性: 誰も来なかった。
- 「不定語+でも」= 自由選択表現 (Nishigauchi 1990 など)
 - a. 誰でも来られる。
b. Anyone can come.
 - 「不定語+でも」は、*any*とは異なる意味的性質を持つ
 - これは、「不定語+でも」が譲歩条件節(*concessive conditional clause*)であるとすれば説明できる
(例: 誰でも = 誰であつても, 誰であろうが, ...)
- 構成
 - 「不定語+でも」と *any* の意味的相違
 - 「不定語+でも」の譲歩条件節としての分析
 - 分析を用いた意味的相違の説明

2. 「不定語+でも」と *any* の意味的相違

- 相違 1: 必然性と出来事を表す文での容認度 (Horn 1972, Ladusaw 1979, Carlson 1981)
 - a. 可能性: John may eat anything.
b. 必然性: *John must eat anything.
c. 出来事: *Yesterday John ate anything.
 - a. 可能性: ジョンは何でも食べていい。
b. 必然性: ジョンは何でも食べねばならない。
c. 出来事: 昨日ジョンは何でも食べた。
- 相違 2: “subtriggering”の必要性 (LeGrand 1975, Dayal 1998, 2004, 2009, 2013, Aloni 2007)
 - a. 必然性: John must eat anything that Mary cooks.
b. 出来事: Yesterday John ate anything that Mary cooked.
 - a. 必然性: ^(?)ジョンはメアリーが作る何でも食べねばならない。
b. 出来事: ^(?)昨日ジョンはメアリーが作った何でも食べた。
- 相違 3: 反復の解釈の有無 (Dayal 1998, 2004, Jayez and Tovenar 2005)
 - a. Mary sang for anyone who wanted to hear her. (Dayal 1998: 465)
b. Anybody who was there at that time died in the blast. (Dayal 2004: 16)
 - a. メアリーは彼女の歌を聞きたがった誰のためにでも歌った。
b. ??その時そこにいた誰でも爆破で死んだ。
- 相違 4: 命令文での解釈
 - a. Confiscate any liquor. ∀ (Dayal 1998: 461)
b. Press any key to continue. ∃ (Giannakidou 2001: 660)
 - a. どの酒でも没収してください。∀
b. どのキーでも??(いいから)押してください。∃

3. 譲歩条件節としての「不定語+でも」

- 譲歩条件節: *wh-ever, no matter wh-*, etc.

(11) Whoever comes to the party, John will be pleased.

(12) 誰が{来ても/来たって/来ようが/来ようと(も)}, 太郎は喜ぶだろう。

- 「不定語+でも」は譲歩条件節である (中西・平岩 2019, Hiraiwa and Nakanishi 2020, to appear)

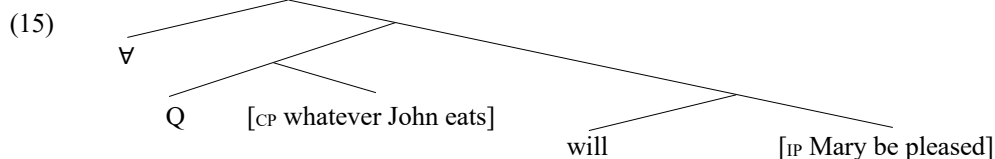
(13) 誰でも = 不定代名詞「誰」 + コピュラ「で」 + 「~~あつて~~」 + 「も」

- (12)と同じパターン (誰でも、誰だって、誰でもだろうが、誰だろうが、誰だろうと(も))
- 節なので格助詞と共に起不可 (*誰でもが、*誰でもを)

4. 譲歩条件節「不定語+でも」の構成的分析

- Rawlins (2008, 2013)の譲歩条件節の分析 (Hamblin 1973 に基づく)

(14) Whatever John eats, Mary will be pleased.

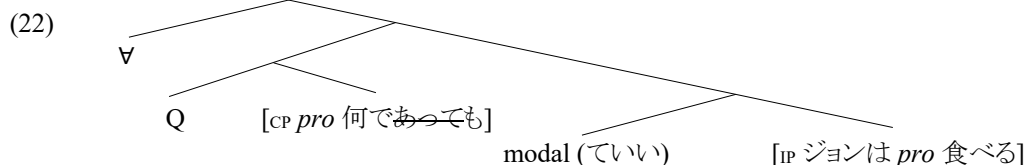


- (16) a. $\llbracket \text{what} \rrbracket^{w,g} = \llbracket \text{whatever} \rrbracket^{w,g} = \{x \in D_e : \text{non-human}(x)(w)\}$
 b. $\llbracket \text{whatever John eats} \rrbracket^{w,g} = \{p : \exists x [\text{non-human}(x)(w) \ \& \ p = \lambda w'. \text{John eats } x \text{ in } w']\}$
 c. $\llbracket Q \rrbracket^{w,g}(\llbracket \text{whatever John eats} \rrbracket^{w,g}) = \{p : \exists x [\text{non-human}(x)(w) \ \& \ p = \lambda w'. \text{John eats } \underline{\text{only}} \ x \text{ in } w']\}$
 (17) $\llbracket Q\alpha \rrbracket^{w,g} = \llbracket \alpha \rrbracket^{w,g}$ defined only if exhaustivity and mutual exclusivity are satisfied
 (18) $\llbracket \forall \alpha \rrbracket^{w,g} = \{\lambda w'. \forall p [p \in \llbracket \alpha \rrbracket^{w,g} \rightarrow p(w') = 1]\}$ (Kratzer and Shimoyama 2002)

- (16a): *wh*-句は個体の集合を表す
 $\{\text{meat, fish, ...}\}$
- (16b): 譲歩条件節は命題の集合を表す
 $\{\text{John eats meat, John eats fish, ...}\}$
- (16c): 譲歩条件節は疑問節であり、(17)の疑問演算子と組み合わせり命題の集合を表す
 $\{\text{John eats } \underline{\text{only}} \text{ meat, John eats } \underline{\text{only}} \text{ fish, ...}\}$
- 譲歩条件節は、主節のモーダルの定義域に制限を与え、その結果、条件文の集合が得られる
 (19) $\{\text{if John eats only meat Mary will be pleased, if John eats only fish Mary will be pleased, ...}\}$
- (19)は(18)の全称量化演算子と組み合わせり、(20)が得られる
 (20) $\{\text{if John eats only meat Mary will be pleased, } \underline{\text{and}} \text{ if John eats only fish Mary will be pleased, } \underline{\text{and}} \text{ ...}\}$

- 譲歩条件節「不定語+でも」の分析

(21) ジョンは [CP 何でも] 食べていい。 (= (4a))



- 譲歩条件節内の *pro* = 主語
- 主節の *pro* = 「何でも」に代わる項 ((21)の目的語)
 (21') (それが) 何であつても、ジョンは (それを) 食べていい
 = 'Whatever (it) is, John may eat (it).'

cf. 自由関係節 (free relative) vs. 譲歩条件節 (Dayal 1997, Izvorski 2000a,b, Hirsch 2016)

- (23) a. John may eat whatever (Mary cooks).
 b. Whatever it is (that Mary cooks), John may eat it.

- $pro = E$ タイプ代名詞 (cf. Hirsch (2016)の(23b)の分析)
- (24) $\llbracket pro \rrbracket^{w,g} = \lambda x. \Pi(x)(w)$, where Π is a contextually salient property (cf. Tomioka 2003: 326)
e.g., pro in (22) / it in (23b) = the thing that Mary cooks

1. 不定語「何」は個体の集合を表す (Shimoyama 2001, 2006, Kratzer and Shimoyama 2002)
{meat, fish, ...}
2. 譲歩条件節は命題の集合を表す
{the thing that Mary cooks is meat, the thing that Mary cooks is fish, ...}
3. 譲歩条件節は疑問節であり、(17)の疑問演算子と組み合わせり命題の集合を表す
{the thing that Mary cooks is only meat, the thing that Mary cooks is only fish, ...}
4. 譲歩条件節は、主節のモーダルの定義域に制限を与え、その結果、条件文の集合が得られる
(25) {if the thing that Mary cooks is only meat, John may eat the thing that Mary cooks (= the meat),
if the thing that Mary cooks is only fish, John may eat the thing that Mary cooks (= the fish), ...}
5. (25)は(18)の全称量化演算子と組み合わせり、(26)が得られる
(26) {if the thing that Mary cooks is only meat John may eat the meat,
and if the thing that Mary cooks is only fish John may eat the fish, and ...}

5. 相違 1: 必然性と出来事を表す文での容認度

- (27) a. 可能性: John may eat anything.
b. 必然性: * John must eat anything.
c. 出来事: * Yesterday John ate anything.
- (28) a. 可能性: ジョンは何でも食べていい。
b. 必然性: ジョンは何でも食べねばならない。
c. 出来事: 昨日ジョンは何でも食べた。

• Menéndez-Benito (2010)の *any* の分析

- (i) *any* = 全称不定代名詞 (= (18)の全称量化演算子 + 不定代名詞)
- (ii) *any* が導入する代替命題は相互排他的 (mutually exclusive) (= *Excl* 演算子)

- (29) a. 可能性: $[\forall [IP_2 \text{ may } [\text{Excl } [IP_1 \text{ John eat anything}]]]]$
b. 必然性: $[\forall [IP_2 \text{ must } [\text{Excl } [IP_1 \text{ John eat anything}]]]]$
c. 出来事: $[\forall [\text{Excl } [IP_1 \text{ John ate anything}]]]$

- (30) a. 可能性: {there is an accessible world in which John eats only carrots, and there is an accessible world in which John eats only tomatoes, and ...}
b. 必然性: {in all accessible worlds John eats only carrots, and in all accessible worlds John eats only tomatoes, and ...} → *contradiction!*
c. 出来事: {John ate only carrots, and John ate only tomatoes, and ...} → *contradiction!*

• 「不定語+でも」の分析

- (31) a. 可能性: {if it is only meat John may eat the meat, and if it is only fish John may eat the fish, and ...}
b. 必然性: {if it is only meat John must eat the meat, and if it is only fish John must eat the fish, and ...}
c. 出来事: {if it was only meat John ate the meat, and if it was only fish John ate the fish, and ...}
- 相互排他性 (mutually exclusivity) が譲歩条件節内にあるので、矛盾が生じない

• 英語の譲歩条件文: (28)と同じ分布

- (32) a. 可能性: Whether he is sick or not, Alfonso can stay home from school. (Rawlins 2013: 126)
b. 必然性: Whatever Alfonso has, he should stay home. (*ibid.*: 146)
c. 出来事: Last week, whoever Alfonso talked to, he got bad advice. (*ibid.*: 115)

6. 相違 2: “subtriggering”の必要性

- (33) a. 必然性: John must eat anything *(that Mary cooks).
b. 出来事: Yesterday John ate anything *(that Mary cooked).
- (34) a. 必然性: ジョンは(メアリーが作る)何でも食べねばならない。
b. 出来事: 昨日ジョンは(メアリーが作った)何でも食べた。

- “subtriggering”により、*pro* の解釈が容易になる
 - (35) a. ジョンは何でも食べた
b. [_{CP} *pro* 何であっても] ジョンは *pro* 食べた
 - (36) $\llbracket \textit{pro} \rrbracket^{w,g} = \lambda x. \Pi(x)(w)$, where Π is a contextually salient property (= (24))
- 「不定語＋でも」は譲歩条件節である: 付加部であり、項ではない
 - (37) a. ジョンはメアリーが作ったものを何でも食べた
b. [_{CP} *pro* 何であっても] ジョンはメアリーが作ったものを食べた
- 7. 相違 3: 反復の解釈
 - (38) a. Mary sang for anyone who wanted to hear her.
b. Anybody who was there at that time died in the blast.
 - (39) a. メアリーは彼女の歌を聞きたがった誰のためにでも歌った。
b. ??その時そこにいた誰でも爆破で死んだ。
- 「不定語＋でも」が譲歩条件節であると、(39b)は不自然な解釈となる
 - (40) a. (そこにいた人が)誰であっても、(その人は)爆破で死んだ
b. {if the person who was there was only John he died in the blast, and if the person who was there was only Mary she died in the blast, and ...}
- 譲歩条件文は single-event の解釈を持ちうる
 - (41) Whoever entered a minute ago, I didn't recognize her. (Szabolcsi 2019: 334)
 - (42) a. (入って来た人が)誰であっても、私は(その人に)気づかなかった
b. {if the person who entered was only John I didn't notice him, and if the person who entered was only Mary I didn't notice her, and ...}
- 8. 相違 4: 命令文での解釈
 - (43) a. Confiscate any liquor. $\forall$
b. Press any key to continue. $\exists$
 - (44) a. どの酒でも没収してください。 $\forall$
b. ??どのキーでも押してください。 $\exists$
- 「不定語＋でも」が譲歩条件節であると、全称の解釈となる
 - (45) a. (それが)どの酒であっても、(それを)没収してください。
b. {if it is only whisky confiscate it, and if it is only rum confiscate it, and ...}
 - (46) a. (それが)どのキーであっても、(それを)押してください。
b. {If it is only Key A press it, and if it is only Key B press it, and ...}
- 「いいから」(cf. Watanabe 2013)
 - (47) どのキーでもいいから押してください。 $\exists$
 - (48) a. (それが)どのキーであってでもいい + だから、(それを)押してください
b. {if it is only Key A it is good, and if it is only Key B it is good, and ...}
c. + {press it} (存在の解釈)
- 補足の *any* (Jennings 1994, Horn 2000, 2005, Giannakidou 2001, Dayal 2004)
 - (49) Press a key, (it could be) any key.
- 「不定語＋でも＋いい」＝補足の譲歩条件文 (*whichever key it is, it is good*)
- 9. 結語
 - 「不定語＋でも」は自由選択の *any* とは異なり、名詞句ではなく譲歩条件節である
 - この分析により、両者の相違点を説明できる
 - さらに、「不定語＋でも」の“indifference”の意味も説明できる (Rawlins (2008, 2013)の“relational indifference”)
 - (50) 何でもいい、どうでもいい、どっちでもいい、どうにでもなれ、他

References

- Aloni, M. 2007. Free choice and exhaustification: An account of subtrigging effects. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 11, 16–30.
- Carlson, G. 1981. Distribution of free-choice *any*. *CLS* 17, 8–23.
- Dayal, V. 1997. Free relatives and *ever*: Identity and free choice readings. *Proceedings of SALT VII*, 99–116.
- Dayal, V. 1998. *Any* as inherently modal. *Linguistics and Philosophy* 5, 433–476.
- Dayal, V. 2004. The universal force of free choice *any*. *Linguistic Variation Yearbook*, 5–40.
- Dayal, V. 2009. Variation in English free choice items. *Universals and Variation: Proceedings of GLOW in Asia VII*.
- Dayal, V. 2013. A viability constraint on alternatives for free choice. In A. Fălăuş ed., *Alternatives in Semantics*, 88–122. London: Palgrave Macmillan.
- Giannakidou, A. 2001. The meaning of free choice. *Linguistics and Philosophy* 24, 659–735.
- Hamblin, C. 1973. Questions in Montague English. *Foundations of Language* 10, 41–53.
- Hiraiwa, K., and K. Nakanishi. 2020. Bare indeterminates in unconditionals. *Proceedings of the 94th Annual Meeting of the Linguistic Society of America*.
- Hiraiwa, K., and K. Nakanishi. to appear. Japanese free-choice and existential indeterminates as hidden clauses. *WAFL* 15. Cambridge, MA: MITWPL.
- Hirsch, A. 2016. A compositional semantics for *wh-ever* free relatives. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 20, 341–358.
- Horn, L. 1972. On the semantics properties of logical operators in English. PhD dissertation, UCLA.
- Horn, L. 2000. ANY and EVER: Free choice and free relatives. *IATL* 15, 71–111.
- Horn, L. 2005. Airport '86 revisited: Toward a unified indefinite *any*. In G. Carlson and F. J. Pelletier eds., *Reference and Quantification: The Partee Effect*, 179–206. Stanford: CSLI.
- Izvorski, R. 2000a. Free adjunct free relatives. *WCCFL* 19, 232–245.
- Izvorski, R. 2000b. Free relatives and related matters. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Jayez, J., and L. Toven. 2005. Free choiceness and non-individuation. *Linguistics and Philosophy* 28, 1–71.
- Jennings, R. 1994. *The Genealogy of Disjunction*. New York: Oxford University Press.
- Kratzer, A., and J. Shimoyama. 2002. Indeterminate pronouns: The view from Japanese. In *Proceedings of the 3rd Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 1–25.
- Kuroda, S.-Y. 1965. Generative grammatical studies in the Japanese language. Ph.D. dissertation, MIT.
- Ladusaw, W. 1979. Polarity sensitivity as inherent scope relations. Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.
- LeGrand, J. 1975. *Or* and *any*: The syntax and semantics of two logical operators. Ph.D. dissertation, University of Illinois.
- Menéndez-Benito, P. 2010. On universal Free Choice items. *Natural Language Semantics* 18, 33–64.
- 中西公子・平岩健. 2019. 「日本語の裸不定語－譲歩条件節における認可メカニズムを通して－」. 澤田治・岸本秀樹・今仁生美(編)『極性表現の形式・意味・機能』154–179. 開拓社.
- Nishigauchi, T. 1990. *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Rawlins, K. 2008. (Un)conditionals: An investigation in the syntax and semantics of conditional structures. Ph.D. dissertation, University of California at Santa Cruz.
- Rawlins, K. 2013. (Un)conditionals. *Natural Language Semantics* 40, 111–178.
- Shimoyama, J. 2001. WH-constructions in Japanese. Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts at Amherst.
- Shimoyama, J. 2006. Indeterminate phrase quantification in Japanese. *Natural Language Semantics* 14, 139–73.
- Szabolcsi, A. 2019. Unconditionals and free choice unified. *Proceedings of SALT* 29, 320–340.
- Tomioka, S. 2003. The semantics of Japanese null pronouns and its cross-linguistic implications. In K. Schwabe and S. Winkler eds., *The Interfaces: Deriving and Interpreting Omitted Structures*, 321–339. Amsterdam: John Benjamins.
- Watanabe, A. 2013. Ingredients of polarity sensitivity: Bipolar items in Japanese. In K. Gil, S. Harlow, and G. Tsoulas eds., *Strategies of Quantification*, 189–213. Berlin: Walter de Gruyter.

日本英語学会第 38 回大会アンケート

今大会に関するアンケートにご協力をお願いいたします。

いただきましたご意見は今後の大会での企画や運営の参考にさせていただきます。

以下の URL あるいは QR コードよりアクセスのうえ、ご入力をお願いいたします。

なお、アンケートは 11 月 7 日よりご入力いただくことができます。

URL: <https://forms.gle/do1CiVkJuQ8xr6uc7>

QR コード



本書に掲載されている論文・資料の著作権はその発表者にあります。

2020 年 11 月 7 日発行

編集・発行 日本英語学会

代 表 者 廣瀬 幸生

発 行 所 日本英語学会

<http://elsj.jp/>

〒113-0023

東京都文京区向丘 1-5-2

開拓社内

電話 (03) 5842-8900

©日本英語学会 2020
